



TITLE:

前漢鏡銘集釋

AUTHOR(S):

「中國古鏡の研究」班

CITATION:

「中國古鏡の研究」班. 前漢鏡銘集釋. 東方學報 2009, 84: 139-209

ISSUE DATE:

2009-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/134680>

RIGHT:

前漢鏡銘集釋

本稿は、前漢鏡の銘文の集成と注釋である。およそ出現年代順に計一二二種の銘文を配列し、最初に銘文番號と漢鏡の時期を示した。時期は岡村秀典「一九八四」の四期編年にしたが、三桁の數字で表示した銘文番號の百の位が時期をあらわしている。

漢鏡一期（五種）……前二世紀前半

漢鏡二期（五一種）……前二世紀後半

漢鏡三期（一二種）……前一世紀前半～中葉

漢鏡四期（五四種）……前一世紀後半～後一世紀前半

定型化した漢鏡銘については、樋口隆康「一九五三」が年代順のすぐれた分類をおこない、林裕己「二〇〇六」がそれを改訂している。この分類にある銘文については、注の冒頭にそれを記した。

類出する出典は略稱を用い、卷號と圖版番號を併記した。それ以外の参考文献は「」に著者名と發表年を記した。

句讀は、押韻または叶韻しているばあいは句點の「。」、そうでないばあいは讀點の「、」とした。韻部はおもに王力の説にもとづく

「中國古鏡の研究」班

郭錫良「一九八六」によるが、問題のあるばあいはカールグレン「Karlén 1934」や藤堂明保「一九六五」の説などを併記した。

銘文の用例については、中央研究院歷史語言研究所のデータベース「簡帛金石資料庫」を利用した。そのうち鏡銘は、同研究所の林素清氏が作成したものである。關連語句の檢索では、中央研究院の「漢籍電子文獻 瀚典全文檢索系統」を利用した。

漢鏡銘の集成は、羅振玉「一九二九」が一九〇あまりを集成し、それをもとにカールグレン「Karlén 1934」は二五七種の鏡銘それぞれについて釋讀、押韻、假借、字句の解説をおこなった。これをうけて、本研究班では、カールグレン論文を會讀するとともに、その後に出土した鏡をふくめて銘文の釋讀と注釋を作成した。カールグレン論文の會讀は、岡村秀典、佐野誠子、廣川守、光武英樹が分擔し、前漢鏡を對象とする本集釋は岡村がまとめた。ほかに班員として共同作業に参加されたのは、金文京、下垣仁志、原田三壽、福田美穗、向井佑介、森下章司、山泰幸の各位である。

●一〇一 漢鏡一期

脩相思、 長く相ひ思ひ、
母相忘。 相ひ忘るること母れ。
常樂未央。 常へに樂しみ未だ央きず。

(注)

林分類A2。巖窟一・四九／五四などの蟠螭紋鏡にみえる。前二世紀中ごろの製作で、前漢鏡でもっとも古い銘文である。「脩相思」の前に魚形(巖窟一・四九)や◎(巖窟一・五四)があり、それが起句となることを示す。第二句の「忘」と第三句の「央」が陽部で韻をふむ。

第一句はふつう「長相思」とあるところを「脩相思」としている。高誘の『淮南子』序に「以父諱長、故其所著諸長字皆曰脩」とあり、この銘文は淮南王安が父の諱を避けたもので、安の在位した前一六四年から前一二二年までのあいだに淮南國で製作された鏡と考證されている(高去尋・一九四)。蟠螭紋鏡は淮河流域から長沙にかけての南中國にひろく分布し、前二世紀中ごろという年代からも、それを裏づけている。

第三句の「常」は、とこしへ。『廣雅』釋詁一上に「長、常也。」とあり、王念孫『廣雅疏證』は「長者、大雅文王箋云、長、猶常也。常、長、聲相近、故漢京兆尹長安、王莽曰常安矣。」という。「未央」は、「いまだ盡さない」の意。『楚辭』離騷の「時亦猶其未央」の王逸注に「央、盡也。」とある。長久の時間をあらわす「長(脩)」や「常」、あるいは「無極」や「母絶」などは、漢鏡一期、二期の銘文に通有の語句である。『宋書』樂志に引く「漢鼓吹鏡歌・上之回」に「千秋萬歲、樂無極」とみえる。

●一〇二 漢鏡一期～二期

脩相思、 長く相ひ思ひ、
願母相忘。 相ひ忘るる母らんことを願ふ。
大樂未央。 大いに樂しみ未だ央きず。

(注)

銘文一〇一を改變したもので、蟠螭紋鏡(精華四・三四)にみえる。「脩相思」の前に一對の魚形がある。「忘」と「央」が陽部で韻をふむ。

第二句の「願」を精華四・三四は「煩」と釋す。前一五四年に没した宛胸侯劉執の墓に比定される江蘇省徐州市九里山三號墓(徐州博物館・一九九七)の蟠螭紋鏡は、魚形につづいて「安樂未央。脩相思、願母相忘。」と語順を變えている。「大樂未央」を「常樂未央」とした蟠螭紋鏡(梅原考古資料・六六九)もある。また、巖窟一・七〇の蟠螭紋鏡は「大樂未央。長相思、願母相忘。」とあり、「脩」を「長」と表記する。

●一〇三 漢鏡一期～二期

道路遼遠、 道路は遼遠にして、
中有關梁。 中に關梁有り。
鑑不隱請、 鑑は情を隱さず、
脩母相忘。 長く相ひ忘るること母れ。

(注)

ラゲレリウス舊藏 [Karlgren 1941: F31] の蟠螭紋鏡 (K・二五七) や草葉紋鏡(上海・三〇)にみえる(圖一)。偶數句の「梁」と「忘」とは陽部で韻をふむ。第一句の「遠」は元部、第三句の「請」は耕部で、ともに陽部と叶韻した可能性がある。

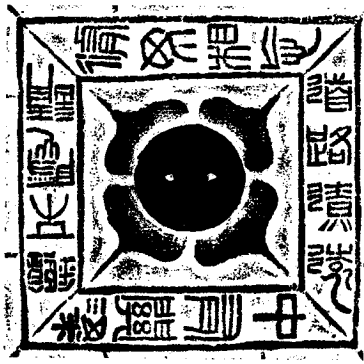


圖1 銘文103 (上海・30)

第一句の「道路遼遠」は『淮南子』覽冥訓にみえ、「楚辭」離騷は「路脩遠以多艱兮」、九章・抽思は「道卓遠而日忘兮」とある。第二句の「關梁」をK・二五七は「關津」と釋すが、字形からみて誤りである。「津」は眞部で、カールグレンは前半を元部と眞部の、後半を耕部と陽部の叶韻とみたのかもしれない。「關梁」は關所と橋梁で、『楚辭』九辯の「關梁閉而不通」や『淮南子』道應訓の「秦皇帝得天下、恐不能守、發邊戍、築長城、修關梁、設障塞、具傳車、置邊吏。」など用例が多い。

第三句の「請」は「情」の假借。『史記』禮書の「故至備、情文俱盡」の裴駰『集解』に「徐廣曰、古情字或假借作請、諸子中多有此比。」とある。遠く離ればなれになった二人でも、鏡に映しだされた相互の愛情には偽りがなかったことをうたったものである。鏡を「鑑」とするのは古い用法である。

●一〇四 漢鏡一期～漢鏡二期

大樂貴富母極。 大いに樂しみ、貴富は極まり母し。

與天地相翼。 天地と與に相ひ翼さん。

(注)

古鏡・中七や故宮・二三の蟠螭紋鏡にみる。「極」と「翼」とは職部で韻をふむ。故宮・二三は「與天地相翼」を初句とする。鏡銘での五字句はめずらしい。

K・三一「翼」の字義について検討し、「たすける」「ならぶ」と解釋した。『廣雅』釋詁一上に「翼、美也。」とあり、王念孫『廣雅疏證』は「翼者、毛鄭詩考正云、卷阿五章、有馮有翼。馮、滿也。謂忠誠滿於內。翼、盛也。謂威儀盛於外。盛、亦美也。」という。漢鏡二期の銘文二一四に「與天相壽、與地相長。」、銘文二二五に「與天無極、與美相長。」とあるため、「翼」は「美」で、第二句は「與天相壽(無極)、與地(美)相長。」と同義であろう。

●一〇五 漢鏡一期～二期

大樂貴富。 大いに樂しみ貴富ならん。

千秋萬歲、 千秋萬歲、

宜酒食。 酒食に宜し。

(注)

林分類B2。漢鏡一期の蟠螭紋鏡(梅原考古資料・六九)に出現し、長沙市子彈庫四一號墓(湖南・四六)など漢鏡二期の蟠螭紋鏡に頻出する。鈕座の圓圈に魚形ではじまる銘文が時計回りにめぐるのが多い。第一句の「富」と第三句の「食」が職部で韻をふむ。ただし、「貴富」は、漢鏡二期を境に韻字とは關係のないところで「富貴」となることが多くなる(中村・一九三四)。

●二〇一 漢鏡二期

大樂貴富。 大いに樂しみ貴富ならん。
得所喜。 喜む所を得。
千秋萬歲、 千秋萬歲も、
宜酒食。 酒食に宜し。

(注)

銘文二〇五に第二句の「得所喜」を加えたもの。安徽省淮南市唐山出土の蟠螭紋鏡〔徐孝忠・一九九二〕にみえる。第二句の「喜」は之部で、職部の「富」・「食」と叶韻する。王力は「富」や「食」など入聲の職部を之部から分離したが、漢鏡銘では之部と職部とは叶韻するのがふつうである。

第二句の「喜」は、このむ。つぎの銘文二〇二には「得所好」とあり、「好」と同義。『史記』扁鵲傳の「問中庶子喜方者」に『索隱』は「喜、好也、愛也。」と注する。

なお、國家博物館藏鏡〔楊桂榮・一九九二・圖一〇〕は、第一句を「宗樂貴富」とする。「宗」は『廣雅』釋詁三に「宗、眾也。」および「宗、聚也。」とあり、「おほい」の意。

●二〇二 漢鏡二期

大樂貴富。 大いに樂しみ貴富ならん。
得所好。 好む所を得。
千秋萬歲、 千秋萬歲、
延年益壽。 年を延ばし壽を益さん。

(注)

林分類B1。中山王劉勝夫人の寶棺を埋葬した河北省滿城二號墓〔中國社會科學院考古研究所編・一九八〇〕の出土鏡など、いわゆる方

格規矩をもつ蟠螭紋鏡にみえる。銘文二〇一の第四句を「延年益壽」とし、それにもない第二句を「得所好」に改變した。この「好」と「壽」が幽部で韻をふむ。第一句の「富」も職部で、これと叶韻した。第一句の前に魚形をいれるのがふつうである。富岡謙藏〔一九二〇・三六頁〕は第二句を「得長孫」と釋し、林分類もそれにしたがうが、K・三二や小校一五・一上の釋文が正しい。

●二〇三 漢鏡二期

愁思悲、 愁ひの思ひ悲し、
願見怨君不說。 見えんことを願ふも君の悦ばざるを怨む。
相思願母絕。 相ひ思ひ絶ゆる母らんことを願ふ。

(注)

小校一五・三(圖2)の蟠螭紋鏡などにみる。鈕座の圓圈に雜言體の銘文をめぐらす。釋讀に異說が多い。嚴釐一・七四/七五は「相思」からはじめるが、小校一五・三にしたがい「愁思悲」を第一句とした。第二・第三句の「說」と「絕」は月部で韻をふむ。小校は第三句を「無極」とするが、職部の「極」では月部の「說」と叶韻しない。長沙市三四二號墓〔中國科學院考古研究所編・一九五七〕の例は、第二句を「願君忠君不說」とする。「君に忠ならんと願ふも君悦ばず」と讀んだのであろう。第二句の「說」は「悦」の假借。また、古鏡・中七後の同式鏡には、これに類似するつぎの銘文がある。

愁思曾□、 愁ひの思ひ増ます悲し、
欲見母說。 見えんと欲すれども悦ぶこと母し。
相思願母絕。 相ひ思ひ絶ゆる母らんことを願ふ。

K・六八は第一句の缺字を「離」か「別」と推測する。三澤玲爾



圖2 銘文203 (小校15-3)

〔二九九四〕は「結」とし、「愁ひ思ひ曾^{かさ}ねて結ばれ」と讀む。そのばあい毎句押韻する。上海市福泉山三六號墓の蟠螭紋鏡〔王正書・一九八八〕は「愁思曾、愿見忠、君不説。相思願母絶。」と釋讀する。『楚辭』九章・惜誦に「願曾思而遠身」とあり、注に「曾、重也。言已舉此眾善、可以事君、則願私居遠處、唯重思而察之。」という。これはつぎの銘文二〇四にも類似し、主君から見捨てられたことを悲しみ、いつまでも相思することを願う内容である。

●二〇四 漢鏡二期～三期

内請質以昭明、 内は清質にして以て昭明なり、
光輝象夫日月。 光輝は夫の日月に象たり。
心忽穆而願忠、 心は忽穆として忠を願ふ、
然壅塞而不泄。 然れども壅塞して泄^{とほ}らず。
靡美之窮皚、 靡美の窮皚を懷ひ、



圖3 銘文204 (泉屋博古館藏：岡村拓本)

外承驪之可説。 歡を承くことの悦ぶべきを外にす。
慕突佻之靈景、 突佻たる靈景を慕ひ、
願永思而母絶。 願はくは永へに思ひて絶ゆる母らんことを。

(注)

林分類E。嚴窟一・七六／七七など漢鏡二期の蟠螭紋鏡(圖3)に出現し、漢鏡三期に盛行する。偶數句の「月」・「泄」・「説」・「絶」は月部で韻をふむ。『楚辭』離騷などにみる二句對の

□□□□□□、
□□□□□□。

を一聯とする基本形で、この銘文では○のところに「以」・「夫」・「而」・「之」という助辭をいれる。『楚辭』では偶數句で押韻し、四

句ごとに換韻するのがふつうだが、ここでは偶數句の四句すべてが韻をふむ。ここには西田守夫や目加田誠らの協力のもとに岡崎敬（一九七七）がおこなった釋讀を示した。

第一句の「請」は「清」の假借。漢鏡三期の異體字銘帶鏡Ⅱ式では「精」につくり、同Ⅲ式では「清」となる。あるいは「請」は「情」と同聲であるから（銘文一〇三）、「情質」と讀むのかもしれない。『楚辭』九章・惜誦に「恐情質之不信兮」とあり、注に「情、志也。質、性也。」という。銘文二二九の注を参照。

第三句の「忽」には「艸」を冠する。つづく第三字は「揚」と釋されてきたが、蟠螭紋鏡では偏を「禾」につくり、「穆」であろう。「忽穆」は「物穆」と同じく奥深いさまを意味する（裘錫圭・一九八二）。すなわち、賈誼の「鵬鳥賦」（『史記』賈生傳、『文選』卷一三）に「形氣轉續兮、變化而蟺。沕穆無窮兮、胡可勝言。」とあり、『索隱』は「沕穆、深微之貌。」という。『淮南子』原道訓にも「物穆無窮、變無形像。」とあって、それは前二世紀に通用していた。

西安市鄭王莊九五號墓（長安七・二）やラグレリウス舊藏（Karlgren 1941: 18）の蟠螭紋鏡では、第四句の「泄」を「徹」としてゐる。「徹」も月部で押韻する。「徹」は武帝の諱であるから、その鏡は武帝の即位（前一二）の前、「泄」とする鏡はそれ以後の製作と考えられる。この前後關係は、紋様の型式からも裏づけられる。『淮南子』本經訓に「精泄於目則其視明」とあり、その注に「泄、猶通也。」という。『楚辭』九辯の「路壅絕而不通」や哀時命の「道壅塞而不通兮」「路中斷而不通」はこの句に近い。忠誠心が閉ざされて通じないことをいう。

第六句の「謹」を岡崎（一九七七）は「觀」の假借とするが、

「驪」は「歡」・「謹」と同聲で、「承驪」は好かれて寵愛を受ける意味であろう（三澤・一九九四）。『楚辭』九章・哀郢の「外承歡之約兮」はこれに近い。第五句は内面の心、第六句は外觀をいい、二句を對にする。

第七句の「窈佻」は「窈窕」・「窈窕」・「窈姚」と同じ。『楚辭』九歌・山鬼に「子慕余兮善窈窕」とある。

本銘については、早くに錢坫『浣花拜石軒鏡銘集錄』が「此忠臣節士、立心明義、無以自發、作此鏡以示意者也。」と述べ、孫星衍『續古文苑』卷一四が「其文體似楚騷」と指摘した。さらにイエッツ（Yets 1939: No. 19）は「鏡の特質が、直喩として、不満を抱く人が眞價を認められないという氣持ちを訴えることに利用されている」とし、西田守夫（一九六四）は内容が前二世紀における賈誼の「弔屈原賦」や「旱雲賦」、董仲舒の「士不遇賦」、司馬遷の「悲士不遇賦」など、失意の託された賦の系統をひくもので、「これは鏡の賦であり、曇ったまま顧みられないでいる鏡の、悲哀の賦であらう」と論じている。

●二〇五 漢鏡二期—三期

潔精白而事君、	清白を繋くして君に事へしも、
愆忘驪之兂明。	歡を法がれ明を弁はるるを怨む。
汲玄錫之流澤、	玄錫の流澤を急し、
恐疎遠而日忘。	疎遠にして日び忘らるるを恐る。
懷靡美之窮皚、	靡美の窮皚を懷ひ、
外承驪之可說。	歡を承くことの悦ぶべきを外にす。
慕窈佻之靈景、	窈佻たる靈景を慕ひ、
願永思而毋絕。	願はくは永へに思ひて絶ゆること母れ。

(注)

林分類D。西安市鄭王莊九五號墓の蟠螭紋鏡（長安七・二）など漢鏡二期に出現し、漢鏡三期に盛行する。漢鏡二期の例はきわめて少ない。鄭王莊の蟠螭紋鏡では、鈕座の周圍に銘文二〇四の上四句を、内區の外周にこの八句の銘文をいれる。後半は銘文二〇四の下四句と同じで、全體が『楚辭』離騷などにみる二句對を基本形とし、この銘文では〇のところに「而」や「之」という助辭をいれる。第二句の「明」と第四句の「忘」は陽部で、第六・第八句の「說」と「絕」は月部であるから、後半で換韻する。

西田守夫（一九六四）は、第二句の「沅」を「从水云聲」の形聲字で、「蘊」ないし「蒨」の假借、第三句の「役」を「急」の假借とする。『說文』二下は「役、急行也。从イ及聲。」という。第三句の「玄錫」は、鏡を研磨する水銀のこと。『淮南子』脩務訓に「明鏡之始下型、矇然未見形容、及其粉以玄錫、摩以白旃、鬢眉微毫可得而察。」とある。西田はこの兩句で「鏡が磨研を望んで得られず、曇ったまま、心せかれてゐるさま」とする。第一句に近い用例として『楚辭』九章・惜誦の「竭忠誠以事君兮」や『楚辭』離騷の「伏清白以死直兮」がある（岡崎・一九七七）。

第三句の「靡」は「靡」の假借で、「靡美」は「うるわしい」という意味。『漢書』韓信傳の「靡衣媼食」に顔師古は「靡、輕麗也。」と注している。

●二〇六 漢鏡二期

常樂未央。 常へに樂しみ未だ央きず。
長母相忘。 長く相ひ忘るること母れ。

(注)

陝西省千陽縣漢墓（寶鶏市博物館ほか・一九七六）の匕緣方格銘帶鏡などに例が多く、まれに草葉紋鏡（小校一五・一〇六下）にもみえる。「央」と「忘」が陽部で韻をふむ。

第一句は漢鏡一期の銘文一〇一に既出。陝西省鳳翔縣八旗屯六號墓の草葉紋鏡（陝西省雍城考古隊・一九八六）は、「常」を「長」とする。

●二〇七 漢鏡二期

長樂未央。 長く樂しみ未だ央きず。
願母相忘。 願はくは相ひ忘るること母れ。

(注)

成都市羊子山一三五號墓の草葉紋鏡（四川・一八）にみえる。「央」と「忘」とが陽部で韻をふむ。銘文二〇六の「長母相忘」の「長」を「願」に換えたもの。「願母相忘」は銘文一〇二に既出。

林分類A3は
願長相思、 願はくは長く相ひ思ひ、
母見忘。 忘らること母れ。

とし、これに類似するが、それでは押韻しない。實際は四言二句に整えられ、成都市羊子山一六九號墓の草葉紋鏡（四川・一九）は、

願長相思、 願はくは長く相ひ思ひ、
久母見忘。 久しく忘らること母れ。

とし、小校一五・九八下の草葉紋鏡は

願長相思、 願はくは長く相ひ思ひ、
幸母見忘。 幸はくは忘らること母れ。

とある。いずれも林分類A3のバリエーションであろう。

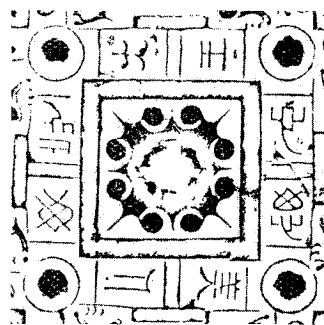


圖4 銘文208 (四川・22)

●二〇八 漢鏡二期

心思美人、心に美人を思ひ、
母忘大王。 大王を忘ること母れ。

(注)

成都市羊子山収集の草葉紋鏡(四川・二二)などにみえる(圖4)。「人」は眞部、「王」は陽部である。K・五六は草葉紋鏡(古鏡・下二六後)の方格にある銘文を、時計回りに讀まずに、方格の對邊をつづけて「美人・大王。心思母忘。(美人と大王は、心に思へば忘ること母らん。)」と釋讀する。そのように讀めば、「王」と「忘」とが陽部で押韻するからであろう。『楚辭』離騷經・王逸序に「靈脩・美人、以嬋於君。」といい、つぎの銘文二〇九が「心思美人」を「心思君王」とすることから、美人＝君王であり、美人と大王とを並列することに問題がないかもしれない。しかし、その讀み方は鏡の銘文としては變則的である。いっぽう、『詩經』小雅・車牽の「陟彼高岡。析其柞薪。」は陽部と眞部の合韻であり、『楚辭』九章・惜誦にも陽部の「糧」・「芳」・「明」と眞部の「身」との合韻

例がある(王力・一九八六)。このため、「人」と「王」とが合韻した可能性があるかもしれない。

『楚辭』において「美人」の語は、神と巫との戀愛關係をあらわしていた「九歌」から、主君と臣下との君臣關係に重點が移ってゆく「離騷」へと、語義の變化がみられる(小南・一九七三・六五頁)。銘文二二までの四言二句は、關中を中心に分布する匕緣方格銘帶鏡や草葉紋鏡に多く、その「美人」・「大王」・「君王」・「王」などの語は、『楚辭』と關連することがうかがえる。

●二〇九 漢鏡二期

心思君王。心に君王を思ふ。
天上見長。 天上に長に見えん。

(注)

嚴窟二上・一六の匕緣方格銘帶鏡などにみる。清の洪亮吉『北江詩話』卷四の釋文をはじめ、「天上見長」を初句とみることが多いが、「心」字の前に起句を示す三珠紋があり、「心思君王」から讀んでおく。「王」と「長」は陽部で押韻する。

第一句の「心思」は、おもひ。『漢書』鄒陽傳に「三淮南之心思墳墓」とあり、注に魏・張晏は「淮南厲王三子爲三王、念其父見遷殺、思墓、欲報怨也。」という。「君王」は秦末漢初において相手を呼ぶ尊稱である。『史記』項羽本紀に、鴻門の會において范增と項莊は項羽を「君王」と呼んでいる。

第二句は「天上を見るに長ならんことを」(三澤・一九九四)や「天上を見ること長く」(石川・二〇〇二・二四一頁)と解釋されてきたが、つぎの銘文二一〇に「天上見王」とあることから、「長」と「王」とは同義であり、第一句の「君王」に對應する尊稱である

う。『廣雅』釋詁一上に「長、君也。」とあり、王念孫『廣雅疏證』は「長者、周語、古之長民者、韋昭注云、長、猶君也。」という。「天上」は天空。『易經』小畜に「象曰、風行天上、小畜。」とある。「天上」の釋文に異説はないものの、銘文二三二に「大上富貴」とあり、「天」と「大」の字形が近いことから、「大上見長」という釋讀も成り立つかもしれない。

●二一〇 漢鏡二期

天上見王。 天上に王に見えん。
長母見忘。 長く忘らるる母れ。

(注)

陝西省安康地區出土の草葉紋鏡〔徐信印ほか・一九九二〕にみえる。「王」と「忘」が陽部で押韻する。

第二句の「見」は受身をあらわす。報告では「天上」を「太上」と釋したが、「天上見王」は銘文二〇九の「天上見長」を改變したものである。この「王」・「長」や「君王」・「美人」・「大王」などの語は、天上の神をいう。銘文二〇八の注を參照。

●二一一 漢鏡二期

心思君王。 心に君王を思ふ。
長樂未央。 長く樂しみ未央央きず。

(注)

湖北省荊州市高臺二八號墓の草葉紋鏡〔湖北省荊州博物館・二〇〇〇・圖九二〕にみる。「王」と「央」が陽部で韻をふむ。

●二一二 漢鏡二期

如日之光。 日の光の如し。
所居君王。 居る所 君王ならん。

(注)

西安市陝西投資策劃服務公司三七號墓の匕緣方格銘帶鏡〔陝西省考古研究所・二〇〇六〕にみるのが唯一の例である。報告は銘文二〇八のK・五六のように方格の對邊をつづけて「光之王君、日如良居」と讀んだが、それでは意味が通じないし、文部の「君」と魚部の「居」とは叶韻しない。宋治民(二〇〇六)も第二句の「所」を「良」と釋したが、誤釋であろう。ここでは「光」と「王」とが陽部で押韻するように反時計回りに讀んだ。同時期の銘文二三三「見日之光。天下大陽。服者君王。」と關連する内容である。

●二二三 漢鏡二期

長母相忘。 長く相ひ忘るる母れ。
時來何傷。 時の來たるも何をか傷まん。

(注)

陝西省長安縣洪慶村一二八號墓の匕緣方格銘帶鏡〔陝西省文物管理委員會・一九五九〕などにみる。「忘」・「傷」は陽部で韻をふむ。

咸陽市博物館藏の匕緣方格銘帶鏡〔王英・二〇〇二〕や小校一五・一〇六下の草葉紋鏡は「長勿相忘。君來何傷。」と釋する。漢鏡三期の銘文三〇一にも「長母相忘。時來何傷。」という句がある。「何傷」は『楚辭』離騷に「雖萎絕其亦何傷兮」、九章・涉江に「雖僻遠之何傷」とある。「時來」の含意は、同時期の類似する銘文二四七の「長母相忘。俱死葬何傷。」を參考にすれば、「俱に死し葬らるる」ときを意味するのだろう。

●二一四 漢鏡二期

與天相壽、天と相ひ^{いのちなが}長く、
 與地相長。地と相ひ長し。
 富貴如言、富貴は言の如く、
 長母相忘。長く相ひ忘るること母れ。

(注)

故宮・二六のヒ縁方格銘帶鏡にみる。偶數句の「長」と「忘」が陽部で押韻する。

天と地とを對にした第一・第二句は、銘文一〇四の「與天地相翼」を二句に分けたもの。廣州市一一七五號墓の草葉紋鏡（廣州・圖九二・三）は第一句と第二句だけを方格にいれる。『楚辭』九章・涉江に「與天地兮同壽、與日月兮同光。」とあり、『莊子』外篇・在宥には「吾與日月參光、吾與天地爲常。」という。
 成都市羊子山收集のヒ縁方格銘帶鏡（四川・九）は、第一・第四句が銘文二一五と同じで、この第三句を改めて、

與天無極、天と極まり無く、
 與地相長。地と相ひ長し。
 驩樂如言、歡樂は言の如く、
 長母相忘。長く相ひ忘るること母れ。

とする。また、鏡影はわからないが、長沙出土鏡（商承祚・一九三八）はこの第三句を「史（使）人富貴」と改めている。「史人富貴」の句は、西安市陝西投資策劃服務公司三二號墓のヒ縁方格銘帶鏡（陝西省考古研究所・二〇〇六）に「史人富貴、長樂□央」とみえる。同時期の「服（用）者君卿」とはちがった、鏡の所有者の福祿壽を豫祝する吉祥句である。

●二一五 漢鏡二期

與天無極、天と極まり無く、
 與美相長。美と相ひ長し。
 驩樂如志、歡樂は志の如く、
 長母相忘。長く相ひ忘るること母れ。

(注)

古鏡・中八前のヒ縁方格銘帶鏡や西安市範南村五四號墓の草葉紋鏡（長安一〇・二）などにみる。K・五四は第三句を「驩樂未央」とする。偶數句の「長」と「忘」が陽部で押韻する。

前漢代には「與天無極」の用例が多い。『漢書』武帝紀の注に引く應劭の説によれば、武帝の泰山封禪の刻石に「四守之内、莫不爲郡縣、四夷八蠻、咸來貢職。與天無極、人民蕃息、天祿永得。」と記されていたという。前漢代の文字瓦當にも多くみる吉祥句である。

第二句は銘文二一四の「與地」を「與美」に改變している。「美」は銘文二〇八の「美人」に連關する語。『孟子』盡心下に「充實之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神。」とあり、『淮南子』脩務訓の「君子脩美、雖未有利、福將在後至。」に高誘は「美、善也。」と注している。「驩」と「歡」、「謹」は同聲。『左傳』哀公十七年の「過於其志」の注に「志、望也。」とあり、『廣雅』釋詁三上に「志、意也。」という。第三句は、歡樂が思いのままであることをいう。

内蒙古包頭市徵集のヒ縁方格銘帶鏡（楊君ほか・二〇〇〇・圖一・四）には、二句に省略したつぎの銘文がある。

與美相長。美と相ひ長し。
 常貴未央。常へに貴く未だ央きず。

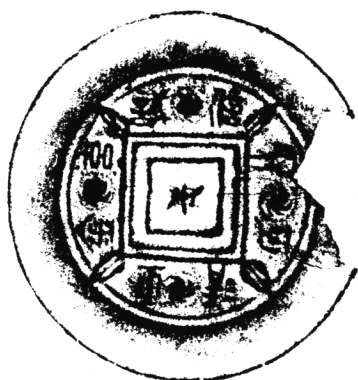


圖5 銘文216〔陝西省考古研究所2006〕

●二一六 漢鏡二期

玄金之清。 玄金の清。
可見信誠。 信誠 見る可し。

(注)

西安市陝西投資策劃服務公司三一號墓の匕緣方格銘帶鏡〔陝西省考古研究所・二〇〇六〕が唯一の例である(圖5)。「清」と「誠」とは耕部で韻をふむ。報告は「吉金之清河…」と読み、宋治民(二〇〇六)はそれを「□金之清、可見信誠」と訂正した。

第一句の不明字は「玄」である。「玄金」はふつう鐵(くろがね)をいうが、『淮南子』陰形訓に「玄頊六百歳生玄金、玄金千歳生玄龍。」とあり、五行に配された五金のひとつである。銘文二〇五には研磨劑の「玄錫」があった。『釋名』釋天に「天又謂之玄」とあり、『楚辭』招魂の「懸火延起兮玄顏烝」の注にも「玄、天也。」とあって、「玄」は天をいう。または「炫」と同聲であるから、光り輝く意味にとるべきかもしれない。『淮南子』脩務訓には「誠得清

明之士、執玄鑑於心、照物明白。」とあり、人の心を玄妙な鏡にたとえている。また、『淮南子』俶眞訓には「弊其玄光而求知之于耳目」とあり、高誘注に「玄光、内明也。一曰、玄天也。」という。第二句の「信誠」は、まこと。『逸周書』官人解に「君臣之間、觀其忠惠、鄉黨之間、觀其信誠。」とある。ただし、『楚辭』九章・惜往日の「懸光景之誠信兮」など、「誠信」のほうが用例は多い。すぐれた銅を用いてつくった鏡は清らかで、まことの氣持ちをも映し出すというのであろう。

●二一七 漢鏡二期

長相思、 長く相ひ思ひ、
母相忘。 相ひ忘るること母れ。
常貴富、 常へに貴富にして、
樂未央。 樂しみ未だ央さず。

(注)

林分類A1。三槐堂・二二の匕緣方格銘帶鏡や成都市羊子山出土の草葉紋鏡(四川・一三/二〇)などにみる。方格の各邊に一句ずつ配する。偶數句の「忘」と「央」が陽部で韻をふむ。第一句の「思」は之部、第三句の「富」は職部だが、藤堂説によれば「思」と「富」とは押韻する。王力は入聲の「富」を職部として之部から分離したが、漢鏡銘では之部と職部とが叶韻する例は多い。ただし、奇數句と偶數句とが交互に押韻するのはめずらしい。K・三八は同銘だが、「常貴富」を起句として釋讀する。しかし、これを銘文一〇一の「常樂未央」を「常貴富、樂未央」の二句に分解したものとみるならば、「長相思」を初句におくべきであろう。

廣州市一一七三號墓(廣州・圖九一・七)は第一句を「常相思」と

する。「長」と「常」は通用した。また、第二句を、巖窟二上・二六の草葉紋鏡は「不相忘」、K・四四の草葉紋鏡は「勿相忘」とする。「母」「不」「勿」は通じたのである。

●二一八 漢鏡二期

大富昌。 大いに富み昌えん。
樂未央。 樂しみ未だ央きず。
千萬歳、 千萬歳まで、
宜弟兄。 弟兄に宜し。

(注)

簠齋・下一三前(K・四二)の匕緣方格銘帶鏡にみえる。「昌」・「央」・「兄」が陽部で押韻する。

第四句の「弟兄」は、『史記』楚世家に秦昭王が楚王に送った書に「始寡人與王約爲弟兄」とみえる。「宜弟兄」の例として、漢鏡四期の銘文四一〇に「利貳親。宜弟兄。壽萬年。長相保、宜子孫。」とあり、四川省新繁縣出土の甗(高文・一九八七・圖一一一)に「富貴昌。宜宮堂。意氣陽。宜弟兄。長相思、母相忘。爵祿尊、壽萬年。」とある。

●二一九 漢鏡二期

常與君、 常へに君と與に、
相謹幸。 相ひ歡幸せん。
母相忘。 相ひ忘るること母れ。
莫遠望。 遠望すること莫れ。

(注)

廣州市一一七四號墓の方格渦狀虺紋鏡(廣州九二・二)にみえる

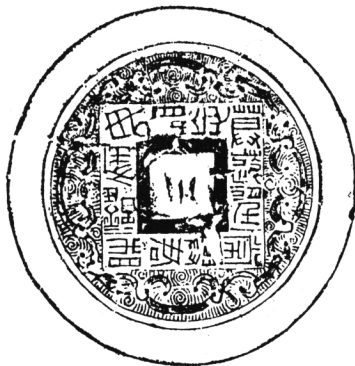


圖 6 銘文219 (廣州92・1)

(圖6)。方格の各邊に三字を配し、「忘」と「望」とが陽部で韻をふむ。「幸」は耕部。耕部は陽部と韻が近く、K・二四一の三角緣神獸鏡に「王氏作竟甚大明。同出徐州刻鏤成。師子辟邪嬌其嬰。仙人執節坐中庭。取者大吉樂未央。」とあり、カールグレンは耕部の「庭」をふくめて毎句押韻としている。また、銘文一〇三の注を参照されたい。このため、「幸」・「忘」・「望」が叶韻していた可能性が高い。

第二句の「謹」は「歡」と同聲。「歡幸」は、よろこび寵愛する意味。『史記』越王句踐世家に「長男即自入室、取金持去、獨自歡幸」とある。

第四句の「遠望」は『楚辭』九懷・匡機の「撫檻兮遠望、念君兮不忘。」など多くの用例がある。いずれも遠くにいる人进行うしくさだが、ここでの「莫遠望」は離ればなれにならないことを希う意味である。

●二二〇 漢鏡二期

常貴樂未央。 常へに貴く樂しみ未央。央きず。
母相忘。 相ひ忘るること母れ。

(注)

三槐堂・一六の方格渦狀虺紋鏡にみえる。「央」と「忘」が陽部で韻をふむ。第一句は銘文二二七の「常貴富、樂未央」を一句にまとめ、鏡銘ではめずらしい五字句にしたもの。

●二二一 漢鏡二期

富貴安樂未央。 富貴にして安樂未央。央きず。
長母相忘。 長く相ひ忘るる母れ。

(注)

簠齋・下一六後の草葉紋鏡(K・四〇)の圓圈鈕座に反時計回りに銘文をめぐらす。「央」と「忘」が陽部で押韻する。
第一句は銘文二〇二の「安樂未央」に「富貴」を加え、四言二句の定型をくずしたもの。

●二二二 漢鏡二期

久不見、 久しく見ず、
侍前稀。 前に侍ること希なり。
秋風起、 秋風 起ち、
予志悲。 予が志 悲しむ。

(注)

林分類C4。古鏡・中四前の草葉紋鏡にみる。方格の各邊に三字ずつを配し、初句をK・七一は「久不見」、K・七〇は「秋風起」とする。偶數句の「希」と「悲」は微部で押韻する。

「秋風起」の句は、漢武帝の作と伝えられる「秋風辭」の「秋風起兮白雲飛、草木黃落兮雁南歸。……攜佳人兮不能忘。」(『文選』卷四五)の數句を想起させる「小川・一九五八」。「志」は、こころ。銘文二二五の注を參照。

●二二三 漢鏡二期

久不見、 久しく見ず、
侍前稀。 前に侍ること希なり。
君行卒、 君の行は 卒に、
予志悲。 予が志 悲しむ。

(注)

西安市紅慶村六四號墓(陝西・九)や長沙市杜家山七九七號墓(湖南・四九)の草葉紋鏡などにみる。銘文二二二の第三句を置換しただけで、偶數句の「希」と「悲」は微部で押韻する。

「君行卒」は銘文三〇八「君有行」と同じように夫が出征することをいう。「卒」は、にはかに。『漢書』食貨志下に「天子始出巡郡國。……行、西踰隴卒。」とあり、注に「孟康曰、踰、度也。卒、倉卒也。」という。「君行きて卒し」と訓じる(白川・一九七六)のはまちがひ。銘文は、夫が急に出征し、久しく歸宅していない妻の嘆きをうたう。

清の洪亮吉『北江詩話』卷四には「久不見、侍前稀。君行卒、我安歸。」という釋文をのせ、「篆法工整、語亦悽豔」と評するが、鏡影不詳である。「歸」も微部で「希」と押韻する。

●二二四 漢鏡二期

道路遠、 道路遠く、

侍前希。前に侍ること希なり。

昔同起、昔同じく起きしに、

予志悲。予が志 悲しむ。

(注)

小校一五・九八の草葉紋鏡にみえる。銘文二二三・二二三の奇數句を置換しただけで、偶數句は微部で押韻する。

銘文一〇三に「道路遼遠」・「脩母相忘」という句があり、『楚辭』九章・抽思の「道卓遠而日忘兮」もこれに近い。また、『古詩十九首』(『文選』卷二九)に「道路阻且長、會面安可知。」とある。第二句の「希」には人偏がない。

●二二五 漢鏡二期

長貴富。長く貴富ならん。

樂母事。母事を樂しまん。

日有憲。日び憲び有らん。

常得所喜。常へに喜む所を得。

宜酒食。酒食に宜し。

(注)

前一・一三年没の中山王劉勝を埋葬した河北省滿城一號墓(中國社會科學院考古研究所編・一九八〇)の草葉紋鏡にみえる。三言四句の銘文二一七をうけ、それよりわずかに後出する。五句すべて之部と職部で叶韻する。

第三句の「憲」と第四句の「喜」とを書き分ける。「憲」と「喜」は同聲。「得所喜」は銘文二〇一に既出。銘文二〇二はそれを「得所好」とするから、「喜」と「好」とは同義だろう。『史記』扁鵲傳の「問中庶子喜方者」に「索隱」は「喜、好也、愛也。」と注す

る。「憲」は、よろこぶ。『史記』周本紀に「無不欣憲」とある。

明・陳第の『毛詩古音考』は「喜怒之喜、上聲、悅好之喜、去聲。」という。西安市鄭王莊一六〇號墓の草葉紋鏡(長安・圖一一・三)は、第三句を「長得所喜」とする。「常」と「長」とが通じたことは、銘文一〇一にみた。

●二二六 漢鏡二期

長貴富。長く貴富ならん。

樂母事。母事を樂しまん。

日有憲。日び憲び有り。

宜酒食。酒食に宜し。

(注)

林分類F1。河南省洛陽市防洪一段九四號墓(洛陽・一)や山東省青島市平度界山一號墓(青島市文物局ほか・二〇〇五)など草葉紋鏡に多くみる。ただし、林は「日有憲」を初句とする。先行する銘文一〇五・銘文二〇一が「大樂貴富」を初句、「宜酒食」を末句としていることから、ここでは「長貴富」を起句とした。銘文二二五の第四句「常得所喜」を省略し、方格の各邊に一句ずつ配したもの。第一句の「富」と第四句の「食」が職部、第二句の「事」と第三句の「憲」が之部に屬している。銘文二一七にみたように、之部と職部とは叶韻し、四句すべて韻をふむ。

第三句は、K・二八の譯すように「喜びが毎日おとずれる」という意味。

山東省臨淄辛店一四號墓の草葉紋鏡(山東省文物考古研究所・二〇〇〇・圖版五)は第四句を「不相忘」とする。また、K・二七は鏡影不詳だが、この第三句を省略する。K・三〇も鏡影不詳だが、

常貴富。 常へに貴富ならん。

樂母事。 母事を樂しまん。

日有意。 日び喜び有り。

得所喜。 喜む所を得ん。

と釋讀する。第一句の「長貴富」を「常貴富」、第四句を「得所喜」に改め、四句すべて押韻すると指摘している。韻についてカールグレンと藤堂とは同じ意見である。「得所喜」は銘文二〇一に既出。

●二二七 漢鏡二期

常貴富。 常へに貴富ならん。

樂母事。 母事を樂しまん。

日有意。 日び喜び有らん。

美人侍。 美人侍さん。

(注)

巖窟・補一九の草葉紋鏡にみえる。銘文二二六の第四句を「美人侍」に換えたもの。「侍」は之部で、四句すべて韻をふむ。この「美人」は「美しい人」の意。K・二一九は鏡影不詳だが、この第三句を「竿瑟會」に置換している。銘文三二二の祖形である。

●二二八 漢鏡二期

鏡氣鏘明。 鏡の氣は精明なり。

服者君卿。 服者は君卿ならん。

延年益壽。 年を延ばし壽を益し、

安樂未央。 安らかに樂しみ未央きず。

(注)

陝西省臨潼博物館の収集した螭龍紋鏡〔趙康民・一九八二〕にみ

る。蟠螭紋鏡の變形した、漢鏡二期でも初期の作品である。拓影が不鮮明なため、釋文は報告にしたがう。「明」「卿」「央」が陽部で韻をふむ。

第一句の「鏡氣」や「鏘」はほかに用例がない。金の『五音集韻』に「鏘、精也」とある。この句はつぎの銘文二二九の「請質清明」と類似する意味であろう。

同型式の精華・四三は、「□□精明。□宜君卿。千秋萬□、常樂未央。」という類似の四字句をもつ。また、河南省南陽市陳棚村六八號墓から出土した螭龍紋鏡〔河南南陽市文物考古研究所・二〇〇八〕には「鏡以何行。服者君卿。所言必當。千秋萬歲、長毋相忘。」という四言五句の銘文がある。

●二二九 漢鏡二期

垠錫有齊。 銀・錫齊有り、

與眾異容。 眾と容を異にす。

爲靜精實。 靜を爲すこと清實なれば、

請質清明。 情質は清明なり。

(注)

西安市鄭王莊九號墓の草葉紋鏡〔長安・圖一一・三〕にみる(圖7)。「容」は東部、「明」は陽部だが、東部と陽部とは叶韻した。K・二〇五の「吾作明竟。幽漣宮商。周羅容象。五帝天皇。白牙單琴、黃帝除兇。朱鳥玄武、白虎青龍。君宜高官、子孫番昌。」について、カールグレンは東部の「兇」「龍」と陽部の「商」「象」「皇」「昌」とが韻をふむとする。

第一句の「垠」は「銀」の假借。『荀子』成相に「刑稱陳、守其銀下不得用輕私門。」とあり、唐・楊倞注に「銀與垠同。」とある。

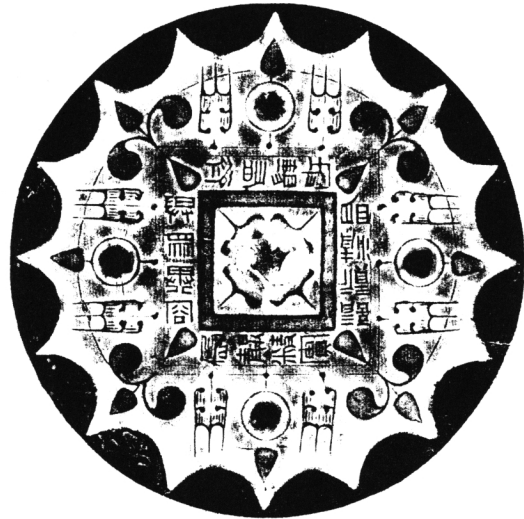


圖7 銘文229 (長安・圖11・3)

「銀錫」は銀と錫の合金。『史記』平準書の「又造銀錫爲白金」に『集解』は「如淳曰、雜鑄銀錫爲白金也。」とある。「齊」は合金の配合。『周禮』考工記・輞人に「金有六齊。：金錫半謂之鑒燧之齊。」とあり、鏡の鑄造には銅と錫とが半ばするという。漢鏡の實際は、銅が七〇%前後、錫が二五%前後、鉛が五%前後で、銀の含有量はきわめて少なく、この「銀錫」は鏡の素材が白金のように精良なことをあらわしたもののだろう(笠野・一九八三)。

第二句の「異容」は、漢代では用例が少ないが、『後漢書』邊讓傳の「章華賦」に「俯仰異容、忽兮神化。」とある。

第三句の「精」は「清」。『莊子』外篇・在宥に「必靜必清、無勞女形、無搖女精、乃可以長生。」とあり、『淮南子』精神訓に「天靜

以清、地定以寧。」という。また、『淮南子』俶眞訓に「人莫鑑於流沫、而鑑於止水者、以其靜也。」とあり、晉・陸機の「隴西行」には「我靜如鏡」とあつて、鏡の本質を「靜」とする。「實」は、まこと。『廣雅』釋詁一上に「實、誠也。」とあり、「清實」は、心が清らかでまこととあること。『後漢書』王龔傳・子暢に「少以清實爲稱」とある。

第四句の「請」は「情」と同聲。『楚辭』九章・惜誦に「恐情質之不信兮」とあり、注に「情、志也。質、性也。」という。銘文二〇四には「内請質以昭明」とあつた。

●二三〇 漢鏡二期

千秋萬歲、千秋萬歲まで、

長樂未央。長く樂しみ未だ央ぎず。

結心相思、心を結びて相ひ思ひ、

幸母相忘。^{ちが}幸はくは相ひ忘るること母れ。

(注)

五島美術館蔵の草葉紋鏡(樋口・四四)にみえる。偶數句の「央」と「忘」とが韻をふむ。

第三句の「結心」は漢代に例がないが、晉・張華の「武帝哀策文」(『藝文類聚』卷一三)に「結心墳隴。永憑聖靈。」とあり、類似の用例として『楚辭』九章・哀郢に「心結結而不解兮」とある。

●二三一 漢鏡二期

大上富貴、大上の富貴にして、

長樂未央。長く樂しみ未だ央ぎず。

延年益壽、年を延ばし壽を益し、

幸母見忘。 幸はくは忘らること母れ。

(注)

古鏡・下一七後の草葉紋鏡などにみる。釋文はK・三七にしたがつた。第四句の「見」字をのぞいて偶數句は銘文二三〇と共通し、「央」と「忘」が韻をふむ。

第一句の「太上」は「太上」に同じで、至極のもの。『大戴禮』曾子立事に「太上樂善、其次安之、其下亦能自彊。」とあり、注に「太上、德之最上者。」とある。「幸母見忘」は銘文二〇七に既出。銘文二一〇には「長母見忘」とあった。

四言四句の類例として山東省巨野縣紅土山墓の草葉紋鏡（山東省荷澤地區漢墓發掘小組・一九八三）に「□□□□、服者君卿。延年益壽、安樂未央。」がある。

●三三二 漢鏡二期

見日光。 日の光 現はる。

天下大陽。 天下大いに陽らかなり。

服者君卿。 服者は君卿ならん。

延年益壽、 年を延ばし壽を益し、

敬母相忘。 敬みて相ひ忘ること母れ。

幸至未央。 幸はくは至りて未だ央きざらんことを。

(注)

尊古齋・一二〇の草葉紋鏡などにみる。第一句のみ三字句となり、第四句の「壽」をのぞいて「光」・「陽」・「卿」・「忘」・「央」が陽部で韻をふむ。

第一句の「見」は「現」または「顯」。『論語』泰伯に「天下有道則見、無道則隱。」とある。第三句の「君卿」は、諸侯王や大臣の

ような高貴な身分をいう。『廣雅』釋詁一上に「卿、君也。」とあり、王念孫『廣雅疏證』は「爾雅、王・公・侯、君也。公侯而下、則爲伯・子・男及卿・大夫之有地者。」とある。第六句の「至未央」は「至極」という意味だろう。

●三三三 漢鏡二期

見日之光。 日の光 現はる。

天下大陽。 天下大いに陽らかなり。

服者君王。 服者は君王ならん。

千秋萬歲、 千秋萬歲まで、

長樂未央。 長く樂しみ未だ央きず。

(注)

歐米・圖四の草葉紋鏡にみる。第四句の「歲」をのぞいて「光」・「陽」・「王」・「央」が陽部で韻をふむ（K・六二）。第三句までは銘文二三二をふまえ、その第一句に「之」字を加えて四字句に統一し、第三句の「君卿」を「君王」に改めている。

●三三四 漢鏡二期～三期

見日之光。 日の光 現はる。

天下大明。 天下大いに明らかなり。

千秋萬歲、 千秋萬歲まで、

長樂未央。 長く樂しみ未だ央きず。

(注)

簠齋・下一〇前の重圈銘帶鏡にみえる。銘文二三三の第三句を省略し、四句にしたもの。「光」・「明」・「央」が陽部で韻をふむ。

長沙市黃土嶺三號墓の草葉紋鏡（湖南・五一）には

見日之光。 日の光 現はる。

天下大陽。 天下大いに陽らかなり。

服者君卿。 服者は君卿ならん。

所言必當。 言ふ所は必ず當らん。

という毎句押韻の四句がある。「所言必當」は『晉書』劉頌傳の「除淮南相在郡上疏」に「臣誠未自許所言必當」とみえる。言うことはみな妥當、という意。また、鏡影不詳だが、K・六三に

見日之光。 天下大明。 而昭侯王。 長生未央。

という毎句押韻の四句がある。

太原市東太堡（山西省文物管理工作委員會ほか・一九六〇）から草葉紋鏡が四面出土したが、そのうち「見日之光」ではじまるとみられる銘文に

見日之光。 □者君卿。 千秋萬歲、長□□□。（二六號鏡）

見□□□。 □□大陽。 服者君卿。 所言□□□。（二七號鏡）

の二面がある。いずれの句も銘文二三五から銘文二三九にみる同時期の定型句であり、缺字の句は「用（服）者君卿」、「長母相忘」または「長樂未央」、「天下大陽」、「所言必當」に復元され、韻字はすべて陽部である。

●二三五 漢鏡二期

見日之光。 日の光 現はる。

天下大明。 天下大いに明らかなり。

用者君卿。 用ゐる者は君卿ならん。

（注）

西安市尤家莊二一〇號墓の草葉紋鏡（長安・圖一〇・三）や蟠龍紋鏡（富岡・圖三六／K・六〇）などにみえる。銘文二三三の上三句と

ほぼ同銘で、毎句押韻する。

成都市羊子山收集の草葉紋鏡（四川・一七）や三槐堂・二一のヒ縁方格銘帶鏡は第二句を「天下大陽」とし、河南省南陽市百里溪二〇號墓の草葉紋鏡（包明軍ほか・一九九七・圖八）は第三句を「服者君王」とする。

●二三六 漢鏡二期

見日之光。 日の光 現はる。

天下大陽。 天下大いに陽らかなり。

所言必當。 言ふ所は必ず當らん。

（注）

嚴廬二上・一四／二二の草葉紋鏡にみる。銘文二三五の第三句を「所言必當」としたもので、毎句押韻する。

●二三七 漢鏡二期

見日之陽。 日の陽 現はる。

天下大光。 天下大いに光らん。

長母相忘。 長く相ひ忘るる母れ。

（注）

內蒙古ジュンガル旗納林古城の草葉紋鏡（准格爾旗文化館・一九九〇）にみえる。毎句押韻する。銘文二三五などの第一句の「光」と第二句の「陽」を置換したのはめづらしい。錯簡であろうが、「陽」・「光」・「明」は通用したことがわかる。

●二三八 漢鏡二期

見日之光。 日の光 現はる。

長樂未央。 長く樂しみ未央きず。

(注)

成都市羊子山二〇〇號墓(四川・一五)や古鏡・下一三後(K・五五)の草葉紋鏡にみえる。

●二三九 漢鏡二期

見日之光。 日の光 現はる。

所言必當。 言ふ所は必ず當らん。

(注)

嚴窟一・九〇の渦狀虺紋鏡や金索六・四三二の草葉紋鏡(K・六四)にみえる。

●二四〇 漢鏡二期

見日之光。 日の光 現はる。

美人在旁。 美人 旁に在らん。

(注)

小校一六・三一上の草葉紋鏡にみえる。「光」と「旁」とが陽部で韻をふむ。「美人」は銘文二〇八を参照。

●二四一 漢鏡二期

見日之光。 日の光 現はる。

時來何傷。 時の來たるも何をか傷まん。

(注)

西安市徐家灣出土の匕緣方格銘帶鏡(陝西・七)にみえる。そこでは第二句の「傷」字しか讀んでいないが、銘文二二三と同じ「時來何傷」と釋しうる。「光」と「傷」とは陽部で韻をふむ。

鏡影不詳だが、K・五三に

天下大陽。 天下大いに陽らかなり。

幸母見忘。 幸はくは忘らること母れ。

とみえる。「幸母見忘」は銘文二〇七・二三一に既出。

●二四二 漢鏡二期→三期

見日之光。 日の光 現はる。

天下大明。 天下大いに明らかなり。

(注)

林分類C1。「光」と「明」とは陽部で韻をふむ。陝西省鳳翔縣の匕緣方格銘帶鏡(昭明・一九九五)や河南省洛陽市防洪一段七八號墓の草葉紋鏡(洛陽・四)など漢鏡二期に出現し、漢鏡三期のいわゆる日光鏡(異體字銘帶鏡)に盛行する。前一三八年の『曆譜』が出土した山東省臨沂市銀雀山二號墓の草葉紋鏡(山東省博物館臨沂文物組・一九七四)などは、第二句を「天下大陽」とする。

●二四三 漢鏡二期→三期

見日之光。 日の光 現はる。

長母相忘。 長く相ひ忘るる母れ。

(注)

林分類C2。「光」と「忘」とは陽部で韻をふむ(K・五二)。西安市鄭王莊一一〇號墓の草葉紋鏡(長安・圖二・五)など漢鏡二期に出現し、漢鏡三期のいわゆる日光鏡に盛行する。古鏡・下一一前(K・五二)の異體字銘帶鏡は「母」を「不」とし、嚴窟二上・四九の同式鏡はそれを「夫」とする。また、小校一六・三〇下の草葉紋鏡は「長母見忘」とする。「長母見忘」は銘文二二〇に既出。

●二四四 漢鏡二期～三期

久不相見、久しく相ひ見ず、
長母相忘、長く相ひ忘るる母れ。

(注)

林分類C3。古鏡・下一五後の草葉紋鏡(K・四九)など漢鏡二期に出現し、前七〇年に埋葬された江蘇省邗江縣胡場五號墓の異體字銘帶鏡〔揚州博物館ほか・一九八二〕など漢鏡三期に流行した。銘文二二二・二二三には「久不見」とあり、それを四字句にした。

●二四五 漢鏡二期

日出大明。日出で大いに明らかなり。
天下大陽。天下大いに陽らかなり。

(注)

山東省壽光縣三元孫一〇三號墓の草葉紋鏡〔山東省文物考古研究所・一九九六・圖一六〕にみえる。

陝西省岐山縣帖家河出土の草葉紋鏡〔龐文龍・一九九二〕は、この第二句を置換して

日出大明。日出で大いに明らかなり。

長母相忘。長く相ひ忘るる母れ。

とある。

●二四六 漢鏡二期

見日之光。日の光 現はる。
有月之明。月の明 有らん。

(注)

山西省長治市郊店上郷出土の草葉紋鏡〔崔利民・一九九六・圖二〕

にみる。「光」と「明」が陽部で押韻する。

日の光と月の明とを對句にした希有の銘文である。『孟子』盡心上に「日月有明、容光必照焉」とあり、朱熹『集註』に「明者、光之體。光者、明之用也。」という。長沙市阿彌嶺七號墓の蟠龍紋鏡〔湖南省博物館・一九八四〕は、「見之光。長有日月之明。」と類似するが、いささか語句が亂れている。

●二四七 漢鏡二期

母棄故而娶新。故を棄てて新を娶る母かれ。
亦成親。亦た親を誠にせん。

心與心、心と心と、

長母相忘。長く相ひ忘るること母れ。

俱死葬何傷。俱に死し葬らるるも何をか傷まん。

(注)

古鏡・中七の三乳重圈銘帶鏡にみる。釋讀は三澤玲爾(一九九四)にしたがった。反時計回りに雜言體の銘文を配し、上二句が内圈銘、下三句が外圈銘である。内銘の「新」と「親」は眞部、外銘の「傷」と「忘」が陽部で、内銘と外銘とで換韻する。ただし、銘文二〇八にみたように眞部と陽部とが合韻した可能性もある。

第一句と第五句は、ほかに例をみない。第二句の「成」は「誠」で、まことの意。第五句の「葬」は、「墓」をあらわす「菌」字のようにもみえるが、三澤(一九九四)は棺の敷物である「茵」を兩手で捧げもつ「葬」字の古文とみた。銘文の全體は、夫にたいする妻の永遠の愛情をうたう。これに近い韻文に『後漢書』朱穆傳の注に引く『太公陰謀』に「武王衣之銘」があり、「桑蠶苦、女工難、得新捐故、後必寒。」とある。

鏡影不詳だが、梅原末治（一九三四・一九五九頁）に引くつぎの銘文は、語句と内容がこれと類似する。

心與心、

心と心と、

亦誠親。

亦た親を誠にす。

終不去子從他人。

終に子を去りて他人に従はじ。

所與予言不可不信。

予に言ひし所は信ぜざる可からず。

眞部で毎句押韻する。訓讀はおおむね三澤玲爾（一九九四）にしたがった。第三句の「終」は、死ぬまで、とこしへ。『論語』堯曰の「允執其中、四海困窮、天祿永終」に後漢の包咸は「永、長也。言爲政信執其中、則能窮極四海、天祿所以長終也。」と注し、『廣雅』釋詁一上に「終、極也。」とある。「子」は夫。この句は『楚辭』離騷の「不撫壯而棄穢兮」と同じように、一つの否定詞が後の二つの述語とともに否定した形で、「生きている限りは、あなたのもとを離れて他人と一緒にいるようなことはしない」という意味である（三澤・一九九四）。小川環樹（一九五八）も、愛人に向かって他人に心移さないと誓うことばとみる。鏡影がわからないため、参考資料として付記するにとどめる。

●二四八 漢鏡二期

恐浮雲兮蔽白日。

浮雲の白日を蔽ふを恐る。

復請美兮翫素質。

清美に復さんとするも素質を翫ふ。

行精白兮光運明。

行ひ清白なれば光は明を運らす。

謗言眾兮有何傷。

謗言眾くとも何をか傷むこと有らんや。

（注）

吉林省東遼縣彩嵐墓地の重圈銘帶鏡（吉林・六）にみえる。外圈の「恐」字の外に起句を示す「…」記號があり、反時計回りに第三

句の「兮」字まで一周し、内圈の「光運明」につづいている。三言二句を「兮」で連綴して七言句とする『楚辭』九歌の基本形である。「日」と「質」とは質部、「明」と「傷」とは陽部で押韻し、第三句で換韻する。

君臣關係の嘆きを日月の光をおおう浮雲にたとえることは、陸賈の『新語』慎微に「邪臣之蔽賢、猶浮雲之蔽日月也。」とあり、『楚辭』九辯には「何汜濫之浮雲兮、森壅蔽此明月。」や「卒壅蔽此浮雲兮、下暗漠而無光。」とみえる。「古詩十九首」の「行行重行行」にも「浮雲蔽白日」とあり、漢代を通じて流行した。

第二句の「請」は「精」または「清」。三澤玲爾（一九九四）は「復」を「覆」と読み、清美をおおう意とする。第二句第五字を報



圖8 銘文248（吉林・6）

告では「冥」と釋すが、銘文二〇五に「愆汙驩之弁明」とある「弁」字である。「素質」は銘文二〇四の「内請質」と同義。

第三句の「精白」は銘文二〇五に「絜精白而事君」とあった。

「行清白」は『楚辭』の王逸注に頻出する。三澤はこれを「精白を行らし」と讀む。「運」は、遠くにおよぶこと。「尙書」大禹謨に「帝德廣運」とあり、傳に「運、謂所及者遠。」という。

第四句の「謗言」は、惡口。「何傷」は銘文二二三の注を參照。

●二四九 漢鏡二期

金英陰光宜美人。

金英の陰光は美人に宜し。

以察衣服無私親。

以て衣服を察するに私親無かれ。

(注)

匕緣圓圈銘帶鏡（小校一五・一〇〇／故宮・一〇）にみえる。七言句の最古の銘文例で、「人」と「親」とは眞部で押韻する。しかも、この二句は偶數字目の文字の平仄を逆にする、平仄の配置法に偶然かなっている。

第一句の「金英」は選りすぐれた銅原料、「陰光」は鏡に映る光（影）のこと。魏・阮籍の「采薪者歌」に「陽精蔽不見。陰光代爲雄」とあるが、漢代にさかのぼる用例では『淮南子』俶眞訓に「弊其玄光而求知之于耳目」とあり、注に「玄光、内明也。一曰、玄天也。」という「玄光」がこれに近い。銘文二二五の注を參照。「金英陰光」は鏡の美しいかがやきをいうのであろう。

第二句の「無私親」は、えこひいきのないこと。『漢書』公孫弘傳に「天德無私親」とある。ここでは銘文二四七の「誠親」や銘文二五一の「以爲信」と同義で、すぐれた鏡は、容姿をありのまま映しただけでなく、心の内面をも正しく見通すことができるという

のであろう。

●二五〇 漢鏡二期

請銀金華以爲鏡、

精銀と金華とは以て鏡を爲り、

昭察衣服觀容貌、

衣服を昭察して容貌を觀る、

絲組中□可爲信。

絲と組とは□に中りて信を爲す可し。

光宜美人。

光は美人に宜し。

(注)

廣州市二〇三四號墓（廣州・圖二三九・一）の草葉紋鏡にみえる。第三・第四句の「信」と「人」が眞部で韻をふむ。ちなみに「鏡」は陽部、「貌」は藥部である。銘文二四八に類似する七言句で、つぎの銘文二五一「清銀銅華以爲鏡、昭察衣服觀容貌、絲組雜還以爲信。清光兮宜人。」の原形である。

第一句の「請」は「精」・「清」と同聲。「銀」は、「銀」の假借である。銘文二五一の「清銀」と同義。「金華」は銘文二二六の「金英」、銘文二五一の「銅華」と同義。銘文二二九の「垠錫有齊」も同時期の類似語である。すぐれた銅原料を用いて鏡をつくったことをいう。

第二・第三句の解釋は銘文二五一の注を參照。第四句の「美人」は、銘文二〇八にみたような神ではなく、文字通り「美しい人」であらう。

●二五一 漢鏡二期／三期

清銀銅華以爲鏡、

清銀と銅華とは以て鏡を爲り、

昭察衣服觀容貌、

衣服を昭察して容貌を觀る、

絲組雜還以爲信。

絲と組とは雜還し以て信と爲す。

清光兮宜佳人。 清らかなる光は佳き人に宜し。

(注)

林分類G。河南省洛陽市西郊三二〇六號墓〔中國科學院考古研究所洛陽發掘隊・一九六三・圖二二〕や前一〇九年の「漢王之印」金印を副葬する雲南省晉寧縣石寨山六號墓〔雲南省博物館・一九五九〕の重圈銘帶鏡にみえる。「信」と「人」が眞部で韻をふむ。

笠野毅(一九八三)は字形から第一句の冒頭を「清浪」と釋し、清濁を分けて清いものだけをとりだすこと、精鍊して白く輝く金屬にすること、と解釋する。また、銘文二五〇の注を参照。

第二句の「昭察」は「照察」ともいう。『管子』形勢解に「日月昭察萬物者也。…主不得昭察其臣下、臣下之情、不得上通。」とあり、『楚辭』九辯の「信未達乎從容」に王逸は「君不昭察其眞僞也。」と注する。あさらかに見通すこと。「觀容貌」は、『漢書』五行志上に「威儀容貌亦可觀者也」とみえる。

第三句の「絲組」は、絲と組紐。『詩經』鄘風・干旄に「素絲組之、良馬五之」とある。「雜選」は、まじり重なること。『漢書』楚元王傳・劉向の「雜選眾賢」に顔師古は「雜選、聚積之貌、選音大合反。」と注し、同書・司馬相如傳下・大人賦の「雜選膠輻以方馳」には「雜選、重糝也。」と注する。ここでは絲も組紐もほどこがたいほど縫っていることをいうのであろう。この第二・第三句は銘文二四九の「以察衣服無私親」と類似し、精良な鏡は衣服や容貌というような外観だけでなく、人の内面までも見通すことをいう。

第四句は銘文二五〇の「光宜美人」を改變している。「佳人」は「美人」と同義。『楚辭』九歌・湘夫人に「聞佳人兮召余」、同九章・悲回風に「惟佳人之永都兮」などとみえる。なお、『宋書』樂志に引く「漢鼓吹鏡歌・君馬黃」に「美人歸以南、駕車馳馬、美人

傷我心。佳人歸以北、駕車馳馬、佳人安終極。」とあり、「美人」と「佳人」とを對句にしている。

漢鏡二期にさかのぼる藥照寺藏(今井・一九八八)の草葉紋鏡は、四言と三言とを「兮」で連綴した、つぎの銘文をもつ。

清浪銅華兮爲監、

昭察衣服兮觀俗貌、

絲組縉選兮爲信、

清光兮宜佳人。

第一句の「監」は「鑑」。銘文一〇三に「鏡」を「鑑」とした例があり、古い用法である。第二句は「昭」を「炤」、「容」を「俗」とする。第三句の「雜」のかわりに「縉」をいれる。「縉」は、合う。『莊子』雜篇・則陽の「使丘陵草木之縉」の郭象注に「縉、合也。」とある。この銘文の第一句から第三句までの「兮」を省略し、一部の文字をいれかえたのが銘文二五一である。第四句は短いため、銘文二五一では「兮」字がそのまま残ったのであろう。

●三〇一 漢鏡三期

清浪銅華以爲鏡。

絲組爲縉以爲信、

清光明。

服者富貴蕃昌。

樂未央。

千秋萬世、

長母相忘。

時來何傷。

清浪と銅華とは以て鏡を爲る。

絲と組とは縉を爲し以て信と爲し、

清らかなる光は明ならん。

服者は富貴にして蕃昌ならん。

樂しみ未だ央きず。

千秋萬世も、

長く相ひ忘るる母れ。

時の來たるも何をか傷まん。

(注)

巖窟二上・三九の重圈銘帶鏡の外圈銘である。「清」字の前に起句を示す「・」記號がある。第三句までは銘文二五一の燒き直し、第四句以下は雜言體の吉祥句を羅列する。「鏡」・「明」・「昌」・「央」・「忘」・「傷」が陽部で韻をふむ。

第二句の「頌」は「頌」で、しる意。『莊子』外篇・馬蹄(司馬・向・崔本)に「連之以羈頌」とあり、左思「吳都賦」の「頌麋麋」の注に「頌、絆前兩足也。」という。「長母相忘。時來何傷。」は銘文二一三に既出。

●三〇二 漢鏡三期

見日之光。 日の光 現はる。

天下大明。 天下大いに明らかなり。

服者君卿。 服者は君卿ならん。

鏡辟不羊。 鏡は不祥を辟けん。

富於侯王。 侯王より富まん。

錢金滿堂。 錢金は堂に滿たん。

(注)

巖窟二上・三九の重圈銘帶鏡の内圈銘で、外圈には銘文三〇一をいれる。六句すべて四言句で、陽部で毎句押韻する。第三句までは銘文二三五と同じで、第四句以下は例の少ない吉祥句を羅列する。

『老子』九章などに「金玉滿堂」とあるが、「錢金滿堂」の用例はない。ただし、『後漢書』靈帝紀の注に引く『續漢志』に「以錢爲室金爲堂」という童謠を載せる。

五島美術館に所藏する同型式の重圈銘帶鏡は、これに類似する銘文をもつ。ただし、内圈銘は第四句以下を銘文三〇一の末三句と同

じ「千秋萬世、長母相忘。時來何傷。」という吉祥句をいれ、外圈銘は銘文三〇一の第五句以下を

鏡辟不羊。 鏡は不祥を辟けん。

千秋萬世。 千秋萬世も、

長樂未央。 長く樂しみ未だ央きず。

としている。また、河南省三門峽市向陽一一六號墓の連弧紋銘帶鏡

〔三門峽市文物考古研究所・二〇〇七・彩版六四〕は

見日之光。 日の光 現はる。

天下大明。 天下大いに明らかなり。

驅辟不羊。 不祥を驅り辟けん。

服者富貴蕃昌。 服者は富貴蕃昌ならん。

という吉祥句をいれる。この種の銘文は、外圈銘も内圈銘も後半は吉祥句を並べただけで、意味が前後に脈絡をもつわけではない。

●三〇三 漢鏡三期

見日之光。 日の光 現はる。

天下大明。 天下大いに明らかなり。

樂未央。 樂しみ未だ央きず。

千秋萬世母相忘。 千秋萬世も相ひ忘るる母れ。

時來何傷。 時の來たるも何をか傷まん。

宜王。 王に宜し。

(注)

江蘇省徐州市東洞山三號墓(孟強・二〇〇三・圖六)の連弧紋銘帶鏡である。銘文三〇一のように、三言句と四言句からなる雜言體であり、陽部で毎句押韻する。末句は「宜侯王」とあるべきところを、銘帶に餘白がなくなったため、韻字を残して省略したのである

う。また、陝西省淳化縣棗坪出土の單圈銘帶鏡〔淳化縣文化館・一九八三・圖一・九〕は、

見日之光乎。 日の光 現はる。

與君長母相忘兮。 君と與に長く相ひ忘るる母れ。

と、定型の四言句に助辭を加えて字の配列を整えている。漢鏡三期以降、このような例が増加する。

●三〇四 漢鏡三期

浪清華精皎白。 銀なる清華は、精なる皎白なり。

奄惠芳承加澤。 惠芳を^{おほ}ひ、澤を加ふるを承く。

結微顏安佼信。 美顏に結びて、安らかに信を^ま佼ふ。

耀流光似佳人。 流光は^{かがや}き、佳人に似たり。

〔注〕

湖北省の荊州市高臺二七號墓〔湖北省荊州博物館・二〇〇〇・圖九二〕や光化縣五座墳採集〔湖北省博物館・一九七六・圖九〕の重圈銘帶鏡の外圈銘である。この兩者は同銘で、ともに三言句として句讀されているが、特殊な字形であるため、釋文には異同が多い。ここではおもに荊州博物館の釋文にしたがった。

第一句末は「皎日」と釋されているが、「日」が「白」の異體字であれば、「白」と「澤」とは鐸部で押韻する。「皎日」も「皎白」も、清らかなかがやき。「寡婦賦」〔文選〕卷一六の注に引く「韓詩」に「謂余不信、有如皎日。」とみえる。銘文二五一の「清浪銅華以爲鏡」と銘文三〇六の「姚皎光而耀美」をあわせたもので、清らかな心を精白な鏡にたとえていう。

第二句に近い例として『楚辭』離騷に「芳與澤其雜糅兮」とあり、九章・思美人／惜往日にも同じ用例がある。この離騷に王逸は

「芳、德之臭也。『易』曰、其臭如蘭。澤、質之潤也。玉堅而有潤澤。」と注する。「加澤」は後漢の傅毅「七激」〔藝文類聚〕卷五七に「胥不施朱。髮不加澤。」とみえる。

第三句で換韻し、「信」と「人」が眞部で押韻する。荊州博物館は第五句を「結復顏」と釋するが、意味がとれない。字形からみて「復」ではなく「微」か。「微」は「美」の假借。

第四句は「迎佳人」と釋されているが、「迎」字が異形である。五座墳の鏡銘は明らかに「似」につくっている。

●三〇五 漢鏡三期

居必忠必信。 居ること必ず忠にして必ず信なり。

久而益親。 久しくして益ます親しまん。

而不信不忠。 而るに不信にして不忠なり。

久而自窮。 久しくして自ら窮まらん。

〔注〕

三槐堂・五八の重圈銘帶鏡の内圈銘である。銘文のはじまりに渦卷紋がある。外圈には銘文三〇一をいれる。第一句の「信」と第二句の「親」は眞部で押韻し、第三句で換韻して「忠」と第四句の「窮」とが冬部で押韻する。しかし、意味と句形から考えて、第一・第二句と第三・第四句は對句をなしている。

●三〇六 漢鏡三期

姚皎光而耀美、 姚たる^{きよ}皎き光^{かが}やきは美を耀かし、

挾佳都而承間。 佳き都を挾んで間を承く。

懷驩察而惟予、 懷驩を懷くは惟だ予のみ、

愛存神而不遷。 愛存神を愛して遷らず。

得竝執而不衰、竝に勢ひを得て衰へず、
精照折而侍君。清らかに照らし哲かにして君に侍す。

(注)

西安市紅廟村二〇號墓の重圈銘帶鏡(陝西・二三)などの外圈にみえる。内圈には銘文二〇四の上四句をいれる。内圈はほかに福岡縣立岩一〇號甕棺墓例の銘文二五一(岡崎・一九七七・圖一九四)や銘文二四三(西田・一九六四・圖二)など、いずれも漢鏡二期に出現していた銘文で、漢鏡三期でも前半に位置づけられる。ここには西田守夫(一九六四a)の釋文を示した。「姚皎光而耀美」を初句とすることは、西田が詳細に論じたとおりで、それを裏づけるように、立岩の鏡には「姚」字の前に銘文のはじまりを示す「…」記號がある。銘文二〇四と同じように、『楚辭』離騷などにみる二句對を一聯とする基本形で、偶數句の「間」・「遷」は元部、「君」は文部で叶韻する。

小校一六・三五／三六は第一句を「處皎光而輝美」、第三句を「性驩察而性予」と釋したが、西田の釋が妥當であらう。「姚」は、うつくしい。「皎」は、清らかなかがやき。『楚辭』九懷・危俊に「晞白日兮皎皎」とあり、王逸は「天精光明而照察也。」と注している。西田は「姚皎」を銘文二〇五第七句の「變佻」と同義とし、鏡の賦にふさわしい語句とみる。また、銘文三〇四の注を參照。

第二句の類似表現に『楚辭』九章・悲回風の「惟佳人之永都兮」があり、王逸注に「佳人、謂懷・襄王也。邑有先君之廟曰都也。」という。また、前一二三年の中山王劉勝墓(中國社會科學院考古研究所・一九八〇)から出土した銅鍾には、「盛兄盛味、於心佳都。擣於口味、充閭血肤。」という鳥篆文の象嵌銘があった。「承聞」は『楚辭』九章・抽思の「願承聞而自察兮」や同・九歎・逢紛の「願承聞

而自侍兮」という用例がある。

第四句の「存神」は、精神を全うすること。揚雄『法言』問神に「聖人存神索至」とあり、李軌注に「存其精神、探幽索至。」という。また、馮衍「顯志賦」(『後漢書』馮衍傳下)には「陂山谷而閑處兮、守寂寞而存神。」とある。主君にたいする變わらぬ忠誠心をいうのであらう。

第五句の「執」は「勢」。岡崎敬(一九七七)の「執」は誤釋。『韓非子』難勢に「今日堯舜得勢而治、桀紂得勢而亂。」という。

西田は、第六句について銘文二〇五の「絜精白而事君」に類似することをあげ、「折」は『禮記』祭法の鄭注に「折、炤哲也。」というのを引いて「晰」または「哲」の假借とする。

●三〇七 漢鏡三期

君忘忘而先志兮。

愛使心曳者與。

不可盡行、

心沘結而獨愁。

明知非不可更、

志所驩不能已。

(注)

君 忘れ忘れて志を先にせん。
心をして諸ろの誤に曳かしむるを愛す。
行ひを盡くす可からず、
心は鬱結して獨り愁ふ。
明らかに知る、更む可からざるに非ざるを、
志所驩ぶ所は已む能はず。

江蘇省邗江縣姚莊一〇二號墓の連弧紋銘帶鏡(揚州博物館・二〇〇〇)などにみる。この銘文は劉心源(奇觚一五・三五／三六)がはじめて「愛使心曳者與不可盡行心沘結而獨愁明丁知非不可久」志所已君忘忘而先志兮」と釋し、この姚莊一〇二號墓例は「愛使心(曳)者、(曳)不可盡行、心沘結而獨愁、明知兆(道)不可處、志

所驩、不能已、君忘、忘而先志兮」と讀まれている。このように「愛使心與者」を初句とし、「先志兮」を銘文の末尾におく釋文が多い。しかし、前漢鏡には銘文の末尾に「兮」をおく原則はない。むしろ、劉心源の釋した「明知非不可久已」の句は不完全で、姚莊一〇二號墓例の第五句と第六句をあわせたことに着目すべきであろう。鏡銘は末句が不完全になることが多く、「志所驩不能已」が完全な銘文の末句と考えられる。押韻からみても、「君忘」からはじめるのが妥當である。三槐堂・五六が「君忘忘而先志兮、愛使心與者、與不可盡行、心法結而獨愁、明知非不可久、更已」と釋したのは、このためであろう。「志」・「已」は之部、「與」は侯部、「愁」は幽部で叶韻するとすれば、第三句をのぞいて、六言句からなる。之部と幽部との叶韻は銘文三〇八に例がある。

劉心源は、第一句に「忘」を重ねているのは、主君を強く戒めるためであるという。「先志」は『禮記』學記に「記曰、凡學、官先事、士先志。」とある。

第二句を劉心源は「愛使心與者與」と釋し、周佩之の説を引いて、「與」は「誤」、「者」は「諸」の省字で「諂」の意とする。しかし、「與」字の二つは字形がいささか異なっている。『說文』十四下に「與、束縛挫拙爲與曳。」とあり、「曳」と「與」とは字形も近いから、「曳者與」と釋するのも一案である。「曳」は、引きよせる。賈誼「弔屈原賦」(『史記』賈生傳)に「讒諛得志。賢聖逆曳兮、方正倒植。」とあり、『索隱』に「胡廣云、逆曳、不得順隨道而行也。」という。「與」は「誤」で、へつらい、佞人。『楚辭』九歎・愍命に「放佞人與諂諛兮、斥讒夫與便嬖。」とある。こうした用例と同じように、本銘文も主君の心が佞人の甘言に心をうばわれることをいうのであろう。

第四句の「法結」は「鬱結」。『楚辭』九章・惜誦に「心鬱結而紆軫」とあり、遠遊には「獨鬱結其誰語」とみえる。銘文二〇五には「窓法驩之昇明」とある。ひとり悲しむ心情は『楚辭』九辯に「獨悲愁其傷人兮」とみえる。第六句の「不能已」は『楚辭』九歎・思古に「傷余心之不能已」とある。

●三〇八 漢鏡三期

君有行、	君に行有り、
妾有憂。	妾に憂ひ有り。
行有日、	行に日有り、
反母期。	反るに期母し。
願君強飯多勉之。	願はくは君強ひて飯らひ多く之に勉めよ。
印天太息、	天を仰いで太息す、
長相思。	長く相ひ思ふ。
母久。	久しく母らん。

(注)

古鏡・中三後の重圈銘帶鏡の外圈にみる。三言を主とする雜言體で、末句は完全でない。冒頭に銘文のはじまりを示す「・」記號がある。「憂」は幽部、「期」・「之」・「思」・「久」は之部で叶韻する。カールグレン(K・六九)はすべて押韻するという。内圈には四言句の銘文三〇二をいれる。

第一・第二句と第三・第四句は、三言句を連續した六言の對句である。蘇伯玉妻「盤中詩」(『玉臺新詠』所收)に「君有行、妾念之。出有日、還無期。」とあるのが近い。

第五句は食事をするように一轉して激勵する。『史記』外戚世家に「行矣、彊飯、勉之。即貴、無相忘。」とうながす平陽公主のこ

とばがみえる。遠く別れた人を思慕する「古詩十九首」(『文選』卷二九)にも最後に「努力加餐飯」とあり、女性のあいだでふつうに使われた激勵のことばなのであろう(入谷・一九七八)。
第六句に類似する語句として『楚辭』九辯に「仰明月而太息兮」や「仰浮雲而永歎」がある。

●三〇九 漢鏡三期

行有日兮反母時。

行に日有り、反るに時母し。

結中帶兮長相思。

中帶を結びて、長く相ひ思はん。

妾負君兮萬不疑。

妾の君に負ふは、萬疑ふなかれ。

君負妾兮天知之。

君の妾に負ふは、天のみ之を知る。

(注)

西安市三爻村六號墓の連弧紋銘帶鏡(陝西省考古研究所・二〇〇一・圖二八)である。報告では「行有日兮返無時、願汝出宜兮長相思、妾負君兮萬不疑、君負妾兮天知之」と讀むが、拓本により改めた。冒頭に鳥頭形の記號があり、三言句を「兮」で連續して七言四句とする。「時」・「思」・「疑」・「之」が之部で毎句押韻する。

第一句は銘文三〇八の第二句に同じ。第二句の「中帶」は、『儀禮』既夕禮の鄭玄注に「中帶、若今之禪褌。」という。蘇伯玉妻の「盤中詩」(銘文三〇八の注に既出)にこの句とほぼ同じ「結中帶、長相思。」とみえる。

第三・第四句の「負」は、たがう。『史記』五帝本紀に「蘇負命毀族」とあり、正義に「負、違也。…蘇性很戾、違負敎命。」という。「盤中詩」には「君忘妾、天知之。妾忘君、罪當治。」とあり、「負」のかわりに「忘」とする。第三句の「萬」は、決して。樂府古辭の「古詩爲焦仲卿妻作」に「千萬不復全」とある。



圖9 銘文309〔陝西省考古研究所2001・圖28〕

なお、明・馮惟訥『古詩紀』に收録する「盤中詩」は、「結中帶」の「中」を「巾」、「天知之」の「天」を「未」につくつてゐる。本銘の字釋に不確實なところがあり、参考のため記しておく。

●三一〇 漢鏡三期

君有遠行、

君に遠行有り、

妾私喜饒自次。

妾の私かなる喜饒は自ら次む。

眞止君征行來。

眞に止めん、君の征行の來たるを。

何以爲信、

何を以てか信と爲す、

祝父母耳。

父母を祝ふのみ。

何木母庇、

何れの木にか庇母く、

何人母友。

相思有常、

可長久。

何れの人にか友母らん。

相ひ思ふこと常有り、

長久なるべし。

(注)

上海博・三四の連弧紋銘帶鏡である。「來」・「耳」・「友」・「久」が之部で押韻する。整った四言句として讀むならば、第二・第三句は「妾私喜饒、自次眞止。君征行來。」となるが、第二句が韻をふみはずしている。上海博は之部の「喜」で句讀して「君有遠行、妾私喜、□自次□止、君旋行來」とするが、「妾私喜」では意味が通じない。ここでは「次」は脂部で叶韻したと考え、第二・第三句を六言句として讀んだ。ただし、三槐堂・付六の重圈銘帶鏡は第三句を「眞其□君征行來」とする。なお、上海博・三四の末句は「可長」で終わるが、三槐堂・付六により「久」字を補った。

第一句は銘文三〇八の「君有行」に「遠」字を加えて四言句にしたもの。

第二句の「喜饒」は、よろこびあふれる意。「次」は、とどめる。班固「典引」(『文選』卷四八)の「而允寤寐次於心」に李善は「次、止也。」と注する。

第三句の「征」は、ゆく。『楚辭』離騷の「濟沅湘以南征兮」に王逸注は「征、行也。」という。

第六句の「庇」は、こかげ。『左傳』僖公二十五年に「信、國之寶也。民之所庇也。得原失信、何以庇之。」という。

第八句の「有常」は、永久に變わらないこと。李斯が立てた琅邪石刻(『史記』秦始皇本紀)に「事業有常」とある。

三槐堂・付六の内圈銘は「君行有日反、母時□簡□、尙可治□□、心□不足思」と五言四句に讀まれているが、それでは押韻しな

い。拓本からみると、

君行有日反母時。

思簡念尙可治。

人兩心成不足思。

と釋される。このばあい「時」・「治」・「思」が之部で押韻する。

●三一 漢鏡三期

日有喜。 日び喜び有り。

月有富。 月ごとに富有り。

樂母事。 事母きを樂しむ。

常得意。 常へに意を得。

美人會。 美人會し、

竿瑟侍。 竿瑟侍す。

賈市程。 賈市程あり。

萬物平。 萬物平らかなり。

老復丁。 老は丁に復す。

死復生。 死は生に復す。

醉不知。 醉ひては知らず、

醒旦星。 旦星に醒む。

(注)

林分類F3。福岡縣立岩一〇號甕棺墓の連弧紋銘帶鏡(一號・四號鏡)などにみる(岡崎・一九七七)。整った三言詩である。上四句は漢鏡二期の銘文二二五～二二七(林分類F1)を改變したもの。上六句の「喜」・「事」・「侍」は之部、「富」・「意」は職部で、第五句の「會」をのぞいて押韻する。下六句は換韻し、第一一句の「知」をのぞいて「程」・「平」・「丁」・「生」・「星」は耕部で押韻する。甕

齋・下一二やK・八二は第一〇句で終わる。

第四句の「常得意」は銘文二二五では「常得所喜」、第五句の「美人會」は銘文二二七では「美人侍」とあった。

第七句の「賈市」は、あきない。雲夢睡虎地秦墓の「金布律」に「賈市居列者」、武威新出の「王杖詔書令」に「賈市母租」・「列肆賈市」などの用例がある（山田・一九八八）。「程」は、度量衡のはかり、ひいてはそれが基準に合うこと。『漢書』東方朔傳の「武帝既招英俊、程其器能、用之如不及。」に顏師古注は「程、謂量計之也。」という。

第八句の「平」は、均等にゆきとどくこと。『淮南子』時則訓に「準平而不失、萬物皆平、民無險謀、怨惡不生。」とある。

第九句の「老復丁」は、老人でも壯年にかえることをいう。漢・史游『急就篇』卷四に「長樂無極老復丁」とある。『漢舊儀』には「民年二十三爲正、…未二十三爲弱、過五十六爲老。」とあり、『通典』食貨に「大唐武德七年定令、男女始生爲黃、四歲爲小、十六爲中、二十一爲丁、六十爲老。」という。

第一〇句の「死復生」は、『漢書』五行志の「厥妖人死復生」や『後漢書』列女傳・董祀妻傳の「心恒絶兮死復生」など用例が多い。第二二句の「旦」は、夜明け。

●三二二 漢鏡三期～四期

日有喜。 日び喜び有り。

月有富。 月ごとに富有り。

樂母有事。 有事母きを樂しむ。

宜酒食。 酒食に宜し。

居而必安。 居れば必ず安んず。

無憂患。 憂患無し。

竿瑟侍兮、 竿瑟侍し、

心志驩。 心志歡よろこぶ。

樂已哉乎、 樂しみ已に哉よしまり、

固常然。 固より常然たり。

(注)

林分類F2。西安市範南村一三五號墓の連弧紋銘帶鏡（長安・圖三三）などにみる。銘文のはじまりに「二」記號がある。上三句は銘文三一とほぼ同じ。上四句の奇數句の「喜・事」は之部、偶數句の「富・食」は職部で押韻する。カールグレン（K・七九）はこの四句すべて押韻するとみなす。銘文二〇一・二一七もまた之部と職部の押韻例である。下六句は、奇數句に助辭の「而」「兮」「乎」を加え、四字と三字からなる七字句にしている。K・八〇は上四句も「日有喜。月有富。樂母有事。宜酒食。」と同型の七字句にしている。ただし、嚴窟二中・三四など漢鏡四期の方格規矩四神鏡では助辭を省略し、すべて三字句とする。「安」「患」「驩」・「然」は元部で押韻する。

第六句の「憂患」は、うれいわずらうこと。『周易』繫辭下に「作易者其有憂患乎」という。

第九句を長安・圖三三が「樂已茂極」と讀むのは誤り。「哉」は、はじめ。『爾雅』釋詁に「哉、始也。」とあり、疏に「哉者、古文作才。『說文』云、才、草木之初也、以聲近借爲哉始之哉。」という。

第一〇句の「常然」は、自然のままの状態。『莊子』外篇・駢拇に「天下有常然。常然者、曲者不以鉤、直者不以繩、圓者不以規、方者不以矩、附離不以膠漆、約束不以纆索。」という。内篇・養生

主に「因其固然」とあるのも同じ。

●四〇一 漢鏡四期

涑治銅華清而明。

銅華を鍊冶するに清にして明なり。

以之爲鏡宜文章。

之を以て鏡を爲るに文章に宜し。

延年益壽辟不羊。

年を延ばし壽を益し不祥を辟く。

與天無亟如日光。

天と與に極まり無く日の光の如し。

千秋萬歲樂未央。

千秋萬歲も樂しみ未央だ。

(注)

林分類H。江蘇省邗江縣姚莊一〇二號墓の連弧紋銘帶鏡（揚州博物館・二〇〇〇・圖六）などにみる。七言五句で、「明」・「章」・

「羊」・「光」・「央」は陽部で毎句押韻する。銘帶の長さにより第四・第五句に異同があり、「無亟而日月之光、千秋萬歲樂未央。」（K・七二）、「與天毋亟長樂未央。」（小校一五・九四）、あるいは「與天無亟」（小校一五・九七）に短くなった例もある。

第一句の「涑治」は「鍊冶」。「涑」と「鍊」は「東」を聲符とし、『説文』では「治」と「冶」はともに「台」聲である。鑛石を

製鍊すること。鏡銘のほとんどは三水偏につくるが、古典籍では『水經注』漸江水に「東有銅牛山、山有銅穴三十許丈、穴中有大樹神廟。山上有冶官、山北湖下有練塘里。『吳越春秋』云、句踐鍊冶銅錫之處。」とある。「涑治」は鹽のばあい。『周禮』鹽人の「祭祀共其苦鹽・散鹽」の鄭玄注に「杜子春讀苦爲鹽、謂出鹽直用不涑治。鄭司農云、散鹽、涑治者。玄謂散鹽、鬻水爲鹽。」という。「銅華」はしばしば「鉛華」と釋されてきた。奇觚一五・一一は、李商隱「杏花詩」の「鏡拂鉛華膩」や『雲笈七籤』に「丹砂生木、鉛華出金」とあるのを引いて、銅に鉛を調合して鑄造したと考える。し

かし、笠野毅（一九八三・二四七頁）が指摘するように、「銅華」の誤釋である。巖窟二上・六六は「同華」につくり、K・七三に引く金索六・三三は「銅錫」とする。

第二句の「文章」は、色とりどりの紋様、またはその見映えの美しさ。『史記』禮書に「刻鏤文章、所以養目也。」とある。つぎの銘文四〇二では「以之爲鏡昭身刑」とする。

第三句の「延年益壽」、第四句の「與天無亟」、第五句の「千秋萬歲」は、漢鏡二期に多い四字の吉祥句である。「樂未央」は漢鏡一期から用いられている。第三句の「羊」は、「祥」の省字。K・七四（奇觚一五・三〇）は第五句を「千萬旦來樂未央」とする。

●四〇二 漢鏡四期

涑治銅華得其清。

銅華を鍊冶して其の精を得。

以之爲鏡昭身刑。

之を以て鏡を爲るに身形を照らす。

五色盡具正赤青。

五色盡く具はり赤青を正す。

與君無亟畢長生。

君と與に極まり無く必ず長生せん。

如日月光兮。

日月の光の如し。

(注)

小校一五・九七（故宮・二〇に同じ）などの連弧紋銘帶鏡にみる。銘文四〇一をもつ連弧紋銘帶鏡よりわずかに後出する。前の七言四句は「清」・「刑」・「青」・「生」が耕部で押韻し、第五句の四言句は陽部の「光」で叶韻する。耕部と陽部の叶韻は、銘文一〇三・二一九に例がある。京大・四七二六の獸帶鏡（圖10）は、第一句の「清」を「菁」、第二句の「身」を「人」、第三句の「色」を「采」、第四句の「畢」を「必」とし、第五句を省略している（笠野・一九八三）。



圖10 銘文402 (京大4726・岡村拓本)

第一句と第二句の上四字は、銘文四〇一の二句と同じで、下三字を變えている。「身刑」は「身形」で、京大鏡では「人刑」とする。『莊子』外篇・知北遊の「是天地之委順也」の唐・成玄英の疏に「委、結聚也。夫天地陰陽、結聚剛柔和順之氣、成汝身形性命者也。」という。ここでは精良な銅鑛石を製鍊した良質の銅で鏡を鑄造すれば、人の姿を正しく映し出すことをいう。

第三句の「五色」は、京大鏡では「五采」とする。青白赤黑黃の五色である。『史記』項羽本紀は、劉邦にたいする范增の評として「吾令人望其氣、皆爲龍虎、成五采、此天子氣也。」という。「五采」が備わっていれば、天子の氣があるというのである。また、『史記』天官書の正義に引く京房『易飛候』は「視四方常有太雲、五色具、

其下賢人隱也。」と解説する。『晉書』天文志中は「青赤氣抱在日上、小者爲冠、國有喜事。青赤氣小而交於日下爲纓、青赤氣小而員、一二在日下左右者爲紐。青赤氣如小半暈狀、在日上爲負、負者得地爲喜。」といい、太陽には青赤の氣がとりかこみ、冠や纓・紐を象徵すると考えられていた。また、湖北省鄂州市梁子湖鄭家山二號墓の對置式神獸鏡(鄂州市博物館・二〇〇二・圖三二四)には「赤青大竟、日月同光、三星永出」という銘文があった。銘文の「五色盡具」は人が内なる氣を備え、「正赤青」は身だしなみを整えることをいう。鏡にはそれを助けるはたらきがあると考えられたのである。あるいは、五行説による五色と五金との對應からみれば、赤は銅、青は錫であるから、鏡の主要な原料である銅と錫を連想させる「赤青」を正す意味も内包されていたのかもしれない。

第四句の「畢」は「必」の假借。

●四〇三 漢鏡四期

聖人之作鏡兮、聖人の鏡を作るや、

取氣於五行、氣を五行に取り、

生於道康兮、性を道康に(取るに)、

咸有文章、咸な文章有り。

光象日月、光は日月を象り、

其質清剛、其の質は清剛。

以視玉容兮、以て玉容を視るに、

辟去不羊、不祥を辟去す。

中國大寧、中國は大いに寧んじ、

子孫益昌、子孫は益ます昌んなり。

黃裳元吉、黃裳元吉なれば、

有紀剛。

紀剛有り。

(注)

長沙市二一號墓〔中國科學院考古研究所編・一九五七〕の方格規矩四神鏡にみる。ここには段書安(一九九八・圖版五八)の釋文を示した。『詩經』にならった四言句が基本形で、偶數句の「行」・「章」・「剛」・「羊」・「昌」・「剛」のほか、第一・第三句の「鏡」と「康」も陽部で押韻する。第七句の「容」は東部、第九句の「寧」は耕部で、これらと叶韻する。陽部と東部の叶韻は銘文二二九に、陽部と耕部の叶韻は銘文一〇三・二一九・四〇二に例がある。

第一句から第三句までは『淮南子』秦族訓に「聖人懷天氣、抱天心、執中含和」とあるのが近い。『莊子』雜篇・外物では、聖人―賢人―君子―小人という序列である。

第三句の「生」は「性」の省字。『禮記』中庸に「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。」とあり、鄭玄注は「孝經說」曰、性者、生之質命、人所稟受度也。率、循也。循性行之、是謂道。」という。「康」は、五達の大道。『爾雅』釋宮に「五達謂之康」とあり、『釋名』釋道には「五達曰康、康、昌也、昌、盛也。」という。『爾雅』は「二達謂之道路。三達謂之岐旁。……」とあり、ここでは五行にしたがつて五達の道「康」としたのである。「道康」の用例として『御覽』天部三に引く『搜神記』に「吳孫堅夫人懷孫策、夢日月入懷、解道康。」とある。

第六句の「清剛」は「精剛」に同じで、清らかで強靱なこと。揚雄『甘泉賦』(『文選』卷七)に「方攬道德之精剛兮、俾神明與之爲資。」とあり、李善注は「精剛、精微剛強也。」という。刃物では『藝文類聚』軍器部に引く『典論』に「魏太子造百辟匕首二。其一理似堅冰、名曰清剛。」とある。

第七句の「玉容」は、美しい容姿。陸雲「大將軍宴會被命作詩」(『文選』卷二〇)に「俯觀嘉客、仰瞻玉容。」とある。

第八句の「不羊」は「不祥」。

第一〇句の「中國」は、中央の國。『詩經』大雅・民勞の「惠此中國、以綏四方。」に毛傳は「中國、京師也、四方、諸夏也。」という。しかし、ここでは漢王朝の支配がおよぶ領域をいう。

第一一句の「常」は「裳」と同じ「尙」聲。「黃裳元吉」は、『易經』坤に「六五、黃裳、元吉。象曰、黃裳元吉、文在中也。」とあり、王弼は「黃、中之色也、裳、下之飾也。『坤』爲臣道、美盡於下。夫體無剛健而能極物之情、通理者也。以柔順之德、處於盛位、任夫文理者也。垂黃裳以獲元吉、非用武者也。極陰之盛、不至疑陽、以『文在中』、美之至也。」と注し、孔穎達疏は「坤爲臣道、五居君位、是臣之極貴者也、能以中和通於物理、居於臣職、故云黃裳元、大也、以其德能如此、故得大吉也。」という。臣下の最高位にある者が德をおこなえば、大きな吉祥が得られることを豫言する。

第一二句の「紀剛」は「紀綱」。『禮記』樂記に「聖人作爲父子君臣以爲紀綱。紀綱既正、天下大定。」とあり、父子君臣の道が紀綱で、その規律が守られるなら、天下が治まるというのである。また、その孔疏に引く『禮緯含文嘉』には「三綱、謂君爲臣綱、父爲子綱、夫爲妻綱矣。六紀、謂諸父有善、諸舅有義、族人有敘、昆弟有親、師長有尊、朋友有舊、是六紀也。」という。

内野熊一郎(一九八七・四五頁)はこの銘文について「聖人作造の神聖にして、且つ五行循環の運氣や、多面流通の中心的道康に、取成せる鏡を常用して、其の形象・光澤・心質に宿る文飾・光象・清剛・公平性を以つて、玉容・萬象を寫し見る様にすれば、それら玉容・萬象は、公正眞實な姿に寫し出される。」と解説する。

なお、巖窟二中・九七の獸帶鏡につぎのような銘文がある。

幽涑神石取其清。

神石を幽鍊し其の清を取る。

金銀銅鉛以相成。

金銀銅鉛を以て相ひ成る。

聖人博觀。

聖人は博觀す。

世有主方。

世々方を主る有り。

時起容貌、

時に容貌を起し、

治鏡爲右見朱顏。

鏡を治めて右と爲せば朱顏現る。

夫王母、永益壽、

夫の王母は、永へに壽を益し、

宜孫子、常保皇。

孫と子に宜し、常へに皇を保たん。

鈕座に「神龜」の二字があり、梁上椿は北魏神龜年間（五一八—一九）の作とみなした。笠野毅（二九八三・二六六頁）は漢鏡の銘文としてとりあげ、第三句以下を「聖人博觀世有主、方時起容貌治鏡、爲右見朱顏夫王母、永益壽、宜孫子、常保皇。」と句讀したが、韻をふみはずし、文意の通じがたいところがある。ここでは耕部の「清」・「成」、元部の「觀」・「顏」、陽部の「方」・「皇」とが叶韻するとして釋讀したが、末四句は韻をふみはずし、「幽涑神石」・「金銀銅鉛」・「常保皇」など漢鏡四期には例のない語句がある。しかも、紋様の鑄あがりは模糊とし、梁の觀察によれば、銅質が唐鏡に似ているというから、後世の贋作であつた疑いがぬぐいきれない。ここに備考として記すにとどめる。

●四〇四 漢鏡四期

視容正己鏡爲右。

容を視て己を正し、鏡を右と爲す。

得氣五行有剛紀。

氣を五行に得て、剛紀有り。

法似于天終復始。

法は天に似^などり、終りて復た始まる。

中國大寧宜孫子。

中國は大いに寧んじ、孫と子に宜し。

（注）

廣西壯族自治區梧州市低山二號墓の方格規矩四神鏡（廣西壯族自治區博物館編・二〇〇四・圖七二）にみる。報告では「視容正己鏡□□、得氣五行有□紀、□□公子終復始、中國大寧宜孫子」と釋したが、寫真と拓本をもとに改めた。銘文四〇三に用いられた「紀剛」を「剛紀」、「子孫」を「孫子」とし、「右」・「紀」・「始」・「子」が之部で毎句押韻する。

第一句の「視容正己」は銘文四〇六の「見躬身」に類似し、第二句は銘文四〇三の「取氣於五行」に類似する。「中國大寧」の句とともに、銘文四〇三との近い關係をものがたる。

第二句の「剛紀」の用例として、江蘇省東海縣尹灣六號墓の「神烏賦」（連雲港市博物館ほか・一九九七・一四八頁）の「天地剛（綱）紀、各有分理」がある。

第三句の「似」は、かたどる。『說文』八上に「似、象也。」という。銘文四一七の「法象天地」に類似する。天の法則は「終復始」とくりかえし循環することをいう。『淮南子』天文訓には「終而復始」として頻出し、銘文四〇六では「周復始」とある。

●四〇五 漢鏡四期

五行德令鏡之精。

五行の德令は鏡の精なり。

光象日月智人請。

光は日月を象り、人の情を知る。

常保聖樂長生。

常へに聖（賢）を保ち、長生を樂しむ。

風雨時節五穀成。

風雨は時節あり、五穀成る。

家給人足天下平。

家給人足して、天下平^{わたや}かなり。

子孫累世永安寧。

子孫累世して、永く安寧ならん。

(注)

小校一五・九三の方格規矩四神鏡にみる。「清」・「請」・「生」・「成」・「平」・「寧」は耕部で毎句押韻する。

第一句の「德令」は、恵みのある命令。『論衡』偶會に「使聖王出德令也。」とある。銘文四〇三に聖人の鏡は氣を五行に取ることを記しており、そのような鏡が清らかで日月のように輝いていることをうたう。

第二句の「請」は「情」。「人情」は、先天的に與えられた喜怒哀懼愛惡欲という感情。『禮記』禮運に「何謂人情。喜怒哀懼愛惡欲。七者弗學而能。」とあり、「先王以承天之道、以治人之情。」という。また、『淮南子』本經訓には「天愛其精、地愛其平、人愛其情。天之精、日月星辰雷電風雨也。地之平、水火金木土也。人之情、思慮聰明喜怒也。」と、人情は思慮・聰明・喜怒という。小校は「普人請」と釋したが、それでは文意が通じない。「智」は「知」の繁字。「知人請」は銘文四〇七にある。

第三句は聖賢の「賢」字、もしくは聖人の「人」字が脱落し、六字になっている。

第四句の「風雨時節」は、風雨が時節になつてゐること。『漢書』魏相傳に「君動靜以道、奉順陰陽、則日月光明、風雨時節、寒暑調和。三者得敘、則災害不生、五穀熟、絲麻遂、中木茂、鳥獸蕃、民不夭疾、衣食有餘。」とあり、『淮南子』覽冥訓にも「於是日月精明、星辰不失其行、風雨時節、五穀登孰」とある。銘文四五四に「風雨時節五穀熟」とあるのも同じ。

第五句の「家給人足」は、家ごとに給し人ごとに足る、どの家も人も生活が豊かであること。元始元年(後二)に王莽の政治が「百姓家給人足」(『漢書』王莽傳上)したことを讃える太後の詔があり、

この銘文はそのことを指しているであろう。その顔師古注に「給、足也。家給、家家自足。」という。「平」は、太平。同じときの策書に「賜嘉號曰安漢公、輔翼于帝、期於致平、毋違朕意」とあり、師古は「致太平。」と注する。

●四〇六 漢鏡四期

維鏡之舊生兮質剛堅。

處于名山兮俟工人。

湊取菁華兮光耀遵。

升高宜兮進近親。

昭兆朕兮見躬身。

福喜進兮日以前。

食玉英兮飲灋泉。

倡樂陳兮見神鮮。

葆長命兮壽萬年。

周復始兮傳子孫。

維れ鏡の舊性や、質は剛堅なり。

名山に處り、工人を俟てり。

精華を鍊取し、光耀は焔なり。

高誼に升め、近親に進めん。

兆朕を照らし、躬が身を見ん。

福喜進みて、日び以前めん。

玉英を食らひ、灋泉を飲む。

倡樂陳なり、神仙現る。

長命を保ち、壽は萬年ならん。

周りて復た始まり、子孫に傳へん。

(注)

傳西安市出土の獸帶鏡(長安・圖四二)にみる。三字句や四字句を「兮」で連綴した雜言體で、「堅」・「人」・「親」・「身」・「年」は眞部、「遵」・「孫」は文部、「前」・「泉」・「鮮」は元部で叶韻する。文部と元部との叶韻例は銘文三〇六にあり、眞部とも音が近い。

第一句の「維」は、發語の助辭「これ」。『詩經』召南・鵲巢に「維鵲有巢、維鳩居之。」とある。「舊」は、つね。『荀子』宥坐の「卒遇故人、曾無舊言」の唐・楊倞注に「舊言、平生之言。」という。「生」は「性」の省字。「舊性」は、ふつうに具有している性質。『論衡』答佞に「人之舊性不辨、人君好辨」とある。鏡の性質

が剛堅であることは、銘文四〇三に「其質清剛」とある。

第二句の「名山」は、銘文四五二に「徘徊名山采神草」という仙界の例があるが、ここでは有名な銅鑛山であろう。銘文四四二に「漢有善銅出丹山」とみえる丹陽の名山か。後漢の孔宙碑（永田・一九九四・八五）に「陟名山、采嘉石」という採石の例がある。

第三句の「遵」を傳嘉儀（一九七九）は「煇」の假借とする。光り輝くこと。『國語』鄭語に「黎爲高辛氏火正、以淳耀敦大、天明地德、光照四海。」とあり、『説文』十上に「煇、明也。」という。あるいは、雜じりけのない光の意で「純」の假借か。いずれにせよ、この句は、良質な銅で鑄造した、光り輝く鏡であることをうたう。

第四句の「升・進」は、ささげる。張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「升觴舉燧」とあり、李善注に「升、進也。」という。「宜」は「誼」で、「高誼」は、よしみのある人。『漢書』董仲舒傳に「子大夫明先聖之業、習俗化之變、終始之序、講聞高誼之日久矣。」とある。この鏡は直径二五・四センチと大きく、宮中での贈答用に用いられたのであろう。

第五句の上三字を傳嘉儀（一九七九）は「昭兆煥」と釋し、「昭煇煥」としたが、笠野（一九九五）は五島美術館に藏する同式の獸帶鏡銘を「□兆朕」かとした。本鏡銘の字形からみて、笠野の釋が妥當である。「兆朕」は、吉凶のきざし。左思「魏都賦」（『文選』卷六）に「兆朕振古、萌柢疇昔。」とあり、注に「兆、猶機事之先見者也。『淮南子』（倣眞訓）曰、欲與物接而未成兆朕者也。許慎曰、朕、兆也。直軫反。」という。あるいは、形體の意か。『淮南子』倣眞訓の高誘注に「兆朕、形怪也。」とあり、于省吾『雙劍謄淮南子新證』卷一に「怪」は「性」の訛で、「性」は「體」であるから、

「兆朕」は「形體」の意味だという。

第六句の「福熹」は「福喜」または「福禧」。吉祥のしるし。『論衡』死僞に「光武困厄河北、老人教誨、命貴時吉、當遇福喜之應驗也。」という用例がある。「前」を陽部の「萌」と釋すことは、押韻に無理がある。「前」は、「福熹進」の「進」と同意。「日以進」は、『淮南子』繆稱訓に「夫織者日以進、耕者日以卻。」という用例がある。

第七句の「玉英」は、精良な玉。『楚辭』離騷の「夕餐秋菊之落英」に王逸注は「英、華也。」という。また、『淮南子』墜形訓には「清水有黃金、龍淵有玉英。」あるいは『文選』卷七「甘泉賦」の注に引く『范子』に「玉英出藍田。」とあり、『孝經援神契』に「玉英、玉有英華之色。」という。「豊泉」は「體泉」。『爾雅』釋天に「甘雨時降、萬物以嘉、謂之體泉。」とある。この句に近い用例として『淮南子』泰族訓に「王喬・赤松去塵埃之間、…吸陰陽之和、食天地之精」がある。

第八句の「倡」は、歌舞する者、遊女。『説文』八上に「倡、樂也。」とあり、『漢書』武五子傳に「（廣陵王劉）胥壯大、好倡樂逸游」とある。「見」は「現」、「鮮」は「仙」の假借。第九句の「葆」は「保」の繁字。

●四〇七 漢鏡四期

内而光、	内よりして光き、
明而清。	明らかにして清らかなり。
凍石華、	石華を鍊りて、
下之菁。	之の精を下せり。
見弓己、	躬から己を見て、

知人請。 人の情を知る。

心志得、 心志得られ、

畢長生。 必ず長生せん。

(注)

長沙市黑槽門二號墓の方格規矩四神鏡(湖南・六三)や西安市方新村二九號墓の獸帶鏡(長安・圖四)などにみる。嚴窟二中・九六の獸帶鏡には起句の前に「…」記號があり、ここでは笠野毅(一九九五)の釋讀を示した。三言二句を一聯とし、偶數句の「清」・「善」・「請」・「生」が耕部で押韻する。

第一句を笠野は、内部が充實して光が四方にひろがる意味と考え「内て光がり」と訓じた。この第一・第二句は、銘文二〇四の「内清質以昭明、光輝象夫日月。」と同義である。小校一五・九三の獸帶鏡は、この第一・第二句を省略し、「…」記號につづいて第三句からはじまっている。

第三・第四句は、銘文四〇二の「凍冶銅華得其清」に近似する意味である。「凍石華」については問題がないが、笠野が「下」を「獲」の、「之」を「得」の假借とみたのは無理がある。「下之善」は、銘文四〇二の「得其清」と同じ構文で、「下」はそのままだと「くだす」と讀むべきである。これに近い用例として『抱朴子』登涉に「以五月丙午日月中、擣五石、下其銅…(以爲劍)。」がある。

笠野は第五句の「弓」を「躬」の假借、「己」を「尸」と釋して「身」の假借とした。しかし、「尸」につくるのは簠齋・下四のみで、そのほかの鏡は「己」につくる。「おのれ」の意。銘文四〇六の「見躬身」がこれに類似する。

第六句の「請」は「情」の假借。銘文一〇三に「鑑不隱請」とあるのも同じ。「知人請」は同時期の銘文四一一にみえ、銘文四〇五

には「智人請」とあった。

第七句は銘文三一二に「心志驩」という例がある。第八句の「畢」は「必」の假借。銘文四〇二に「畢長生」と「必長生」とがある。簠齋・下四は「樂長生」とする。「樂長生」は銘文四〇四に既出。

●四〇八 漢鏡四期

金之青。 金の精は、

視吾刑。 吾が形を視、

見至誠。 至誠を現はさん。

長思君。 長く君を思ふ。

時來游。 時來たれば遊ぶ。

宜子孫。 子孫に宜し。

樂無憂。 樂しみて憂ひ無し。

(注)

江蘇省盱眙縣東陽四號墓の方格規矩四神鏡(南京博物院・一九七九)にみる。周縁の菱雲紋の間に一字ずつ配し、起句と末句とのあいだの菱雲紋には「…」記號がはいる。第一句から第三句までは「善」・「刑」・「誠」が耕部で押韻する。第四句からは、偶數句の「君」・「孫」が文部、奇數句の「游」・「憂」が幽部で押韻する。このように奇數句と偶數句とが交互に押韻する例として、銘文二一八や銘文四〇七がある。

第一・第二句は、銘文四〇二の「凍冶銅華得其清。以之爲鏡昭身刑。」の省略形。第一句は銘文四〇五の「鏡之清」と、第二句は銘文四〇六の「見躬身」と同義。

第三句の「誠」字を報告では未讀だが、拓本の字形と押韻から釋

讀した。「至誠」は、この上ない誠實さ。『禮記』中庸に「唯天下至誠、爲能盡其性。」とあり、疏に「唯天下至誠者、謂一天下之内、至極誠信爲聖人也。」という。

●四〇九 漢鏡四期

服此鏡、此の鏡を服さば、
得大神。大神を得。
使此身。此の身をして、
作三陳。四陳を作さしむ。
長富貴。長く富貴にして、
毋憂患。憂患母し。
鏡清明、鏡は清明なり、
傳子孫。子孫に傳へよ。

(注)

小校一五・八二(K・九八)の方格規矩四神鏡の方格銘である。小校は「鏡清明」を初句とするが、起句を示す「・」記號が「服」字の前にある。「神」・「身」・「陳」が眞部、「患」が元部、「孫」が文部で叶韻する。文部・眞部・元部の叶韻例は銘文四〇五にある。周縁には七言句からなる銘文四五三があり、この方格銘はその末句の「云何好」につづく本鏡の效能を書き連ねたもの。

第二句の「得大神」とは、鏡によつてすぐれた效能が與えられること。『荀子』王制に「夫是之謂大神。」とあり、楊倞注に「能變通裁制萬物、故曰大神也。」という。

第四句の「三」は「四」。王莽代に特徴的にみられる表記である(岡村・一九九二)。「四陳」は、四神で軍陳をなし、天を象ることか。『禮記』曲禮上に「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎。」と

あり、鄭玄注に「以此四獸爲軍陳、象天也。」という。

第七句の「鏡清明」は、鏡が清らかで明るくかがやくことをいうが、『廣雅』釋天の「七耀行道」に「金神謂之清明」とあり、清明である鏡は金神であるという意味を内包する。

鈕座の圓圈には「日月憲。宜酒食。樂富貴。」という三言句があり、この銘文に後續するのであろう。

●四一〇 漢鏡四期

長樂未央。長く樂しみ未だ央きず。
利貳親。二親に利し。
宜弟兄。弟兄に宜し。
壽萬年。壽は萬年ならん。
長相保。長く相ひ保つ。
宜子孫。子孫に宜し。
樂已哉兮、樂しみ已に哉まり、
固當然。固より當然たり。

(注)

五島美術館・一一一や奇觚一五・三二の重圈銘帶鏡の内圈銘。外圈には銘文四〇一をいれる。起句の前に「・」記號があり、第二句から三言七句の吉祥句である。第四句までは、奇數句の「央」・「兄」が陽部、偶數句の「親」・「年」が眞部で押韻する。下四句は換韻し、偶數句の「孫」は文部、「然」は元部で叶韻する。

同時期の銘文ではすべて「長保二親」であり、「利貳親」はめずらしい。「利」は、便宜。『國語』魯語下の「唯子所利」に韋昭注は「利、猶便也。」という。

第三句の「宜弟兄」は漢鏡二期の銘文二一八にみえる。

第七・第八句とほぼ同じ句に銘文三二二の「樂已哉乎、固當然。」がある。

●四一一 漢鏡四期

昭是明鏡知人請。

是の明鏡に照らせば人の情を知る。

左龍右虎得天菁。

左龍と右虎は天精を得。

朱爵玄武法列星。

朱雀と玄武は列星に法る。

八子十二孫居安寧。

八子十二孫は安寧に居る。

常宜酒食樂長生兮。

常へに酒食に宜し、長生を樂しむ。

(注)

京博・二四の方格規矩四神鏡などにみる。「請」・「菁」・「星」・「寧」・「生」は耕部で毎句押韻する。

K・八七は第一句を「昭兒明鏡」と釋すが、K・九〇（銘文四一五）第二句は「昭此明鏡」であるから、「兒」ではなく、「此」と同義の「是」とみるのが妥當である。「知人請」は銘文四〇七に既出。

第二・第三句は、K・八七が引くように、『禮記』曲禮上に「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎。」とあり、鄭注に「以此四獸爲軍陳、象天也。」というのが近い。「天菁」は「天の精」、「法列星」は「天の星に象る」意（林・一九七三）。「天精」は、『淮南子』本經訓に「天愛其精、地愛其平、人愛其情。天之精、日月星辰雷電風雨也。」とある。また、『蜀書』郤正傳に引く『越絕書』に「當造此劍之時、赤堊之山破而出錫、若邪之谿涸而出銅、雨師掃灑、雷公擊鼓、太一下觀、天精下之、歐冶乃因天之精、悉其伎巧。」とあり、「天の精」によつてすぐれた銅劍が鑄造できたことをいう。「列星」は、『楚辭』九歎・逢紛に「竝光明於列星」という用例がある。なお、「朱爵」は「朱雀」の假借。「朱鳥」と表記されることも

ある。

三槐堂・拓一一の方格規矩四神鏡は、この銘文につづけて

右鬼神、鬼神を右け、

物自成。物自ら成る。

と三言二句を加える。「成」は耕部で押韻する。

●四一二 漢鏡四期

昭是明鏡人快意。

是の明鏡に照らせば人は意を快くす。

左龍右虎三時置。

左龍と右虎は四時に置く。

長保二親樂無事。

長く二親を保ち、無事を樂しむ。

長宜子孫家大富。

長く子孫に宜し、家は大いに富む。

與君相保常相憶。

君と與に相ひ保ち、常へに相ひ憶ふ。

(注)

林分類J。金索六・五の方格規矩四神鏡などにみる。「意」・「置」・「富」・「憶」は職部で、「事」は之部だが、カールグレン（K・九二）説ではすべて押韻する。職部と之部の押韻については、銘文二〇一・二二七の注を參照。

第一句の「昭是明鏡」は銘文四一二と同じ。小校一五・八一上の方格規矩四神鏡は「巧是明鏡成快意」とする。「快意」は、心を満足させる。『史記』樂書に「上古明王舉樂者、非以娛心自樂、快意恣欲」とあり、『急就篇』卷一に「用日約少誠快意」とある。

第二句の「三」は「四」。この句の類例として宣帝卽位の歌と傳える鼓吹鏡歌「聖人出」〔宋書〕樂志に「駕六飛龍四時和。君之臣明護不道。」とある。

第五句の「憶」は「意」の繁字。銘文四〇二に「與君無亟」とあるが、「與君相保」は初出。

金索六・五は、鏡の縁に「東阿官□」の刻文があり、東阿縣魚山の麓で入手したという。近くに魏・陳思王曹植の墓があり、その刻文から魏の宮中で用いたものと推測する。この鏡はのち徐乃昌が入手し、刻文を「東阿官立」と讀んだ〔末永ほか編・一九八三〕。しかし、これが魏代の鏡という確證はなく、少なくとも原鏡は漢鏡四期である。なお、曹植墓は一九五一年に發掘され、「太和七年・陳王陵」という銘文軀が出土した〔劉玉新・一九九九〕。

千鏡堂・九六の方格規矩四神鏡は、第四・第五句をつぎのように改變している。

子孫眾多皆爲吏。 子孫眾多^{かず}多く、皆な吏と爲る。
與天母^{あま}巫家大富。 天と與に極まり母く、家は大いに富む。

「吏」は「事」と同じ之部で、すべて押韻する。

●四一三 漢鏡四期

朱氏明竟快人意。 朱氏の明鏡は人の意を快くす。
上有龍虎三時置。 上に龍虎有りて、四時に置く。
常保二親宜酒食。 常へに二親を保ち、酒食に宜し。
君宜官秩家大富。 君官秩に宜しく、家は大いに富む。
樂未央、宜牛羊。 樂しみ未だ央さず、牛羊に宜し。

(注)

嚴廋二中・二六の方格規矩四神鏡などにみる。「意」・「置」・「食」・「富」は職部、「央」・「羊」は陽部だが、カールグレン(K・一一八)はすべて押韻するという。

冒頭の「朱氏」について、同時期のいわゆる王莽鏡には「王氏昭鏡四夷服」という例があるが、それをのぞけば漢鏡四期で個人名を冒頭に掲げた唯一の例である。いわゆる王莽鏡の「王氏作鏡」をふ

くめ「某氏作」の出現は、これよりわずかに後出する。

末句の「宜牛羊」は、前漢鏡銘としてはめずらしい例で、後漢末期から多くなる。これは銘文の冒頭に「朱氏明鏡」をうたい、市場で鏡が販賣されたことと關連があろう。賈誼「過秦論」(『文選』卷五二)に「陶朱・猗頓之富」とあり、その注に「史記」(貨殖列傳)曰、范蠡之陶、爲朱公、以爲陶天下之中、皆諸侯四通、貨物所交易也。乃治產積十九年之間、三致千金。『孔叢子』曰、猗頓、魯之窮士也、耕則常飢、桑則常寒、聞朱公富、往而問術焉。公告之曰、子欲速富、當畜五特。乃適河東、大畜牛羊于猗氏之南、其滋息不可計。以興富猗氏、故曰猗頓也。』という。交易の中樞にある陶で巨萬の富をなした朱氏と、その教えを受けて牛羊を繁殖させた猗頓とは、漢代の市場において傳説化していたのである。

この「樂未央」につづいてK・一一九は、

富貴昌。 富貴昌んなり。

與君相保、 君と與に相ひ保ち、
敝日月光兮。 日月の光と敝^へせん。

とする。「央」・「昌」・「光」は陽部で押韻する。「與君相保」は銘文四一二にもみえる。カールグレンは「敝」を「下にする」意味とし、「(鏡が)太陽と月の光を凌駕する」と解釋した。近い用例として『韓非子』存韓に「陛下雖以金石相弊、則兼天下之日未也。」とあり、清・王先慎『集解』の「弊、盡也。」にしたがえば、「日月の光が盡きるまで、永遠に」の意味になろう。「敝」と「弊」は聲義を同じくする。

●四一四 漢鏡四期

角王巨虛日有意。 角王・巨虛、日び喜び有り。

昭此明鏡誠快意。

此の明鏡に照らせば、誠に意を快くす。

上有龍虎三時置。

上に龍虎有りて、四時に置く。

長保二親樂母事。

長く二親を保ち、無事を樂しまん。

子孫順息家富熾。

子孫順息し、家は富み熾んならん。

予天無極受大福。

天と與に極まり無く、大福を受けん。

(注)

小校一五・六四の方格規矩四神鏡などにみる。「意」・「事」は之部、「意」・「置」・「熾」・「福」は職部で、カールグレン(K・九〇)はすべて押韻するといふ。

第一句の「巨虚」は、K・八八が考證するように、前脚は鹿、後脚は兎の「邛邛距虚」という架空の獸で、蹶を背負つて逃げるといふ。すなわち、「爾雅」釋地に「西方有比肩獸焉。與邛邛距虚比、爲邛邛距虚齧甘草、卽有難、邛邛距虚負而走、其名謂之蹶。」とあり、『呂氏春秋』慎大覽・不廣には「北方有獸、名曰蹶、鼠前而兔後、趨則跲、走則顛、常爲蹶蹶距虚取甘草以與之。蹶有患害也、蹶蹶距虚必負而走。此以其所能、託其所不能。」といふ。この二種の動物について林巳奈夫(一九七八)は、蒙古高原に棲息する跳鼠と驢馬がモデルだと考證している。いっぽう「角王」について金索六「漢角王鏡二」では、『後漢書』南匈奴傳に「其大臣貴者左賢王、次左谷蠡王、次右賢王、次右谷蠡王、謂之四角。次左右日逐王、次左右溫禺鞹王、次左右漸將王、是爲六角。」とあり、「四角羌王」や「四角胡王」という漢印があることから、「角王巨虚」は遊牧民の王名だと推測している。あるいは、銘文四一六にあげた古鏡・中三の獸帶鏡には、朱雀・玄武、青龍・白虎が對峙する圖像のほか、有角獸と無角獸とが對峙する二組の圖像があり、「角王」は北方草原地帯の「巨虚」と對になる有角の祥瑞であつたのかもしれない。

第二・第四句は、銘文四一二・四一三の上三句と類似する。

第五句の「予」は「與」の假借。「與天無極」は銘文二二四・二一五に例がある。

●四一五 漢鏡四期

角王巨虚日有熹。

角王・巨虚、日び熹び有り。

延年益壽去憂事。

年を延ばし壽を益し、憂事を去らん。

長樂萬世宜酒食。

萬世まで長く樂しみ、酒食に宜し。

子孫賢家大富。

子孫は賢く、家は大いに富まん。

(注)

小校一六・六七の獸帶鏡の内圈銘にみる。外圈には銘文四四五の「新有善銅出丹陽」銘をいれた、いわゆる王莽鏡である。起句の前に「…」記號をいれ、「意」・「事」は之部、「食」・「富」は職部で、カールグレン(K・八八)説ではすべて押韻する。

第一句は銘文四一四と同じ。

第二句の「延年益壽」や第四句の「宜酒食」は、漢鏡二期に多く、漢鏡三期に廢れたのち、漢鏡四期の銘文四〇一などにふたたび現れた。

●四一六 漢鏡四期

角王巨虚辟不詳。

角王と巨虚は不祥を辟く。

倉龍白虎神而明。

蒼龍と白虎は神にして明なり。

赤鳥玄武主陰陽。

赤鳥と玄武は陰陽を主る。

國寶受福家富昌。

國の寶は福を受け、家は富み昌えん。

長宜子孫樂未央。

長く子孫に宜し、樂しみ未央きず。

(注)

古鏡・中三(K・八九)の獸帶鏡にみる。起句の前に「・」記號があり、「詳」・「明」・「陽」・「昌」・「央」が陽部で毎句押韻する。

第一句の「詳」は「祥」。

第三句の「赤鳥」は「朱雀」または「朱鳥」。『春秋繁露』服制像に「劍之在左、青龍之象也。刀之在右、白虎之象也。戟之在前、赤鳥之象也。冠之在首、玄武之象也。四者、人之盛飾也。」という。

第四句の「寶」は、貴ぶこと。『淮南子』説山訓に「侯王寶之、爲天下正。」とあり、高誘注に「寶、重也。」という。つまり、「國寶」は、國の重鎮。

●四一七 漢鏡四期

角王巨虛辟不羊。

長生貴富宜侯王。

昭爵玄武利陰陽。

十子九孫治中央。

法象天地、

如日月光。

千秋萬歲、

長樂未央。

角王と巨虚は不祥を辟く。

長生貴富にして、侯王に宜し。

朱雀・玄武は陰陽に利し。

十子九孫は中央を治む。

法は天地に象り、

日月の光の如し。

千秋萬歲にして、

長く樂しみ未央きず。

(注)

五島美術館・二八三の獸帶鏡にみる。第四句までが七言句で、「羊」・「王」・「陽」・「央」が陽部で毎句押韻する。第五句から四言句となり、偶數句の「光」と「央」が陽部で押韻する。

第三句の「昭爵」は「朱爵(雀)」であろう。王力の古音説では「昭」は「章宵」、「朱」は「章侯」で、音が近かった。本銘文は朱

雀玄武の句だけで、青龍白虎にかんする句はない。「利」は便宜。銘文四一〇の注を参照。

第四句の「十子九孫」は、後漢の畫像鏡(藤花二・三)に例がある。銘文四一一の「八子十二孫」と同じように、「十」と「九」は數が多いことをいう。『説文』三上に「十、數之具也。一爲東西、一爲南北、則四方中央備矣。」とあり、『易經』屯の「十年乃字」の疏に「十者、數之極。數極則復。」という。「九」は「公羊傳」莊公十九年に「諸侯壹聘九女」とあり、何休注に「九者、極陽數也。」という。

第五句に類似する語句に銘文四〇四の「法似于天」がある。第六句は銘文四〇二に既出。第七句の「万」は「萬」の古字。銘文四二二・四二四など「上大山見神人」の句をもつ銘文は、ほとんどが「万」の字を用いる。

●四一八 漢鏡四期

朱爵玄武順陰陽。

八子九孫治中央。

照面目、

身萬全。

象衣服、

好可觀。

君宜官秩、

葆子。

朱爵と玄武は陰陽を順ふ。

八子九孫は中央を治めん。

面目を照らし、

身は萬全なり。

衣服を象り、

好く觀る可し。

君官秩に宜しく、

子(孫)を保たん。

(注)

奇觚一五・五の方格規矩四神鏡の方格銘にみる。周縁に「大泉五十」錢文のある、いわゆる王莽鏡である。カールグレン(K・一二

一)は「朱爵玄武順陰陽。八子九孫治中央。照面目身萬全象。衣服好可觀。君宜官秩保子□。」と釋すが、つぎの銘文四一九を參考に第三句以下を三言句を主とする句讀に改めた。末句は銘帶に餘分がないため二字のみとなり、K・一二二は「孫」字の脱落とみている。「陽」・「央」は陽部で押韻し、第三句から換韻して「全」・「觀」は元部、「孫」は文部で叶韻する。

第一句は、銘文四一八第三句の「主」を「順」に換える。「順」は、ととのえる。「順陰陽」の用例として『漢書』藝文志の「儒家者流、蓋出於司徒之官、助人君順陰陽明教化者也。」がある。

第三句の「面目」は、容貌。『詩經』小雅・何人斯に「有觀面目、視人罔極。」という用例がある。第四句の「萬全」は、十分に整っていること。『漢書』伍被傳に「聰者聽於無聲、明者見於未形、故聖人萬舉而萬全。」とある。第三句から第六句の意味は、銘文二五〇・二五一の「昭察衣服觀容貌」と類似し、本鏡によつて容姿が正しく映しだされることをいう。

●四一九 漢鏡四期

昭匈脅、 胸と脇とを照らし、
身萬全。 身は萬全なり。
象衣服、 衣服を象り、
好可觀。 好く觀る可し。
宜佳人、 佳人に宜し、
心意驩。 心意歡ぶ。
長裳志、 長く志を尙び、
固常然。 固より常然たり。
食玉英、 玉英を食らひ、

飲澧泉。 醴泉を飲む。

駕蜚龍、 蜚龍に駕して、

乘浮雲。 浮雲に乗る。

周復始、 周りて復た始まり、

傳子孫。 子孫に傳へん。

(注)

三槐堂・八〇と浙江省嵊縣の方格規矩四神鏡(浙江・一七)にみる。釋文はおもに三槐堂にしたがった。「全」・「觀」・「驩」・「然」・「泉」は元部、「雲」・「孫」は文部で、偶數句はすべて押韻する。

第四句までは銘文四一八の第三句から第六句を改變したもの。第五句の「佳人」を浙江・一七は「街人」と釋す。「御人」のような字形にもみえる。第七句を三槐堂は「長裳志」と釋し、「裳」は同聲の「堂」の假借とするが、むしろ「尙」の假借であろう。「尙志」は、こころざしを高くすること。『孟子』盡心上に「王子墊問曰、士何事。孟子曰、尙志。曰、何謂尙志。曰、仁義而已矣。」とある。「固常然」は銘文三二二・四一一に既出。

廣州市四〇〇五號墓の方格規矩四神鏡(廣州・圖二〇九・三)は、この上八句だけで、三槐堂・拓九〇の方格規矩四神鏡は、第一句を「召(照)容貌」とし、第六句で終わっている。

第九・第一〇句は、銘文四〇六に「食玉英兮飲澧泉」とあった。

第一一句の「蜚龍」は、賈誼『新書』容經に「龍之神也、其惟蜚龍乎。能與細細、能與巨巨、能與高、能與下。吾故曰、龍變無常、能幽能章。」とあり、『論衡』龍虛に「『山海經』言、四海之外、有乘龍蛇之人。世俗畫龍之象、馬首蛇尾。……『慎子』曰、蜚龍乘雲、騰蛇游霧、雲罷雨霽、與蟻・蟻同矣。」とある。また、古詩の「張公神碑歌」に「車騎駱驛兮交錯重。乘輓輅兮駕蜚龍。驂白鹿

兮從仙僮。游北嶽兮與天通。」とみえる。第一二句の「浮雲」は、漢鏡二期の銘文二四八では日月の光を遮蔽するものだったが、ここでは仙遊の乗り物となっている。

第一三・第一四句は銘文四〇六に「周復始兮傳子孫」とあった。

●四二〇 漢鏡四期

福熹進兮日以前。

福喜進みて、日び以て前め^すん。

食玉英兮飲澧泉。

玉英を食らひ、澧泉を飲む。

駕交龍兮乘浮雲。

交龍に駕して、浮雲に乗る。

白虎引兮上泰山。

白虎引きて、泰山に上る。

鳳皇集兮見神仙。

鳳凰集まり、神仙を見る。

保長命兮壽万年。

長命を保ち、壽は萬年ならん。

周復始兮八子十二孫。

周りて復た始まり、八子十二孫あり。

(注)

河南省洛陽市西郊七〇五二號墓の方格規矩四神鏡(中國科學院考古研究所洛陽發掘隊・一九六三・圖二二)にみる。起句の前に「…」記號がある。末句をのぞいて三言二句を「兮」で連綴して七言句とし、「前」・「泉」・「山」・「仙」は元部、「雲」・「孫」は文部、「年」は眞部で叶韻する。報告は、第一句の「前」を「萌」、第三句の「交龍」を「文龍」、第五句の「集」を「舞」とし、第四句の「引」は未讀であるが、銘文四〇六などにみる類似句によつて改めた。

第一・第二句は銘文四〇六に既出。

第三句は銘文四一九の「駕蜚龍、乘浮雲。」を改めたもの。「交龍」は、「蛟龍」・「蜚龍」に同じ。「周禮」司常に「日月爲常、交龍爲旂。」とあり、『漢書』鄒陽傳には「臣聞交龍襄首奮翼、則浮雲出流、霧雨咸集。」という。K・八の浮彫式獸帶鏡には「上有辟邪・

交龍、道里通」という銘文があり、永壽三年(二五七)の安國祠堂題記(永田・一九九四・七六)には「調文刻畫、交龍委蛇、猛虎延視。」という用例がある。

第四句にかんして、『楚辭』惜誓に「飛朱鳥使先驅兮、駕太一之象輿。蒼龍蚺虵於左驂兮、白虎騁而爲右駢。」とあり、王逸注に「言」徳合神明、則駕蒼龍、驂白虎、其狀蚺虵有威容也。」という。虎は龍とともに車を引くと考えられていた。陝西省靖邊縣の後漢墓(陝西省考古研究院ほか・二〇〇九)では、東壁下層に二頭の白虎が仙人の乗る雲車を引いている圖像が描かれていた。「泰山」は山東にある五嶽のひとつ。「大山」や「太山」とも表記する。

第五句の「鳳凰集」は吉祥をあらわし、『論衡』奇怪に「光武皇帝産於濟陽宮、鳳凰集於地、嘉禾生於屋。」などの例がある。「見」は「現」。「万」は「萬」の古字。銘文四一七の注を参照。

第七句は銘文四〇六の「周復始兮傳子孫。」を改めたもの。「八子十二孫」は銘文四一一にあり、銘文四一七には「十子九孫」、銘文四一八には「八子九孫」とある。

三槐堂・六九の方格規矩四神鏡は、本銘各句の「兮」を省略し、「福熹進」を「福祿祚」、「駕交龍」を「駕青龍」、「上泰山」を「上華山」、「鳳皇集」を「鳳皇候」、「見神仙」を「見神鮮」とする。「華山」は陝西にある五嶽のひとつ。樂府古辭の「長歌行」に「仙人騎白鹿。髮短耳何長。導我上太華。攬芝獲赤幢。」とあり、泰山と華山とは神聖な名山としてしばしば並稱される。

小校一五・九二の鏡銘も、本銘各句の「兮」を省略して整った三言句にしたものだが、「上華山鳳皇集。見神鮮保長久。壽萬年周復始。保子孫祿福永。日以正食玉央。飲澧泉駕青龍。乘浮雲白虎引。」と釋讀されている。羅振玉「集錄」を底本としたK・九七も、これ

とほぼ同じ釋文を載せ、「集」・「久」・「始」が押韻するものの、初句の韻は變則的でまちがっているという。しかし、それは「上大山」を起句とする銘文四二二に惑わされた、句讀の誤りである。

●四二一 漢鏡四期

福祿進兮日以前。 福祿進みて、日び以て前めん。

天道得物自然。 天道を得て、物自然たり。

參駕蜚龍乘浮雲。 蜚龍に參駕して、浮雲に乗る。

白虎失上大山。 白虎引きて、大山に上る。

鳳皇下見神人。 鳳凰下りて、神人を見る。

(注)

河南省洛陽市燒溝二一號墓の方格規矩四神鏡（中國科學院考古研究所・一九五九・圖七三）にみる。起句の前に小さい「〇」記號がある。三言二句を基本とするが、第一句と第三句は七字句となる。

「前」・「然」・「山」は元部、「雲」は文部、「人」は眞部で叶韻する。

第一句の「福祿」は、幸福と秩祿。『詩經』小雅・鴛鴦に「君子萬年、福祿宜之。」とあり、鄭箋に「交於萬物、其德如是、則宜壽考、受福祿也。」という。

第二句を陳直（一九六三）は「得天湯々（蕩蕩）物自然」と釋すが、報告の釋文が妥當である。「天道」は、自然の法則。『淮南子』兵略訓に「上得天道、下得地利、中得人心、乃行之以機、發之以勢、是以無破軍敗兵。」とあり、『韓詩外傳』卷五に「百禮洽則百意遂、百意遂則陰陽調、陰陽調則寒暑均、寒暑均則三光清、三光清則風雨時、風雨時則羣生寧、如是、而天道得矣。」とある。「物自然」は、すべてのものが本來のままの状態であること。『論衡』自然に「春觀萬物之生、秋觀其成、天地爲之乎。物自然也。」という。

第四句の「失」は「引」。藤堂明保（一九七五・七五五頁）は「失」と「引」は同じ「のびる」意の單語家族で、「引」は「佚」・「失」の對轉にあたるという。

第五句の「皇」を報告は「鳥」と釋すが、字形からみて「鳳皇下」と讀むべきである。

羅振玉「集錄」を底本としたK・九二は「上大山、見神人。食玉英。飲漚泉。得天道。物自然。駕交龍。乘浮雲。宜官秩兮。保子孫兮。」と句讀し、「あらゆる存在と生きとし生けるものが、純朴で自然のままあり、強いられることなくやすらいでいて、實存の墮落形態としての社會を特徴づける競争や活動や權力欲がない」という道家思想の反映とみている。

●四二二 漢鏡四期

上大山見神人。 大山に上りて、神人を見る。

食玉英飲漚泉。 玉英を食らひ、醴泉を飲む。

駕交龍乘浮雲。 交龍に駕して、浮雲に乗る。

白虎引兮直上天。 白虎は引きて、直に天に上る。

受長命壽萬年。 長命を受け、壽は萬年ならん。

宜官秩保子孫。 官秩に宜しく、子孫を保たん。

(注)

林分類I。ただし、例示された銘文は、この第五句を省略する。本鏡銘は泉屋・鏡二一の方格規矩四神鏡にみる。起句の前に「…」記號がある。「上大山」を起句とするところが銘文四二〇・四二二と異なる。「人」・「天」・「年」は眞部、「泉」は元部、「雲」・「孫」は文部で叶韻する。K・九四はすべて押韻するという。

第四句の「白虎引」につづいて銘文四二〇・四二二では「上大山」

山」とするが、本銘では第一句に「上大山」とあるので、重複を避けてここでは「直上天」と改めている。

●四二三 漢鏡四期

上大山見神人。

大山に上りて、神人を見る。

食玉英飲醴泉。

玉英を食らひ、醴泉を飲む。

駕交龍乘浮雲。

交龍に駕して、浮雲に乗る。

宜官秩保子孫。

官秩に宜し、子孫を保たん。

壽万年。

壽は萬年ならん。

貴富昌。

貴富にして昌えん。

樂未央。

樂しみ未だ央きず。

(注)

小校一五・八八の方格規矩四神鏡にみる。銘文四二二のバリエーションのひとつで、小校一五・九〇は本鏡銘の第四句までをいれた基本形であり、本鏡銘はそれに三言句を三句加えたもの。「人」・「年」は眞部、「泉」は元部、「雲」・「孫」は文部で叶韻し、第六句で換韻し、「昌」・「央」は陽部で押韻する。カールグレン(K・九三)は、眞部の「人」、元部の「泉」、文部の「雲」・「孫」は陽部の「昌」・「央」と押韻するという。

陝西省鳳翔縣徵集の方格規矩四神鏡〔昭明・一九九五〕は、第五句からつぎのように改める。

貴富昌。

貴富にして昌えん。

樂未央。

樂しみ未だ央きず。

宜牛羊。

牛羊に宜し。

「羊」は陽部で押韻する。「宜牛羊」は前漢鏡の銘文ではめずらしいが、同時期の銘文四一三に例がある。

このように「上大山見神人」の句をもつ銘文は、句の順番を變えたり、いくつかの語句を置き換えることによって、バリエーションを生みだしている。河北省邯鄲市徵集の方格規矩四神鏡(河北・五二)は、起句を示す「…」記號につづいて「駕蜚龍乘浮雲」の句があり、その後ろから第一句がはじまる。小校一五・九三の方格規矩四神鏡は、本銘文の第一句、第四句、第二句、第三句の順で、各句間に「○」記號をいれる。また、河北・五一鏡の第三句や小檀二・三四(K・九六)の第二句は、

食玉英餌黃金。玉英を食らひ、黃金を餌す。

と改める。『淮南子』墜形訓には「清水有黃金、龍淵有玉英。」とあり、清水や龍淵には黃金や玉英があると考えられていた。黃金は、純金。『史記』平準書に「金有三等、黃金爲上、白金爲中、赤金爲下。」とあり、裴駰『集解』に『漢書音義』を引いて「白金、銀也。赤金、丹陽銅也。」という。

K・九三(富岡・圖版六)は「大山」を「華山」、「神人」を「仙人」、「交龍」または「蜚龍」を「青龍」とする。

●四二四 漢鏡四期

上泰山見侯王。

泰山に上りて、侯王を見る。

左龍右虎辟不羊。

左龍と右虎は不祥を辟く。

昭爵玄武利陰陽。

朱雀と玄武は陰陽に利し。

八子九孫治中央。

八子九孫は中央を治む。

千秋萬歲、

千秋萬歲も、

長樂未央。

長く樂しみ未だ央きず。

(注)

尊古齋・五五の方格規矩四神鏡の内圈銘である。外區には銘文四

二〇をいれる。起句の前に「…」記號があり、六言、七言、四言句からなる雜言體である。第五句をのぞいて陽部で毎句押韻する。
第一句の「泰山」は「大山」や「太山」に同じ。「神人」のかわりに「侯王」となるのは、めずらしい。第三句は銘文四一七に既出。

●四二五 漢鏡四期

上此大山見神人。
久宜官秩葆子孫。
君食玉央飲禮泉。
參駕蜚龍乘浮雲。

此の大山に上りて、神人を見る。
久へに官秩に宜しく、子孫を保たん。
君 玉英を食らひ、禮泉を飲む。
蜚龍に參駕し、浮雲に乗る。

(注)

三槐堂・拓一二の方格規矩四神鏡にみる。外區に懸針體の銘文をいれる。銘文四二三のバリエーションのひとつだが、三言二句の基本形を七言句に變え、句の順序を變えている。眞部の「人」、文部の「孫」・「雲」、元部の「泉」が叶韻する。

●四二六 漢鏡四期

鳳皇翼翼在鏡則。
多賀君家受大福。
幸逢時年獲嘉德。
官位尊顯蒙祿食。
長保二親得天力。
傳之後世樂無極。

鳳凰翼翼として、鏡の側に在り。
多く君家を賀し、大いなる福を受く。
幸ひこの年に逢ひ、嘉德を獲る。
官位尊顯し、祿食を蒙る。
長く二親を保ち、天祿を得。
之を後世に傳へ、樂しみ極まり無し。

(注)

簠齋・下七の方格規矩四神鏡にみる。釋文はおおむね容續・六六

にしたがった。起句の前に「…」記號があり、整った七言句である。容庚は第三句の韻字を讀んでいないが、つぎの銘文四二七から「德」字と判斷される。したがって、「則」「福」「德」「食」・「力」・「極」がすべて職部で押韻する。

第一句の「翼翼」は、『漢書』禮樂志に「馮馮翼翼、承天之則。」とあり、顏師古注に「翼翼、眾貌也。」という。また、『後漢書』張衡傳の「思玄賦」には「紛翼翼以徐戾兮、焱回回其揚靈。」とあり、李賢注には「翼翼、飛貌。」という。「則」は「側」の省字(K・一一五)。

第二句の「多」は、厚く。『漢書』趙廣漢傳に「亭長戲曰、至府、爲我多謝問趙君。」とあり、師古注に「多、厚也。」という。「君家」は、鏡の所有者の家を指す。「古詩爲焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一所收)に「非爲織作遲、君家婦難爲。」という例がある。

第三句の「時」は「是」の假借。『尚書』無逸に「自時厥後立王、生則逸。」とあり、孔傳に「從是三王、各承其後而立者、生則逸豫無度。」という。あるいは、後漢代の畫像鏡に「蔡氏作竟自有意、良時日」(古鏡・中一六)とある「時日」は良時吉日の意であり、「時年」もそれと同じように良い年の意味か。「嘉德」は、立派な德。『左傳』桓公六年に「奉酒醴以告曰、嘉栗旨酒、謂其上下皆有嘉德而無違心也。」とある。

第五句の「天力」は「天祿」。天から授かった幸福のこと。『尚書』大禹謨に「四海困窮、天祿永終。」とあり、疏に「天之祿籍、長終汝身矣。」という。

●四二七 漢鏡四期

作佳鏡哉子孫息。
佳き鏡を作れるかな、子孫息ふ。

鳳皇翼翼在坐則。

鳳凰翼翼として、座側に在り。

官位尊顯蒙祿食。

官位尊顯し、祿食を蒙らん。

幸逢時年獲嘉德。

幸ひこの年に逢ひ、嘉德を獲ん。

多賀君家受大福。

多く君家を賀し、大いなる福を受けん。

長保二親得天力。

長く二親を保ち、天祿を得。

傳之後世樂無極。

之後世に傳へ、楽しみ極まり無し。

(注)

河南省襄城縣湛北郷出土の方格規矩四神鏡(姚軍英・一九九二)にみる。起句の前に「…」記號がある。銘文四二六に第一句を加えて七句とし、句の順番を變えている。「息」・「則」・「食」・「德」・「福」・「力」がすべて職部で押韻する。

銘文四二六では「鳳皇翼翼在鏡則」となっていたのを、ここでは「在坐則」と改める。第一・第二句をのぞけば、銘文四二六の句の順番を變えただけである。

●四二八 漢鏡四期

新銀治竟子孫息。

新たな銀もて鏡を治むるに、子孫息ふ。

多賀君家受大福。

多く君家を賀し、大いなる福を受けん。

位至公卿修祿食。

位 公卿に至り、祿食を修めん。

幸得時年獲嘉德。

幸ひこの年を得て、嘉德を獲ん。

傳之後世樂無極。

之後世に傳へ、楽しみ極まり無し。

大吉。

大いに吉ならん。

(注)

金索六の「新銀竟」や小校一六・六六の方格規矩四神鏡などにみる。職部で押韻する銘文四二六・四二七のバリエーションのひとつで、第一句をかえたもの。その末字は「具」と釋されてきたが、字

形は「息」で、銘文四二七では「子孫息」となっている。しかも、

「具」は侯部だが、「息」・「福」・「食」・「德」・「極」はすべて職部であるから、押韻の點でも「息」と釋すべきであろう。

第一句の「新」は、新しい。「銀」は、銀色に輝く青銅をいうのであろう。笠野毅(一九八三・二五二頁)は「銀」を白くかがやく金屬にする動詞として「新たに鏡を銀治す」と讀む。羅振玉「鏡錄」は「治」に「又一品作茲」と注するが、その鏡は不詳。

第三・第四句は銘文四二七の「蒙祿食」を「修祿食」に、「幸逢時年」を「幸得時年」に改める。

●四二九 漢鏡四期

泰言之始自有紀。

七言の始は自ら紀有り。

凍治錫銅去其辛。

錫・銅を鍊治して其の滓を去れり。

辟除不祥宜古市。

不祥を辟除して買市に宜し。

長葆二親利孫子。

長く二親を保ち孫子に利し。

(注)

林分類Oa。簠齋・下六や小校一五・六四の方格規矩四神鏡にみる。釋文はK・二四六による。整った七言句で、「紀」・「辛」・「市」・「子」は之部で毎句押韻する。

第一句の「泰」については、「朱」・「泰」・「來」などさまざまな釋字がなされてきたが、出土簡牘の用例からみて、それは「七」の假借で、「四」を「三」と表記するのと同じように王莽代にみられる表記である(岡村・一九九二)。「說文」六下の「泰」に段玉裁は「漢人多假泰爲七字。史記六律五聲八音來始。來始正泰始之誤。尚書大傳・漢律曆志皆作七始。史・漢同用今文尙書也。」と注している。この「七言」について笠野毅(一九八〇)は、『五行大義』論納

音數に引く『樂緯』に「孔子曰、丘吹律定姓、一言得土曰宮、三言得火曰徵、五言得水曰羽、七言得金曰商、九言得木曰角。」とあることから、「七言」は五行の「金」にあたるとし、「七言之始自有紀」とは金屬の始原には自然に法則が備わっているという意味とした。補足するなら、『抱朴子』内篇・仙藥にも「按玉策記及開明經、皆以五音六屬、知人年命之所在。…五言得之者、羽與水也。七言得之者、商與金也。」とある。なお、「七言」の「言」は「音」。

『墨子』非樂上の「黃言孔章」に于省吾『雙劍謄諸子新證』墨子二は「音・言字通、其實古本同字。」という。これにかんして、『重修宣和博古圖』卷二八・二八につぎのような銘文をもつ方格規矩四神鏡が收録されている。

調刻治鏡日月清。

明□五得商羽聲。

天地和合子孫成。

常保夫婦樂長生。

書き起こし圖のため、鏡の眞贋および釋文の是非は論じえないとしても、第二句の「商羽聲」とは、この鏡によつて五音の「商」と「羽」の聲が得られるという意味である。「商」は金、「羽」は水であるから、これは鏡の陰陽を隱喻し、それゆえに「天地和合」と「常保夫婦」が叶えられるのであろう。晉・干寶『搜神記』卷一三に「夫金之性一也。以五月丙午日中、鑄爲陽燧。以十一月壬子夜半、鑄爲陰燧。」とあり、その自注に「言、丙午日鑄爲陽燧、可取火、壬子夜鑄爲陰燧、可取水也。」というのと同じ。後漢代の神獸鏡に「幽渌三商」とあるのも、この觀念の別表現である。

第二句は錫と銅の鑄石を製鍊して不純物を取り除くことをいう。銘文四〇一の「凍治銅華清而明」や銘文四〇二の「凍治銅華得其

清」とちがいで、ここでは銅に錫が加えられている。漢鏡の科學分析では銅・錫・鉛が鏡の主要な原料であるが、鏡銘においてはふつう銅・錫・銀の三種があげられる（笠野毅・一九八三）。

第三・第四句は、このようにして得られた鏡の效能を列擧する。「古市」は「賈市」で、あきない。銘文三二一の注を参照。

●四三〇 漢鏡四期

秦言之紀造竟始。

七言之紀は造鏡の始なり。

長保二親利孫子。

長く二親を保ち、孫子に利_まし。

辟去不羊宜賈市。

不祥を辟去し、賈市に宜し。

壽如金石西王母。

壽は金石・西王母の如し。

從今以往樂乃始。

今從り以往、樂しみ乃ち始まらん。

（注）

林分類0b3。河南省洛陽市西郊三〇一四號墓（中國科學院考古研究所洛陽發掘隊・一九六三・圖二二）や巖窟二・中・三一の方格規矩四神鏡などにみる。整った七言句で、「始」・「子」・「市」・「母」・「始」は之部で毎句押韻する。

第一句の「造」は「從」と讀まれることが多かったが、その字形からみて奇觚一五・二六や容續・六四の釋が妥當であらう。「始」は、根本。『國語』晉語二の「堅樹在始」の韋昭注に「始、根本也。」とある。すなわち、この句は七言という金屬の規範こそ作鏡の基本であるといひ、「秦言之始自有紀」と同義である。

第二・第三句は銘文四二九と同じ。巖窟や洛陽西郊の報告が「利孫子」を「和孫子」としたのは誤釋。

第四句の「西王母」は、崑崙山にいる神仙。『漢書』五行志上に「哀帝建平四年（前三）：其夏、京師郡國民聚會里巷仵伯、設祭張

博具、歌舞祠西王母。又傳書曰、母告百姓、佩此書者不死、不信我言、視門樞下、當有白髮。」とあり、前漢末期に不老不死の神仙として民衆のあいだに爆発的な信仰を集めた。

第五句を洛陽市西郊三〇一四號墓の例は「從金以往」とする。

「金」は「今」の假借。漢鼓吹鏡歌「有所思」(『宋書』樂志)に「從今以往、勿復相思。」という用例がある。

小校一五・六五やK・二四二は、第三句までの短銘である。

●四三一 漢鏡四期

泰言之紀造鏡始。

凍銅錫去其辛。

以之爲鏡宜孫子。

長葆二親樂母事。

壽幣金石西王母。

棠安作。

七言の紀は造鏡の始なり。

銅・錫を鍊りて、其の滓を去れり。

之を以て鏡を爲るに、孫子に宜し。

長く二親を保ち、樂しみて母事し。

壽は金石・西王母と敝せん。

棠安にて作れり。

(注)

林分類0b2。ただし、本銘の第三句までとする。鹽齋・下六(陳介祺・九〇)の方格規矩四神鏡にみる。起句の前に「…」記號がある。釋文はおおむねK・二四五にしたがった。「始」・「辛」・「子」・「事」・「母」は之部で押韻する。

第一句は銘文四三〇と同じ。

第二句は銘文四二九とほぼ同じだが、「治」字を脱し、錫・銅の順を入れかえる。

第三句の「以之爲鏡」は銘文四〇一・四〇二に例がある。

第四句の「葆」は「保」の繁字。句末の字を陳介祺・九〇は「央」と釋すが、それでは韻をふみはずしている。その字形は「以

のようであり、その假借である「已」か、それとも銘文四一四に「長保二親樂母事」とみえるから、「事」であろう。

第五句の「幣」は「敝」で、斃れる、盡きる意。銘文四一三に「敝日月光兮」とあり、その注を參照。銘文四三〇に「壽如金石西王母」とあり、陳介祺・九〇などは「敝」は「比」の假借とするが、王力の古音說によれば、月部の「敝」は脂部の「比」と韻母が異なる。ちなみにカールグレン(K・二四五)は「敝」を *oustrip* 凌駕する、と解釋する。

第六句の「棠安」は、人名ではなく、「棠」は同じ「尙」を音符とする「常」の假借で、「常安」は『漢書』王莽傳中に「長安曰常安。」とあり、始建國元年(後九)に王莽が改名した都「長安」であろう。同時期の北朝鮮ピョンヤン市石巖里二〇〇號墓の方格規矩四神鏡(梅原・一九二五)には「尙方御竟大母傷。名師作之出雒陽。」とあり、大都市での作鏡をものがたる貴重な資料である。

本銘に類似する例として、小校一五・六五の「泰言之紀造鏡始。凍治同華去惡辛。長葆二親利孫子。」がある。

●四三二 漢鏡四期

泰言之紀造鏡始。

倉龍居左虎在右。

辟去不羊宜古市。

長保二親利孫子。

壽敝金石西王母。

七言の紀は造鏡の始なり。

蒼龍は左に居り、虎は右に在り。

不祥を辟去し、賈市に宜し。

長く二親を保ち、孫子に利し。

壽は金石・西王母と敝せん。

(注)

林分類0b1。安徽省壽州市東津柏家臺一號墓(壽縣博物館ほか・一九九二)や三槐堂・八六の方格規矩四神鏡にみる。「始」・「右」・

「市」・「子」・「母」が之部で毎句押韻する。

銘文四三〇の末句にかえて「蒼龍居左虎在右」をいれ、句の順をかえたもの。「泰言之紀造鏡始」ではじまる銘文は、本銘のような第二句になる例が多いが、K・二四三の「青龍在左白虎右」、小校一五・六六の「青龍居左白虎在右」など、若干の異同がある。また、本銘のように五句のものは少なく、多くは三句までの短銘である。「倉」は「蒼」の省字。『史記』天官書に「東宮蒼龍、房・心。」とあり、「青龍」は「蒼龍」とも表記した。

河南省南陽市牛王廟村一號墓の方格規矩四神鏡〔南陽市文物考古研究所・二〇〇五〕は、中圈の銘文に「泰言之紀造鏡、蒼右左白虎甫（博）局、君宜官、長寶（保）二親大子（孫）子、竟。」とある。脱字が少なくないが、「蒼龍白虎」の句に「博局」とみえるのはめずらしい。「博局」は雙六の臺。『史記』吳王濞傳に「皇太子引博局提吳太子、殺之。」とある。方格規矩四神鏡にみるTLV形の規矩紋は、宇宙を象ったものであり、博局にもあらわされた。詳しくは銘文四四〇の注を参照。

●四三三 漢鏡四期

泰言紀。

七言の紀なり。

富如江河入四海。

富は江河の如く、四海に入る。

壽如王喬赤松子。

壽は王喬・赤松子の如し。

好□□□□□□□。

好□□□□□□□。

（注）

嚴窟二中・三〇の方格規矩四神鏡にみる。鏤のため、第四句は一字をのぞいて釋せないが、「紀」・「海」・「子」は之部で押韻する。嚴窟は「泰言紀富始」と句讀するが、漢鏡銘で五字句はまれで、

「泰言」ではじまる銘文四二九以下は七字句を基本とすること、第一句は銘文四二九以下の「之」字を脱落させて「泰言紀」となること、第二句と第三句とは對をなす七字句の構文であることから、このように句讀した。それは押韻の點でも問題はない。

第二句の「江河」は、大きな河川。「四」の表記は「三」ではない。「江河」と「四海」と對になる用例として、『楚辭』惜誓に「觀江河之紆曲兮、離四海之霑濡。」とあり、陝西省略陽縣の「析里橋郿閣頌摩崖」〔永田・一九九四・一〇五〕に「禹導江河、以靖四海。」などがある。

第三句の「王喬・赤松子」は、仙人の王子喬と赤松子。『淮南子』泰族訓に「王喬・赤松去塵埃之間、飲陰陽之和、食天地之精。」とある。詳しくは櫻井龍彦（一九八四・八五）を参照。

●四三四 漢鏡四期

今名之紀七言止。

金名の紀は七言の始なり。

凍冶銅華去惡宰。

銅華を鍊冶し、惡滓を去れり。

鑄成錯刀天下喜。

錯刀を鑄成し、天下喜ぶ。

安漢保眞世母有。

漢を安んじ眞を保つこと世に有る母し。

長樂日進宜孫子。

長き樂しみ日び進み、孫子に宜し。

（注）

江蘇省揚州市出土の方格規矩四神鏡〔王勣金ほか・一九八五〕にみる。釋文は三槐堂・拓九による。「止」・「宰」・「喜」・「有」・「子」は之部で毎句押韻する。

第一句の「今」は「金」の假借。同時期の例として銘文四三〇の注を参照。三槐堂は「今名」と釋すが、それでは意味が通じない。本銘では「泰」ではなく「七」につくる。この句は銘文四二九の

「泰言之始自有紀」と同義で、「止」は「始」の假借であろう。あるいは「金名の紀は七言もて止まる」と讀むのかもしれない。

第三句の「鑄成錯刀」は、居攝二年（後七）五月に王莽が貨幣改革を實施し、「契刀」や金象嵌の「錯刀」などを鑄造したことをいう（『漢書』王莽傳上）。『漢書』食貨志下には「錯刀、以黃金錯其文、曰一刀直五千。」とあり、その實物も出土している。本鏡は居攝二年からさほど下らない時期の作品であろう。

第四句は、平帝の元始元年（後一）に「安漢公」の稱號を賜わった王莽（『漢書』平帝紀）を讀えたもの。「保眞」は居攝元年（後六）鏡に「自有眞」と自讀するのと通じる。「世母有」は後漢鏡の「世少有」と同義。

●四三五 漢鏡四期

作佳鏡、

清且明。

葆子孫、

樂未央。

車當傳駕騎趣莊。

出亭三馬自有行。

男爲侯、

女嫁王。

刻婁博局去不羊。

服此鏡、

爲上卿。

佳き鏡を作るに、

清にして且つ明なり。

子孫を保ち、

樂しみ未だ央ぎず。

車は當に傳へ駕し、騎は莊に趣き、

亭の四馬を出だし、自づから行有るべし。

男は侯と爲り、

女は王に嫁せん。

博局を刻鏤し、不祥を去らん。

此の鏡を服さば、

上卿と爲らん。

（注）

三槐堂・七四の方格規矩四神鏡にみる。起句の前に「・」記號が

ある。三言句と七言句とからなる雜言體で、「明」・「央」・「莊」・「行」・「王」・「羊」・「卿」は陽部で押韻する。

第一句は、銘文四二七に「作佳鏡哉」という用例がある。

第三句の「葆」は「保」の繁字。

第五句は車騎を乗り繼いで都から地方に命令を伝えることをいう。『御覽』刑法部・赦に引く『漢舊儀』に「分遣丞相・御史乘傳駕行郡國、解囚徒、布詔書。」とある。「莊」は鄉村の莊園。

第六句を三槐堂は「出園三馬」と釋すが、第二字の字畫は「上」につくり、「亭」もしくは「豪」であろう。「三」は「四」。銘文四〇八の注を參照。「四馬」は四頭だての馬車。前句の命令を受けた人が四頭だての馬車で都に出仕することをいい、第五句の「當」は第六句までかかるのである。漢王朝を篡奪した王莽は、郷里に退休した賢人を辟召しようとし、たとえば『漢書』龔勝傳には「莽既篡國、遣五威將帥行天下風俗、將帥親奉羊酒存問勝。……後二年、莽復遣使者奉璽書、太子師友祭酒印綬、安車駟馬迎勝、卽拜、秩上卿。」という。

第七句は鏡の腐蝕のため三槐堂は「男□□侯」と二字分を不明字とするが、「爲」の一字だけであつたのかもしれない。男なら列侯に、女なら諸侯王の夫人に榮達することをいう。

第九句の「婁」は「鏤」の省字。「刻鏤」は、彫刻すること。『禮記』少儀に「食器不刻鏤。」とある。「博局」は雙六で、ここでは宇宙を象徵するT L V字形を鏡にあらわしたことをいう。西田守夫（一九八六）は、この句をもつ「新有善銅出丹陽」銘の方格規矩四神鏡を紹介し、T L V字形は博局紋と呼ぶべきことを主張した。正論であるが、本稿では慣例にしたがつて方格規矩四神鏡と呼んでおく。なお、銘文四四〇の注を參照。

第一句の「郷」は「卿」と同形の字。『漢書』百官公卿表上によれば、「上卿」は御史大夫や前後左右將軍などの位で、『漢書』趙充國傳には「臣位至上卿、爵爲列侯」とある。また、『漢書』王莽傳中には始建國元年（後九）に「更名光祿勳曰司中、太僕曰太御、衛尉曰太衛、執金吾曰奮武、中尉曰軍正、又置大贅官、主乘輿服御物、後又典兵、秩位皆上卿、號曰六監。…更名秩百石曰庶士、三百石曰下士、四百石曰中士、五百石曰命士、六百石曰元士、千石曰下大夫、比二千石曰中大夫、二千石曰上大夫、中二千石曰卿。車服黻冕、各有差品。」と官制を改めたことが記されている。さきの『漢書』龔勝傳にも王莽が龔勝を「秩上卿」に拜したことをいう。これは第五句から第八句の内容を別の表現にしたもの。

●四三六 漢鏡四期

賢者戒己下爲右。 賢者は己れを戒め、下りて佑と爲る。
 思念毋以象君子。 思念 已むこと母く、君子に象ふ。
 二親有疾身常在。 二親に疾有りといへども、身は常在す。
 時時中兮景女右。 時時忠にして、景は汝の佑なり。

（注）

鄂州市博物館蔵の方格規矩四神鏡（鄂州市博物館・二〇〇二・圖二七四）にみる。三槐堂・七八の獸帶鏡は、第四句の「時時」まで同じ銘文をもつ。整った七言句で、起句の前に「…」記號があり、「右」・「子」・「在」・「右」が之部で毎句押韻する。

第一句の第五字を鄂州市博物館は「仁」とし、三槐堂は「乍」とするが、字形は「下」字であろう。「賢者戒己」について、三槐堂は『春秋穀梁傳』文公六年の陽處父のことばに「古者君之使臣也、使仁者佐賢者、不使賢者佐仁者。」とあり、范寧『集解』に「邵

曰、賢者多才也、戰主于攻伐、仁者有惻隱之恩、不如多才者有權略。」というのを引く。しかし、ここでの「賢者」は使臣にかぎらない。末字の「右」を鄂州市博物館は「佑」とする。たすけ、の意である。

第二句の上四字を鄂州市博物館は「思念毋以」とし、三槐堂は「怠忘（荒）毋以」と釋す。第一字は「息」で「思」の假借である。『詩經』周南・漢廣の「南有喬木、不可休息。漢有游女、不可求思。」の「休息」に『釋文』は「本或作休息」と校し、朱駿聲『說文通訓定聲』も「息、假借爲思。」という。「以」と「已」はもと同じ。

第三句の第四字を鄂州市博物館は「疾（男）」とし、三槐堂は「疾」と釋した。この字は「尸」と「夫」にしたがう「疾」である。元初四年（二一七）の「祀三公山碑」（永田・一九九四・四二）の「民無疾苦」とある「疾」字が、その例である。

第四句の「時」を三槐堂は「侍」の假借とするが、下に重文符號があり、常づねの意味。「古詩爲焦仲卿妻作」（『玉臺新詠』卷一所收）に「時時爲安慰。久久莫相忘。」とある。鄂州市博物館は第三字を「山」、第五字を「得」と釋すが、それぞれ「中」と「景」であろう。「中」は「忠」の假借もしくは省字。「景」は、日の光。あるいは鏡の意味か。劉熙『釋名』釋首飾に「鏡、景也。言有光景也。」とあり、鏡は「景」とみなされたからである。「女」は「汝」の省字または假借。

●四三七 漢鏡四期

大哉孔子志也。 大いなるかな、孔子の志や。
 美哉宣易負也。 美しきかな、婦を宣揚せるや。

樂哉居母事也。

好哉渙人異也。

急哉下雨汜也。

□□哉□□也。

豪哉毛遂使也。

苴哉禹母字也。

樂しきかな、事母きに居るや。

好きかな、渙人を異にするや。

急なるかな、雨下りて汜となるや。

□□なるかな、□□や。

豪なるかな、毛遂の使ひせるや。

以あるかな、禹母の孳むや。

(注)

河南省洛陽市道北石油化工廠家屬院で發掘された方格規矩四神鏡にみる「刁淑琴・一九九九／刁淑琴はか・二〇〇二」。「論語」泰伯の「子曰、大哉、堯之爲君也。」になぞらえ、六字からなる各句はすべて「：哉：也」という構文となる。韻字の「志」・「負」・「事」・「汜」・「使」・「字」は之部、「異」は職部で叶韻する。起句をあらわす記號はなく、刁淑琴の一九九九報告ではこの第六句を起句とするが、二〇〇二報告では「大哉」ではじまる句を起句とする。拓本が不鮮明なため、釋文はおおむね二〇〇二報告にしたがった。

第一句は「論語」泰伯の「大哉、堯之爲君也。」を孔子に置き換えたもの。

第二句の「美哉」には、『左傳』襄公二十九年に吳の公子札が武をたたえる舞をみて「美哉、周之盛也。」と感嘆した例がある。第四字の「易」を二〇〇二報告では「揚」の省字とする。つぎの文字を一九九九報告では「負」とし、二〇〇二報告では「眉」とした。

「負」は「婦」に通じ、老婦人の意味。『漢書』高帝紀上に「常從王嫗・武負貫酒」とあり、その注に「如淳曰、武、姓也。俗謂老大母爲阿負。師古曰、劉向列女傳云、魏曲沃負者、魏大夫如耳之母也。此則古語謂老母爲負耳。王嫗、王家之嫗也。武負、武家之母也。」という。「眉」は眉毛が伸びた老人。『詩經』邶風・七月に「爲此春

酒、以介眉壽」とあり、毛傳に「眉壽、豪眉也。」という。どちらも老人を意味するが、これが韻字であることからみると、脂部の「眉」より之部の「負」のほうが妥當であろう。

第三句に近い語句に漢鏡二期以降の「樂母事」がある。同時期の例として銘文四三二に「長葆二親樂母事」とみえる。

第四句を一九九九報告では「好哉渙人異也」とし、二〇〇二報告では「好哉渙(界)人異也」と釋した。ここではその兩釋を斟酌した。「渙」は、よごれる意で、「渙人異」は奸臣を遠ざけることをいう。『楚辭』九歎・惜賢に「切渙渙之流俗」とあり、王逸注に「渙、垢濁也。言己如得進用、則治讒諛之人、正其邪僞、槩貪濁之俗、使之清淨也。」とある。「佞人」の例だが、『論衡』答佞に「佞人異行於世、世不能見、庸庸之主、無高材之人也。」という。二〇〇二報告のように賜う意味の「界」と釋するのであれば、「人に異らしきを界ふや」と訓讀できよう。

第五句の「下雨」は『孟子』梁惠王上に「天油然作雲、沛然下雨。」とある。「汜」は、崖。『楚辭』天問に「出自湯谷、次于蒙汜。」とあり、王逸注に「汜、水涯也。言日出東方湯谷之中、暮入西極蒙水之涯也。」という。しかし、ほかの句が人事をたたえるのたいして、この句だけが自然現象をいうのは疑問が残る。

第六句は銹のため釋讀できない。ただし、第二字は「哉」ではなく、第五字は「思」字のようにみえる。

第七句の第一字を二〇〇二報告では「憂」とされたが、字形と毛遂の故事からみて「豪」であろう。毛遂は戰國趙の平原君の食客で、秦が邯鄲を包圍したとき、平原君にしたがって楚に救援を求め、辯舌巧みに楚王を説きふせて合従の盟約を結ぶことに成功した(『史記』平原君・虞卿列傳)。

第八句の「苒」は「以」の繁字で、理由の意。『詩經』邶風・旌丘に「何其久也、必有以也。」とある。「字」は「孳」の假借。禹母が禹を身ごもった故事として、『史記』五帝本紀の注に「索隱『禮緯』曰、禹母脩己、吞薏苒而生禹、因姓姒氏。」とあり、『世本』帝繫には「禹母修己。吞神珠如薏苒。拆生禹。」という。

●四三八 漢鏡四期

漢有善銅出丹陽。 漢に善き銅有り、丹陽に出づ。

取之爲鏡清且明。 之を取りて鏡を爲るに、清にして且つ明なり。

なり。

左龍右虎備三旁。

左龍と右虎は四旁を備ふ。

朱爵玄武順陰陽。

朱爵と玄武は陰陽を順ふ。

八子。

八子。

(注)

浙江省紹興縣出土の方格規矩四神鏡（浙江・八）にみる。林分類のMa la。最後の句は二字で終わっているが、本來は七字句の「八子九孫治中央」に復元できる。「陽」・「明」・「旁」・「陽」・「央」は陽部で毎句押韻する。

第一句の「漢」は漢王朝。王莽の「新有善銅」鏡より古い特徴をもつため、前漢に位置づけられる。林裕己（二〇〇六）は、本銘の第二句をもつもので「新有善銅」銘は存在しないという。なお、小校一六・一七の方格規矩四神鏡は、「漢有善銅」銘をもちながら内區に居攝二年（後七）五月に發行された「大泉五十」錢文をいれるため、その鏡は新の建國（後九年）までの二年間に製作されたのである。『丹陽』は「漢書」地理志にいう丹陽郡で（富岡・一九二〇・二二六頁）、班固の自注に「故鄣郡、屬江都、武帝元封二年（前

一二）更名丹揚、屬揚州」・「有銅官」という。漢代の丹陽郡は江南にあった。ただし、屬縣の丹陽に班固は「楚之先熊繹所封、十八世、文王徙郢」と注することから、漢水支流の丹江流域にあった楚都丹陽としばしば混同されてきた。『史記』貨殖列傳の注に引く唐・張守節『正義』に「秦置鄣郡在湖州長城縣西南八十里、鄣郡故城是也。漢改爲丹陽郡、徙郡宛陵、今宣州地也。上言吳有章山之銅、明是東楚之地。」というのが正しい。

第二句の類例として銘文四〇一の「涑治銅華清而明。以之爲鏡宜文章。」がある。「清且明」は銘文四三五にもみえた。金索六・三五（K・一〇五）は「取之爲鏡清如明。」とする。「如」は「而」の假借。『左傳』莊公七年の「夜中星隕如雨」に杜預は「如、而也。」と注する。K・一〇三は「取」のかわりに「用」とする。

第三句の類似句として、銘文四一一に「左龍右虎得天菁」、銘文四一二に「左龍右虎四時置」、銘文四二四に「左龍右虎辟不羊」がある。「備」のかわりに「掌」・「主」・「除」が、「旁」の假借として「彰」字が、それぞれ用いられることがある。『易經』大有に「九四、匪其彰、無咎。」とあり、孔穎達の疏に「彰、旁也。」という。銘文四一八は、本銘の第四・第五句と同一の銘文をもつ。さきの金索六・三五は第四句を「長壽宮寺」とする。銘末のため、句の途中で切れている。「宮寺」は、皇宮と官署で、『晉書』荀勗傳に「縱兵寇掠、陵踐宮寺」という用例がある。K・一〇五は「宮殿の廣間で、長壽が得られますように。」と譯すが、鏡銘では類例がない。林分類Ma laに屬すが、「漢」ではなく「新」となる数少ない例が、つぎの小校一六・六八の獸帶鏡である。

新有名銅出丹陽。

新に名銅有りて、丹陽に出づ。

用之爲鏡青而明。

之を用ひて鏡を爲るに、清にして明なり。

り。

八子九孫主治三彭。

八子九孫あり、四方を主治せん。

朱爵玄武。

朱爵と玄武あり。

「善銅」のかわりに「名銅」となり、「左龍右虎備三旁」と「八子九孫治中央」を折衷して「八子九孫主治三彭」となっている。

●四三九 漢鏡四期

漢有善銅出丹陽。

漢に善き銅有り、丹陽に出づ。

和以銀錫清且明。

和するに銀錫を以てし、清にして且つ明なり。

左龍右虎主三彭。

左龍と右虎は四方を主る。

朱爵玄武順陰陽。

朱爵と玄武は陰陽を順ふ。

八子九孫治中央。

八子九孫ありて、中央を治めん。

(注)

金索六・三一(K・九九)の方格規矩四神鏡にみる。林分類のMa1bはこの第二句によつてMa1aと區別する。起句の前に小さい「○」記號がある。押韻は銘文四三八と同じ。

「銀錫」は銘文二二九の注を參照。小校一五・二二の方格規矩四神鏡は、「善銅」のかわりに「名銅」、「和以銀錫」のかわりに「雜以銀錫」とする。小校一五・二〇の獸帶鏡など「以」のかわりに「已」を用いた例は多い。「以」と「已」はもと同文。

林分類のMb2aは「漢」にかえて「新」としたもので、それ以外の語句はほぼ同じ。河南省洛陽市同樂寨一五號墓の方格規矩四神鏡(洛陽・二九)などがある。これは新王朝の始建國元年(後九)以後の製作である。

なお、これと同じ銘式の小校一五・一七の方格規矩四神鏡は、第

四句を「自□□雒陽□□」とするが、釋讀できない字が多い。

●四四〇 漢鏡四期

漢有善銅出丹陽。

漢に善き銅有り、丹陽に出づ。

卒以銀錫清而明。

雜ふるに銀錫を以てし、清にして明なり。

刻治六博中兼方。

六博を刻治し、廉・方に中たる。

左龍右虎洪四彭。

左龍と右虎は四方を佚んず。

朱爵玄武順陰陽。

朱爵と玄武は陰陽を順ふ。

八子九孫治中英。

八子九孫ありて、中央を治めん。

常葆父母利弟兄。

常へに父母を保ち、弟兄に利し。

應師四時合五行。

應に四時に師ひ、五行に合はさん。

法象天地日月光。

法は天地に象り、日月の光のごとし。

昭神明鏡相侯王。

神を照らす明鏡は侯王を相ん。

眾身美好如玉英。

終身 美好なること玉英の如し。

千秋萬世、

千秋萬世も、

長樂未央兮。

長く樂しみ未央さず。

(注)

江蘇省東海縣尹灣四號墓の方格規矩四神鏡(連雲港市博物館ほか・一九九七・一七一頁)にみる。起句の前に「…」記號がある。「陽」・「明」・「方」・「彭」・「陽」・「兄」・「行」・「光」・「王」・「英」・「央」は陽部で押韻する。

第二句の「卒」は「雜」の省字。

第三句の「六博」は、「博局」に同じ。『史記』蘇秦傳の「六博蹴鞠」に「索隱」は「王逸注楚詞云、博、著也。行六碁、故曰六博。」という。尹灣六號墓から出土した「博局占」には木牘の上段に方格とTLV形とからなる博局紋があり、下段に婚姻・旅行・裁判・病

氣・逃亡者にかんする五項目の占文が分書されている。これによって博局ではT・L・V形の直線上に駒を進め、占文の行頭にある「方」・「廉」・「楊」・「道」・「張」・「曲」・「詘」・「長」・「高」の九字は、それぞれ駒をとどめる地點であることが明らかになった（李學勤・一九九七）。本銘の「兼」は方格四邊の外縁にあたる「廉」の省字で、「方」は方格の中央にあたる。したがって、「中兼方」は、博局中央の方格にあたるところをいう。

第四句の第五字を報告は「游」としたが、誤釋。「佚」は「佚」に通じる。『荀子』王霸の「心欲慕佚」の唐・楊倞注に「佚、安樂也。」とある。「佚四方」とは「四方を安樂ならしめる」意味であろう。「四」字は「三」とあらわず、いわゆるゴチック體の字形であることからみても、製作時期が同式の銘文より古くさかのぼる。

第六句の「英」は「央」の、第七句の「葆」は「保」の繁字。「父母」は銘文三二〇に既出だが、ふつう漢鏡四期では「二親」となる。銘文四一〇に「利貳親。宜弟兄。」という例がある。

第八句の第二字を報告は「隨」としたが、誤釋。「師」は、したがう。『莊子』秋水に「蓋師是而無非」とあり、『釋文』に「師、順也。」という。「四時」については、銘文四一二に「左龍右虎三時置」、銘文四一三・四一四に「上有龍虎三時置」とあるが、「應師四時」はほかに例がない。「五行」については、銘文四〇三に「取氣於五行」、銘文四〇四に「得氣五行有剛紀」、銘文四〇五に「五行德令鏡之精」という例がある。

第九句を報告は「浩如天地」としたが、「法象天地」の誤釋。銘文四一七に「法象天地、如日月光。」とあり、本銘ではそれを七字句に改めたため、「如」字が脱落した。

第一〇句の「神」は、人の心。銘文四〇九に「服此鏡、得大神。」

とあり、鏡によつてすぐれた效能が與えられると解釋したが、本銘は本鏡が人の姿を寫すだけでなく内面の心をも照らしだす明鏡であることをうたうのであろう。

第一一句の第一字の「眾」は「終」に通じる。『儀禮』士相見禮に「眾皆若是」とあり、鄭玄注は「今文、眾爲終。」という。第二字を報告は「良」とするが、「身」の誤釋。「玉英」については、銘文四〇六の注を參照。

四言二句の第一二・第一三句は、銘文三〇一・三〇三など漢鏡三期から用いられていた。銘文四三八・四三九のように整った七字句の「漢有善銅出丹陽」銘よりも、本銘のように雜言體のものは時期がわずかに先行するのであろう。

●四四一 漢鏡四期

漢有善銅出丹陽。

漢に善き銅有り、丹陽に出づ。

左龍右虎辟不祥。

左龍と右虎は不祥を辟けん。

昭爵玄武利陰陽。

朱雀と玄武は陰陽に利し。

八子十二孫治中央。

八子十二孫は中央を治めん。

法象天地、

法は天地に象り、

如日月之光。

日月の光の如し。

千秋萬歲、

千秋萬歲にして、

長樂未央兮。

長く樂しみ未央きず。

(注)

湖南省永州市（舊零陵縣）東門外漢墓の方格規矩四神鏡（湖南省文物管理委員會・一九五七）にみる。鏡影が不鮮明なため、釋文は報告にしたがう。最初の三句は整った七字句だが、第四句からは四字句を主とする雜言句となる。「陽」・「祥」・「陽」・「央」・「光」・「央」

は陽部で押韻する。

第二句の「辟」は「辟」の繁字。

第三句の「昭爵」は「朱雀」。銘文四一七の注を参照。第三句から第八句までは銘文四一七とはほぼ同じで、わずかなちがいは本銘の「八子十二孫」が「十子九孫」、「如日月之光」が「如日月光」となっているだけである。

●四四二 漢鏡四期

漢有善銅出丹山。 漢に善き銅有り、丹山に出づ。

刻者畏巧鑄師神。 刻む者は畏巧にして、鑄師は神なり。

左龍右虎拜鮮人。 左龍と右虎あり、仙人を拜む。

法而天地傳子孫。 法は天地の如く、子孫に傳へん。

葆長命、 長命を保ち、

壽万年。 壽は萬年ならん。

(注)

小校一五・二二(尊古齋・五一)の獸帶鏡にみえる。起句の前に「…」記號があり、「山」は元部、「神」・「人」・「年」は眞部、「孫」は文部で叶韻する。元部・眞部・文部の叶韻は銘文四二〇・四二二に例がある。

第一句は「丹陽」を「丹山」に改める。「丹山」は丹陽の名山か。これにともない、第二句以後の韻字が置き換わった。

第二句を小校は「刻者□□鏡師神」とする。「鏡」は「鑄」の誤釋。未讀の二字は「畏巧」または「鬼巧」であろう。『說文』九上に「畏、…鬼頭虎爪。可畏也。」とあり、「畏」と「鬼」は字形が近い。「畏」は「威」の假借。『尚書』皋陶謨の「天明畏、自我民明威」に『釋文』は「畏如字、徐音威、馬本作威。」とあり、古字は

通用した。この句は、鏡の紋様を彫刻し、それを鑄造した工匠は、人並みはずれた技術をもっていたことをいう。銘文四四五の「巧工刻之成文章」を誇張した表現である。

第三句の「鮮」は「仙」の假借。鏡銘をふくめ、ほかに「鮮人」の用例はないが、王力の古音説では「鮮」と「仙」はどちらも「心元切」で同音である。

第四句を小校は「法天而□」とするが、未釋字は字形からみて「地」である。「天」と「而」とは字形が類似し、「法而天地」もしくは「法天而地」と釋すべきであろう。『墨子』尙同上に「聞善而不善」とあり、『閒詁』に「畢云、而與如同。王引之云、而、猶與也。言善與不善也。而・與聲之轉。故莊子外物篇與其譽堯而非桀、大宗師篇與作而。」という。「而」は「如」もしくは「與」と同じ。この句は銘文四四一の「法象天地」と同義である。

第五・第六句は三言句である。「葆」は「保」の繁字。「万」は「萬」の古字。銘文四一七の注を参照。銘文四二二〜四二四など「上大山見神人」の句をもつ銘文は、ほとんどが「万」の字を用いており、本銘はそれらと近い關係にあることをものがたる。

●四四三 漢鏡四期

漢有佳銅出丹陽。 漢に佳き銅有り、丹陽に出づ。

□剛作鏡眞母傷。 □剛もて鏡を作るに、眞に傷母し。

凍治鎮錫清且明。 眞の錫を鎮治し、清にして且つ明なり。

昭于宮室日月光。 宮室を照らすに、日月の光のごとし。

左龍右虎主四方。 左龍と右虎は四方を主る。

八子十二孫治中央。 八子十二孫は中央を治めん。

(注)

簠齋・下二後(陳介祺・一〇六)の方格規矩四神鏡にみる。起句の前に「・」記號があり、「陽」・「傷」・「明」・「光」・「方」・「央」が陽部で毎句押韻する。釋文はおおむねカールグレン(K・一〇四)にしたがった。

第一句は「善銅」のかわりに「佳銅」、「丹陽」は「丹揚」と表記する。

第二句の最初の一字は未釋。この句の類例として銘文四四六の「尙方御竟大毋傷」があり、「□剛」は製作者であろうか。第三句は銘文四〇一の「凍治銅華清而明」と銘文四三九の「和以銀錫清且明」を折衷し、「銅華」・「銀錫」のかわりに「鑲錫」とする。「鑲」は「銀」の誤字か「眞」の繁字であろう。

第四句の「昭」は「照」の省字。この句に近い例として銘文四一七に「法象天地、如日月光」、銘文四三九に「法象天地日月光」があり、K・一〇四は「日月光」の前に「如」が省略されているとする。第五句の「四」字は「三」につくらない。第六句は銘文四四一に既出。「八子十二孫」は銘文四一一・四二〇にもみえる。

●四四四 漢鏡四期

漢有名銅出丹羊。 漢に名銅有り、丹陽に出づ。
 雜以銀錫清而明。 雜ふるに銀錫を以てし、清にして明なり。
 朱爵玄武順陰陽。 朱爵と玄武は陰陽を順ふ。
 八子九孫治中央。 八子十二孫は中央を治めん。
 東上泰山見神人。 東のかた泰山に上り、神人を見る。
 食而玉央飲澧泉。 玉英を食らひ、醴泉を飲む。
 堂宜官秩保子孫。 常へに官秩に宜しく、子孫を保たん。

(注)

小校一五・二二下の方格規矩四神鏡にみる。「羊」・「明」・「陽」・「央」が陽部で韻をふみ、第五句で換韻して「人」は眞部、「孫」は文部、「泉」は元部で叶韻する。

第一句は「善銅」を「名銅」とし、「丹陽」を「丹羊」とする。第二句は銘文四四〇に、第三句は銘文四一八・四三八・四四〇に、第四句は銘文四一八・四二四に既出。小校は第三句「朱爵玄武順□□」の二字を未讀だが、「順陰陽」とみてまちがいない。第五句は銘文四二二・四二四など「上大山見神人」の六言句に「東」を冠して七字句としたもの。小校は第六・第七句を「食而玉央飲澧□室宜官秩保子孫」と釋した。銘文四〇六に「食玉英兮飲澧泉」とあり、第六句の未讀字は「泉」であろう。「央」は「英」の省字であり、「玉英」については銘文四〇六の注を參照。「澧泉」は「醴泉」。第七句の「室」は、字形からみて「堂」であり、意味からみて「常」の假借であろう。「宜官秩保子孫」は銘文四二二に既出。

●四四五 漢鏡四期

漢有善銅出丹陽。 漢に善き銅有り、丹陽に出づ。
 凍治銀錫清而明。 銀錫を鍊冶するに、清にして明なり。
 巧工刻之成文章。 巧なる工は之を刻み、文章を成す。
 左龍右虎辟不羊。 左龍と右虎は不祥を辟く。
 朱鳥玄武順陰陽。 朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。
 子孫服具居中央。 子孫備具し、中央に居らん。
 長保二親樂富昌。 長く二親を保ち、樂しみ富み昌えん。
 壽如金石之侯王。 壽は金石の如く、侯王に至らん。

(注)

金索六「漢角王竟」の獸帶鏡の外圈銘。内圈に銘文四一五をいれる。書き起こし圖のため、釋文はおおむね金索にしたがう。K・一〇二もほぼ同銘である。整った七字句で、起句の前に「…」記號があり、「陽」・「明」・「章」・「羊」・「陽」・「央」・「昌」・「王」が陽部で毎句押韻する。

第三句の類例として銘文四〇一の「以之爲鏡宜文章」があり、銘文四四二の「刻者畏巧鑄師神」はこれを誇張した表現。「工」は鏡工人。容續・二に「工馮刻之成文章」とあり、鏡工の馮が鏡の鑄型を彫刻したと解釋できるからである。「巧工」の用例として『墨子』緒聞に「公輸般爲高雲梯、欲以攻宋。…王曰、公輸般、天下之巧工也、已爲攻宋之械矣。」という。

第四句の「羊」は「祥」の假借または省字。

第五句の「朱鳥」は、漢鏡四期では「朱爵」が多いが、つぎの銘文四四六など「尙方」の鏡に特徴的にみられる用例である。

第六句の「服」は「備」の假借(K・一〇八)。「戰國策」趙策に「騎射之服」とあるのを『史記』趙世家は「騎射之備」とする。

第七句の「樂富昌」の訓讀については、カールグレン(K・一〇二)説にしたがった。「樂富昌」は「長保二親」に後續するのがほとんどである。

第八句の「之」は「至」の假借。『詩經』鄘風・柏舟の「之死矢靡它」に毛傳は「之、至也。」という。

第一句の「漢有善銅」にかえて「新有善銅」とした例に、小校一六・六六の獸帶鏡がある。内圈に銘文四一五をいれた同巧の作品であり、本鏡の製作が漢から新への王朝交替期にあたっていることをものがたる。なお、「新有善銅」銘をもつ小校一六・六七の方格規

矩四神鏡は、第二句を「巧工刻婁畫文章」と改變する。

●四四六 漢鏡四期

新有善銅出丹陽。

凍治銀錫清而明。

尙方御竟大毋傷。

巧工刻之成文章。

左龍右虎辟不羊。

朱鳥玄武順陰陽。

子孫備具居中央。

長保二親樂富昌。

壽敝金石如侯王兮。

新に善銅有り、丹陽に出づ。

銀錫を鍊冶するに、清にして明なり。

尙方の御鏡は大いに傷母し。

巧みなる工は之を刻し、文章を成す。

左龍と右虎は不祥を辟く。

朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。

子孫備具し、中央に居らん。

長く二親を保ち、樂しみ富み昌えん。

壽は金石と敝し、侯王の如くあらん。

(注)

林分類のMb2b。中國國家博物館藏の方格規矩四神鏡(楊桂榮・一九九二・圖六九)などにみる。銘文四四五に第三句を加えたもの。

起句の前に「…」記號があり、「陽」・「明」・「傷」・「章」・「羊」・「陽」・「央」・「昌」・「王」が陽部で毎句押韻する。

第一句の「新」は、王莽が漢王朝を篡奪して建國した新王朝。第三句の「尙方」は少府屬官で、『通典』職官九に「秦置尙方令、漢因之。後漢主作手工作・御刀劍・玩好器物及寶玉作器。」という。岡崎敬(一九六五)を參照。漢鏡五期には「尙方作鏡」銘の鏡が多いが、ここでは「尙方御竟」というのみである。北朝鮮ピョンヤン市石巖里二〇〇號墓の方格規矩四神鏡(梅原・一九二五)に「尙方御竟大毋傷。名師作之出雒陽。」とあるように、雒陽の鏡工が製作した「尙方御竟」があつたことに加え、これは鏡銘における「尙方」の初出であり、ほぼ同時期に王莽が督造した「王氏作鏡」銘が出現

することから、この「尙方」も督造者であったのだろう。

なお、林分類のMb_{2c}は、本銘の第三句「尙方御竟大毋傷」が起句となり、以下「新有善銅出丹陽」とつづく銘式である。ラグレリウス舊藏(K・一七三)の方格規矩四神鏡などの例がある。

●四四七 漢鏡四期

新興辟雍建明堂。

新 辟雍を興し、明堂を建つ。

然于舉士列侯王。

單于是土を舉げて侯王に列せらる。

將軍令尹民戸行。

將軍・令尹は民の行なふ所なり。

諸生萬舍在北方。

諸生の萬舍は北方に在り。

樂未央。

樂しみ未だ央さず。

(注)

林分類のZ。上海・三九や富岡・圖版四一(K・一一〇)などの方格規矩四神鏡にみる。起句を示す記號はないが、「堂」・「王」・「行」・「方」・「央」が陽部で毎句押韻する。

第一句の「新」は王莽の建てた新王朝。王莽は平帝の元始四年(後四)に上奏して明堂・辟雍・靈臺を造營し、儒學者のために學舎を建てた。『漢書』王莽傳上に「莽奏起明堂・辟雍・靈臺、爲學者築舍萬區、作市・常滿倉、制度甚盛。」というのがそれである。始建國二年(一〇) 獸帶鏡に「更作辟雍治校官」というのも同じ。『辟雍』は『禮記』王制に「天子命之教、然後爲學。小學在宮宮南之左、大學在郊。天子曰辟雍。」とあり、鄭玄注に「尊卑學異名。辟、明也。靡、和也。所以明和天下。」という。「明堂」は『禮記』明堂位に「昔者周公朝諸侯于明堂之位」とあり、鄭玄注に「周公攝王位、以明堂之禮儀朝諸侯也。」という。

第二句について、カールグレン(K・一一〇)は「烈于舉士」と

讀み、「あなたが學者たちのあいだで名をあげられますように」と解釋した。漢代では四つの德行(敦厚、質樸、遜謙、節儉)をもつ人物を朝廷に推薦させ、銘文四三五にみたように、王莽もそれにならった。『漢書』王莽傳中には天鳳三年(一六)七月に「日有食之。大赦天下。復令公卿大夫諸侯二千石舉四行各一人。」という。しかし、選舉で昇進できたのは上卿までであり、「列侯王」までは認められていない。これにたいして、富岡謙藏や梅原末治(一九五八)は右のように釋した。おそらく「然于」は匈奴の「單于」の假借とみたのであろう。『漢書』匈奴傳に「單于者、廣大之貌也、言其象天單于然也。」とあり、同傳に「天鳳二年(一五)五月多遺單于金珍、因論說改其號、號匈奴曰恭奴、單于曰善于、賜印綬。」という。王莽は「單于」を「善于」と書き換えたのである。王力の上古音說によれば、「然」は「日元」だが、「單(單于・姓)」「善」はどちらも「禪元」で同音である(單于・姓以外の「單」は「端元」で、聲母が異なる)。「舉士」は蠻夷が土地を献上して服屬すること。『後漢書』安帝紀に「九真徼外夜郎蠻夷、舉士內屬。」や「蜀郡徼外羌舉士內屬。」という用例がある。富岡・梅原の釋のほうが「列侯王」とのつながりがよく、妥當であらう。

第三句の「令尹」は戰國時代の楚國の宰相。『論語』公冶長の「令尹子文、三仕爲令尹、無喜色。」に邢昺疏は「令尹、宰也。楚臣令尹爲長、從他國之言、或亦謂之宰。」という。しかし、これは王莽代の郡太守である「大尹」の誤りか。『漢書』王莽傳中に始建國元年(後九)「改郡太守曰大尹、都尉曰太尉、縣令長曰宰」という。「民戸行」を富岡は「民所行」、上海・三九は「民戸行」と釋し、K・一一〇はそれを解釋していない。字形は「戸」であり、「所」の假借ないしは省字であらう。銘文四三五にみたように、こ

の句は王莽が民間から御史大夫や前後左右將軍などの位にあたる上卿に推舉させたことをいう。

第四句は、さきにみた元始四年（後四）の「莽奏起明堂・辟雍・靈臺、爲學者築舍萬區」（『漢書』王莽傳上）をいう。『長安志』卷三・漢太學に引く『關中記』に「漢太學・明堂皆在城南安門之東、杜門之西。」というが、『三輔黃圖』太學には「漢太學在長安西北七里。董仲舒策曰、太學、賢士之關、教化之本原也。王莽作宰衡時、弟子舍萬區、起市郭上林苑中。」とあり、本銘文に「在北方」とあることからみて、太學は長安城の北にあったとみるべきであろう。このほか、羅振玉「鏡錄」一四葉（K・一一二）につき銘文が收録されている。

薪起辟雍蓋明堂。

漢朝□于凶奴畏。

薪家□起更立平。

天□以下國中安。

四夷□□無不□。

千秋萬歲長樂。

「堂」は陽部、「畏」は微部、「平」は耕部、「安」は元部で、韻をふみはずしている。鏡影不明のため、釋文は檢證できないが、「薪」が「薪」と繁字になり、「辟雍・明堂」の建設と「□于凶奴（單于匈奴か）」がうたわれていることに注意される。

●四四八 漢鏡四期

尙方作竟佳哉紛。
巧工刻陋成雕文。
請備說之告諸君。

尙方 鏡を作るに、佳きかな紛さかんなり。
巧なる工が刻鏤し、雕文を成せり。
誠 備りて之を説び、諸ろの君に告ぐ。

上大山見神人。

驂駕交龍乘浮雲。

興紹前弓大風。

厲去名山奏昆侖。

過玉闕入金門。

上玉堂何□□。

佳哉紛傳子孫。

大山に上り神人を見る。

交龍に驂駕して浮雲に乗る。

劬を興して前み、大風を引く。

名山を厲り去り、崑崙に奏く。

玉闕を過りて、金門に入る。

玉堂に上れば、何ぞ□□。

佳きかな紛なり、子孫に傳えよ。

（注）

簠齋・上一（陳介祺・六六）の方格規矩四神鏡にみる。釋文はおもに容續・五にしたがつた。六字句と七字句とからなる雜言禮で、「紛」・「君」・「雲」・「命」・「門」・「孫」は文部で押韻し、眞部の「人」もそれと叶韻する。文部と眞部との叶韻例は銘文四二〇、四二二などにある。

第一句の末二字を容庚は未釋だが、「哉紛」であろう。漢鼓吹鏡歌「遠如期」（『宋書』樂志）に「雅樂陳、佳哉紛。」とある。「紛」は、さかなさま。『楚辭』離騷の「紛吾既有此內美兮」の王逸注に「紛、盛貌。」という。あるいは「份」の假借か。『說文』八上に「份、文質備也。从文分聲。論語曰、文質份份。彬、古文份。」とあり、文質ともに備わる意味であろう。

第二句の第四字と第六字を容庚は未釋だが、「巧工刻陋成雕文」であろう。「陋」は「鏤」の假借。王力の古音説では「來侯」切である。「雕文刻鏤」は熟語として用いられ、『漢書』景帝紀の「詔曰、雕文刻鏤、傷農事者也。」などとある。

第三句の「請」は「誠」の假借。『墨子』明鬼下に「若使鬼神請有」・「若使鬼神請亡」とあり、孫詒讓『閒詁』は「請、畢本改誠、…此篇多以請爲誠」という。第二字は未讀だが、「備」であら

う。第三字を容庚は「訢」と讀むが、字形は「說」である。意味はどちらも同じ。

第四句は銘文四二二～四二四に前出。

第五句の第一字を容庚は讀んでいないが、銘文四二二に「參駕蜚龍乘浮雲」とあり、字形からみても「驂」であろう。

第六句を容庚は「□□□大同」とする。第一字は字形からみて「興」・「與」のどちらかであろう。第二字は「紹」で「邵」の假借。梁王簡棲「頭陀寺碑文」(『文選』卷五九)に「世彌積而功宣、身逾遠而名紹。」とあり、李善注に「法言」曰、年彌高而德彌劭者、孔子之徒與。『小雅』曰、劭、美也。」とある。第三字は「前」で、すすむ意。「興劭前」と釋しうるならば、銘文四二〇の「福熹進今日以前。」と類似する意味になるう。第四字は「弓」で「引」の省字。銘文四二〇～四二二に「白虎引」とあり、「引」を「弓」と書く例がある。第四句からこまでは、「上大山見神人」の句をもつ銘文四二二～四二四と類似する。第六字は「同」ではなく、字形からみて「風」である。「風」は冬部だが、『周禮』士師の「以荒辯之法治之」の注に「鄭司農云、辯、讀爲風別之別。」とあり、朱駿聲『說文通訓定聲』が「風、假借爲放、又假借爲凡、又假借爲分。」というように、「風」は漢代では侵部の「凡」や文部の「分」と通じていた。これが韻字であることから、この銘文では文部の音であったのだろう。漢末の唐公房碑(永田・一九九四・一三七)に「於是乃以藥塗屋柱、飲牛馬六畜、須臾有大風玄雲、來迎公房妻子、屋宅六畜、儻然與之俱去。」とあり、大風によって唐公房の妻子や屋宅六畜がみな仙界に昇ったことをいう。

第七句を容庚は「□□名山□昆侖」とする。第一字は「厲」であろう。司馬相如の「大人賦」(『史記』司馬相如傳)に「橫厲飛泉以正

東」とあり、注に「正義、厲、渡也。張云、飛泉、谷也、在崑崙山西南。」という。あるいは『呂氏春秋』季冬紀に「征鳥厲疾」とあり、高誘注に「厲、高也。」という。この句は、名山を高く飛び越えてゆくことをいうのであろう。第五字は「奏」であろうか。「奏」は「走」の假借で、『史記』蕭相國世家の「諸將皆爭走」に『索隱』は「音奏。奏者、趨向之。」と注する。おもむく意。「昆侖」は、神仙の住む崑崙山。

第八・第九句は崑崙山における宮殿の様子。「玉闕」が崑崙山にあると考えられたことは、『御覽』地部・崑崙山に引く『十洲記』に「上有金臺・玉闕、亦元氣之所合天帝君治處。」という。「金門」と「玉堂」は、『漢書』五行志に「玉堂・金門、至尊之居。」とあり、同・揚雄傳の「解嘲」に「歷金門、上玉堂」という。漢長安城にも「金(馬)門」や「玉堂」があり、崑崙山のそれも長安城にちなむ宮殿であろう。第九句の下二字は、讀めない。

第一〇句を容庚は「佳□□子孫」と釋すただが、未讀の三字は「哉紛傳」であろう。「佳哉紛」は第一句に前出。「傳子孫」は銘文四〇九にある。

●四四九 漢鏡四期

尙方御竟大母傷。
巧工刻之成文章。
左龍右虎辟不詳。
朱鳥玄武調陰陽。
子孫備具居中央。
長保二親樂富昌。
壽敝金石如侯王兮。

尙方の御鏡は大いに傷母し。
巧なる工は之を刻し、文章を成す。
左龍と右虎は不祥を辟く。
朱鳥と玄武は陰陽を調ふ。
子孫は備具し、中央に居らん。
長く二親を保ち、樂しみ富み昌えん。
壽は金石と敝し、侯王の如くあらん。

(注)

林分類のし。璽齋・上三(嚴窟二中・二に同じ)の方格規矩四神鏡などにみる。起句の前に「…」記號があり、「傷」・「章」・「詳」・「陽」・「央」・「昌」・「王」が陽部で毎句押韻する。

本銘の七句は、すべて銘文四四六にあり、「新有善銅出丹陽。凍治銀錫清而明。」の二句を省略したもの。ただし、第三句の第七字は「祥」を「詳」とし、第四句の第五字は「順」のかわりに「調」とする。「調」は、ととのえる。

奇觚一五・三七の獸帶鏡は、内圈に銘文四五四、外圈に本銘をいれるが、その第二句は「巧工刻鏤成文章」とする。また、小校一五・三二(K・一六六)の方格規矩四神鏡は、第一句の第五字を「大」のかわりに「眞」とし、第六句に「上有仙人以爲常」を挿入する。同じように小校一五・三二の方格規矩四神鏡は、第六句に「徘徊名山采神草」という仙遊句をいれる。

K・一六三の極東古物博物館藏鏡は、本銘の最後に「宜牛羊」という三言句をいれる。「宜牛羊」は銘文四一三・四二三に既出。

●四五〇 漢鏡四期

作佳鏡哉眞大好。

上有仙人不知老。

渴飲玉泉飢食棗。

佳き鏡を作れるかな、眞に大いに好し。
上には仙人有りて老を知らず。
渴いては玉泉を飲み、飢えては棗を食らふ。

浮游天下敖三海。

壽敝金石爲國保。

天下に浮游し、四海に敖ぶ。
壽は金石と敝し、國の寶と爲らん。

(注)

林分類のKa。璽齋・上二九の方格規矩四神鏡などにみる。起句の

前に魚形があり、幽部の「好」・「老」・「棗」・「保」と之部の「海」が叶韻している。カールグレン(K・二二五)説では幽部と之部は押韻する。

第一句の「作佳鏡哉」は銘文四二七に前出。

第三句の類例として銘文四〇六に「食玉英兮飲澧泉」がある。本銘では「澧泉」のかわりに「玉泉」、「玉英」のかわりに「棗」となっている。ただし、小校一五・八三の同式銘は「渴飲澧泉飢食棗」とし、過渡的な用語の例である。「玉泉」と「棗」は、仙人が常服するとされる不老長生の仙薬。「神農本草經」に収める上薬百二十種、中薬百二十種、下薬百二十五種のうち、「玉泉」は上薬の第一位に配され、「玉泉、一名玉札。味甘平、生山谷。治五藏百病、柔筋強骨、安魂魄、長肌肉、益氣。久服耐寒暑、不飢渴、不老仙。」という。また、「棗」はその乾果を「大棗」といい、同書はこれも上薬の一つに数え、「久服輕身長年」とする。

第四句の「三」は「四」。漢鼓吹鏡歌「上陵」(『宋書』樂志に「芝爲車、龍爲馬。覽遨遊、四海外。」という類似句がある。

第五句の「國保」をK・二一五は「國の守護者」と譯す。しかし、この「保」は「寶」の假借であらう。『史記』周本紀に「命南宮括・史佚展九鼎保玉」とあり、『集解』に「徐廣曰、保、一作寶。」という。「國寶」は、國の重鎮。銘文四一六に「國寶受福家富昌」という例がある。

小校一五・八三の方格規矩四神鏡は、第五句に「左龍右虎辟除道」を挿入する。

●四五一 漢鏡四期

尙方作竟眞大好。

尙方鏡を作るに、眞に大いに好し。

上有仙人不知老。
渴飲玉泉飢食棗。

上には仙人有りて老を知らず。
渴いては玉泉を飲み、飢えては棗を食らふ。

浮游天下敖三海。

天下に浮游し、四海に敖ぶ。

徘徊名山采芝草。

名山を徘徊し、芝草を采る。

壽如今石之天保。

壽は金石の如く、天の寶に至らん。

大利八千万兮。

大なる利は八千萬ならん。

(注)

林分類のKb。小校一五・二二の方格規矩四神鏡などにみる。起句の前に「…」記號があり、幽部の「好」・「老」・「棗」・「保」と之部の「海」が叶韻している。末句の「萬」は元部で、途中で句が切れているのだらう。

銘文四五〇の第一句を「尙方作竟」に置き換えたもの。「尙方作竟」は銘文四四八にあり、銘文四四六には「尙方御竟」とあった。

第二句から第四句は銘文四五〇と同じ。

第五句の「芝草」は『論衡』佚文に「一莖三葉、食之令人眉壽慶世、蓋仙人之所食。」という。K・二一六(セリグマン舊藏鏡)は「神草」、K・二二七は「其艸」とする。第六句の「今」は「金」の假借。「天保」は「天が安らかにしてくれること、あるいはその地位」で、『詩經』小雅・天保に「天保定爾、亦孔之固。」とあり、鄭玄箋は「保、安、爾、女也。」という。あるいは「保」は「寶」の假借で「天より下された寶物」を意味するのであらう。「之」は「至」の假借。銘文四四五に「壽如金石之侯王」という例がある。江蘇省揚州出土の方格規矩四神鏡(王勳金ほか・一九八五)は、第六句を「堅如石大之國寶」と釋する。

第七句の「万」は「萬」の古字。銘文四一七の注を參照。

林分類のKcは、本銘の第一句を「王氏作竟真大好」とし、第六句までをいれたもの。小校一五・四七の方格規矩四神鏡などの例がある。その「王氏作」は王莽が督造者であつたことを示す。銘文四四六の注を參照。

●四五二 漢鏡四期

尙方作竟真大巧。

尙方鏡を作るに、真に大いに巧みなり。

上有山人不知老。

上には仙人有りて老を知らず。

左龍右虎辟除道。

左龍と右虎は道を辟除す。

朱鳥玄武銜芝草。

朱鳥と玄武は芝草を銜む。

子孫備具長相保。

子孫は備具し、長く相ひ保たん。

壽如金石。

壽は金石の如し。

(注)

簠齋・上二の方格規矩四神鏡にみる。釋文はおおむね容續・四にしたがう。起句の前に「…」記號があり、「巧」・「老」・「道」・「草」・「保」が幽部で毎句押韻している。

第一句の末字を銘文四五一の「好」にかえて「巧」とする。

第二句の「山」は「仙」の省字。

第三句の「辟除」は、開闢すること。漢・焦贛『易林』屯之兌に「道路辟除、南至東遼、衛子善辭、使國無憂。」とある。

第四句の第五字を容庚は未讀だが、「くわえる」意味の「銜」字であらう。「朱鳥玄武」が芝草を銜えるのはめづらしい。

第五句の「子孫備具」は、銘文四四五・四四六に、「長相保」は銘文四一〇に前出。

●四五三 漢鏡四期

此有佳鏡成獨好。 此に佳き鏡有り、誠に獨り好し。

上有山人不知老。 上には仙人有りて老を知らず。

渴飲澧泉飢食糞。 渴いては澧泉を飲み、飢えては糞を食らふ。

ふ。

浮游天下敖三海。 天下に浮游し、四海に敖ぶ。

壽敝金石爲國保。 壽は金石と敝し、國の寶と爲らん。

長生久視今常在。 長生久へに視て、今常へに在らん。

云何好。 云に何をか好しとする。

(注)

小校一五・八二の方格規矩四神鏡の周縁にめぐらせた銘文。方格には三字句からなる銘文四〇九をめぐらせた、めずらしい配置の鏡である。起句の前に「…」記號があり、幽部の「好」・「老」・「聚」・「保」・「好」と之部の「在」が叶韻している。

第一句の第二字は「作」と釋されたが、銑のため讀めない。類似の銘文をもつ長沙市金塘坡墓(湖南省博物館・一九七九)や湖南省(周世榮・一九八六・圖六二/六三)出土の方格規矩四神鏡は「有」とされる。それにしたがう。「成」は「誠」の省字。湖南省の出土例は「眞」とする。「誠」と「眞」は同義。京博・二三三の方格規矩四神鏡には「此有佳鏡眞獨好」とある。「獨好」は鏡が唯一無二の出来であることをいう。なお、「鏡」字と「成」字のあいだにひらがなの「お」に似た小さな字がある。これは詠嘆の辭である「於」の草書體であろう。『史記』夏本紀の「皋陶曰、於。」に『正義』は「於、音烏、歎美之辭。」という。

第二句の「山」は「仙」の省字。

第三句の「澧」は「體」。第四句の下三字は未讀だが、湖南省の

例によって補った。

第六句は「長生久□今□在」と讀まれたが、湖南省の例を參考にすれば「長生久視今常在」であろう。「久視」は、いつまでもみること。「長生久視」は常用句で、『老子』五九に「長生久視之道」、『荀子』榮辱に「是庶人之所以取煖衣飽食、長生久視以免於刑戮也。」、『呂氏春秋』重己に「世之人主貴人、無賢不肖莫不欲長生久視」とあり、高誘注に「視、活也。」という。

第七句の「云何」は「如何」に同じ。『詩經』小雅・隰桑に「既見君子、云何不樂。」とある。ここでは「云」を語助詞として讀んだ。この句のみ三字句で、本鏡の效能を記した銘文四〇九の方格銘が三字句であることから、これは第一句の「成獨好」の效能が方格銘に記されていることを指示する句であろう。

●四五四 漢鏡四期

王氏昭竟三夷服。 王氏の昭鏡あり、四夷服す。

多賀新家人民息。 多く新家を賀し、人民息ふ。

胡虜殄滅天下復。 胡虜殄滅して、天下復す。

風雨時節五穀孰。 風雨は時節あり、五穀熟す。

長保二親子孫力。 長く二親を保ちて、子孫祿あり。

傳告後世樂毋亟兮。 後世に傳告し、楽しみ極まり母し。

(注)

林分類のNa。簠齋・上一七の方格規矩四神鏡などにみる。起句の前に「…」記號があり、職部の「服」・「息」・「力」・「食」・「亟」と覺部の「復」・「孰」とが叶韻する。K・一二三は、すべて押韻するという。

第一句の「昭」は、明らか。『楚辭』大招に「白日昭只」とあ

り、王逸注に「昭、明也。」という。富岡・圖版三の方格規矩四神鏡は、これを「作」とする。第二句に「新家」とあり、この「王氏」は王莽をいう。「四」を「三」と表記することも王莽代の特徴。「四夷」は、四方の蠻夷。武帝が大宛に遠征して「千里馬」を入手したとき「天馬來兮從西極。經萬里兮歸有德。承靈威兮降外國。涉流沙兮四夷服。」（『史記』樂書）という歌をつくっている。

第二句の類例として銘文四二六・四二八に「多賀君家受大福」がある。「多」は、厚く。銘文四二六の注を参照。「息」の例として銘文四二七に「作佳鏡哉子孫息」、銘文四二八に「新銀治竟子孫息」があり、いずれも「子孫」にたいするものであった。ここでは有徳の政治を強調する内容になっている。

第三句の「胡虜」は、蠻夷を貶める呼び方。『漢書』王莽傳下に「莽下詔曰、詳考始建國二年胡虜猾夏以來」などの例がある。

第四句の類例として銘文四〇五に「風雨時節五穀成」がある。

第五・第六句の類例として銘文四二六に「長保二親得天力。傳之後世樂無極。」がある。「力」は「祿」の假借。小校一六・七一の方格規矩四神鏡は「長保二親受天福。傳告後世子孫力。」とする。

また、小校一六・七〇や同・七一の方格規矩四神鏡などは、「官位尊顯蒙祿食」や「官位尊顯天下復」などの語句をいれる。「官位尊顯」は銘文四二六・四二七にみえる。

出典略號

歐米……梅原末治 一九三一『歐米に於ける支那古鏡』、刀江書院

河北……河北省文物研究所 一九九六『歷代銅鏡紋飾』、河北美術出版社

巖窟……梁上椿 一九四〇、一九四二『巖窟藏鏡』

奇觚……劉心源 一九〇二『奇觚室吉金文述』

吉林……張英 一九九〇『吉林出土銅鏡』、文物出版社

京博……鈴木博司 一九七〇『守屋孝藏蒐集 方格規矩四神鏡圖錄』、京都國立博物館

錄、京都國立博物館

金索……馮雲鵬・馮雲鵬 一八二一『金石索』

廣州……廣州市文物管理委員會・廣州市博物館 一九八一『廣州漢墓』、文物出版社

漢墓、文物出版社

故宮……國立故宮博物院編輯委員會 一九八六『故宮銅鏡特展圖錄』

錄

古鏡……羅振玉 一九一六『古鏡圖錄』

三槐堂……王綱懷 二〇〇四『三槐堂藏鏡』、文物出版社

四川……四川省博物館・重慶市博物館 一九六〇『四川省出土銅鏡』、文物出版社

鏡、文物出版社

上海……陳佩芬 一九八七『上海博物館藏青銅鏡』、上海書畫出版社

版社

小檀……徐乃昌 一九二八『小檀鑾室鏡影』

浙江……王士倫 一九八七『浙江出土銅鏡』、文物出版社

千鏡堂……陳鳳九 二〇〇七『丹陽銅鏡青瓷博物館 千鏡堂』、文物出版社

物出版社

善齋……劉體智 一九三四『善齋吉金錄』

陝西……陝西省文物管理委員會 一九五九『陝西省出土銅鏡』、文物出版社

文物出版社

尊古齋……黃濬 一九九〇『尊古齋古鏡集景』、上海古籍出版社

陳介祺……辛冠潔 二〇〇〇『陳介祺藏鏡』、文物出版社

陶齋……端方 一九〇四『陶齋吉金錄』

長安……程林泉・韓國河 二〇〇二『長安漢鏡』、陝西人民出版社

湖南……湖南省博物館 一九六〇『湖南出土銅鏡圖錄』、文物出版社

富岡……富岡謙藏 一九二〇『古鏡の研究』、丸善株式會社

樋口……樋口隆康 一九七九『古鏡』、新潮社

簠齋……陳介祺 一九二五『簠齋藏鏡』

容續……容庚 一九三五『金文續編』、上海商務印書館

洛陽……洛陽博物館 一九八八『洛陽出土銅鏡』、文物出版社

K …… Karlgren, Bernhard 1934 Early Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6

参考文献

壽縣博物館・壽縣文管所 一九九二『安徽壽縣東津柏家臺兩座漢

墓的清理』『江漢考古』第四期

石川三佐男 二〇〇二『楚辭新研究』、汲古書院

今井育雄・今井佐江子 一九八八『中國の古鏡』藥照寺所藏品圖

錄一、藥照寺

入谷仙介 一九七八『古詩選』上、朝日新聞社

內野熊一郎 一九八七『中國古代金石文における經書讖緯神仙說

攷』汲古書院

梅原末治 一九二五『再び北部朝鮮發見の古鏡』『東洋學報』第

一五卷第二號

梅原末治 一九三四『刪訂泉屋清賞』、住友吉左衛門

梅原末治 一九五八『漢鏡とその文字』『書道全集』第二卷、平

凡社

雲南省博物館 一九五九『雲南晉寧石寨山古墓群發掘報告』、文物出版社

王英 二〇〇一『咸陽市博物館收藏的古代銅鏡』『考古與文物』

第四期

王勤金・李久海・徐良玉 一九八五『揚州出土的漢代銘文銅鏡』

『文物』第一〇期

王正書 一九八八『上海福泉山西漢墓群發掘』『考古』第八期

王力 一九八六『王力文集』第六卷、山東教育出版社

岡崎敬 一九六五『漢・魏・晉の『尚方』とその新資料』『東方

學』第三一輯

岡崎敬 一九七七『鏡とその時代』『立岩遺蹟』、河出書房新社

岡村秀典 一九八四『前漢鏡の編年と様式』『史林』第六七卷第

五號

岡村秀典 一九九一『秦漢金文の研究視角』『古代文化』第四三

卷第九號

岡村秀典 一九九八『蟠螭紋鏡の文化史』『泉屋博古館紀要』第

一四卷

小川環樹 一九五八『漢代文學の側面―鏡銘の敘情性』『書道

全集』第二卷月報第一九號、平凡社

郭錫良 一九八六『漢字古音手冊』、北京大學出版社

鄂州市博物館 二〇〇二『鄂州銅鏡』、中國文學出版社

笠野毅 一九八〇『中國古鏡の內包する規範』『日本民族文化と

その起源』考古篇、新日本教育圖書株式會社

笠野毅 一九八三『清明なる鏡と天』『考古學の新視角』、雄山閣

出版

笠野毅 一九九五『凍石華』鏡銘の釋讀と解釋』『王朝の考古學』、雄山閣出版

河南南陽市文物考古研究所 二〇〇八『河南南陽市陳棚村六八號漢墓』『考古』第一〇期

裘錫圭 一九八一『昭明鏡銘文中的「忽穆」』『文史』一二

高去尋 一九四一『評漢以前的古鏡之研究』『淮式』之時代問題

『中央研究院歷史語言研究所集刊』一四

高文 一九八七『四川漢代畫像磚』、上海人民美術出版社

五島美術館學藝部編 一九九二『前漢から元時代の紀年鏡』展覽會圖錄No.一一三、五島美術館

湖南省博物館 一九七九『長沙金塘坡東漢墓發掘簡報』『考古』第五期

湖南省博物館 一九八四『長沙樹木嶺戰國墓阿彌嶺西漢墓』『考古』第九期

湖南省文物管理委員會 一九五七『湖南零陵東門外漢墓清理簡報』『考古通訊』第一期

湖北省荊州博物館 二〇〇〇『荊州高臺秦漢墓』、科學出版社

湖北省博物館 一九七六『光化五座墳西漢墓』『考古學報』第二期

駒井和愛 一九五三『中國古鏡の研究』、岩波書店

小南一郎 一九七三『中國詩文選六 楚辭』、筑摩書房

崔利民 一九九六『長治市博物館收藏的歷代銅鏡』『文物季刊』第四期

櫻井龍彦 一九八四、八五『王子喬・赤松子傳説の研究』一、三

『龍谷紀要』第六卷第一號、第七卷第一號

山西省文物管理工作委員會・山西省考古研究所 一九六〇『太原

東太堡出土的漢代銅器』『文物』第四・五期

山東省荷澤地區漢墓發掘小組 一九八三『巨野紅土山西漢墓』『考古學報』第四期

山東省博物館臨沂文物組 一九七四『山東臨沂西漢墓發現』『孫子兵法』和『孫臏兵法』等竹簡的簡報』『文物』第二期

山東省文物考古研究所 一九九六『山東壽光縣三元孫墓地發掘報告』『華夏考古』第二期

山東省文物考古研究所 二〇〇〇（山下志保譯）『山東臨淄辛店墓地的概述』『渡來系彌生人のルーツを大陸にさぐる』、土井

ケ濱遺跡・人類學ミュージアム・山東省文物考古研究所

三門峽市文物考古研究所 二〇〇七『三門峽向陽漢墓』、北京燕

山出版社

周世榮 一九八六『湖南出土漢代銅鏡文字研究』『古文字研究』

第一四輯、中華書局

淳化縣文化館 一九八三『陝西淳化縣出土漢代銅鏡』『考古』第

九期

准格爾旗文化館 一九九〇『內蒙古準噶爾旗發現一批漢代文物』

『文物』第八期

徐孝忠 一九九一『安徽淮南市發現一座漢墓』『考古』第二期

徐信印・徐生力 一九九一『安康地區出土的古代銅鏡』『文物』

第五期

徐州博物館 一九九七『徐州西漢宛胸侯劉執墓』『文物』第二期

白川靜 一九七六『中國の古代文學（二）史記から陶淵明へ』、

中央公論社

末永雅雄・杉本憲司編 一九八三『徐乃昌藏 中國古鏡拓影』、

木耳社

商承祚 一九三八『長沙古物聞見記』、金陵大學中國文化研究所

昭明 一九九五『陝西鳳翔出土漢鏡舉要』、『文博』第三期

沈令昕 一九五七『上海市文物保管委員會所藏的幾面古鏡介紹』

『文物』第八期

陝西省考古研究院・榆林市文物研究所・靖邊縣文物管理辦公室

二〇〇九『陝西靖邊東漢壁畫墓』、『文物』第二期

陝西省考古研究所 二〇〇一『西安南郊三爻村漢唐墓群清理發掘

簡報』、『考古與文物』第三期

陝西省考古研究所 二〇〇六『陝西投資策劃服務公司漢墓清理簡

報』、『考古與文物』第四期

陝西省文物管理委員會 一九五九『陝西長安洪慶村秦漢墓第二次

發掘簡記』、『考古』第二期

陝西省雍城考古隊 一九八六・一九八一年鳳翔八旗屯墓地發掘簡

報』、『考古與文物』第五期

宋治民 二〇〇六『三面銅鏡銘文釋讀補正』、『考古與文物』第六期

中國科學院考古研究所編 一九五七『長沙發掘報告』、科學出版

社

中國科學院考古研究所編 一九五九『洛陽燒溝漢墓』、科學出版

社

中國科學院考古研究所洛陽發掘隊 一九六三『洛陽西郊漢墓發掘

報告』、『考古學報』第二期

中國社會科學院考古研究所編 一九八〇『滿城漢墓發掘報告』、

文物出版社

趙康民 一九八二『陝西臨潼博物館新徵集的青銅器』、『文物』第

九期

刁淑琴 一九九九『洛陽道北西漢墓出土一件博局紋銅鏡』、『文物』

第九期

刁淑琴・鄭衛 二〇〇二『洛陽西漢五靈博局紋銅鏡』、『中原文物』

第四期

青島市文物局・平度市博物館 二〇〇五『山東青島市平度界山漢

墓的發掘』、『考古』第六期

陳直 一九六三『四種銅鏡圖錄釋文的校訂』、『文物』第二期

藤堂明保 一九六五『漢字語源辭典』、學燈社

永田英正編 一九九四『漢代石刻集成』、同朋舍

中村不折 一九三四『三代秦漢の遺品に識せる文字』美術懇話會

叢書二、岩波書店

南京博物院 一九七九『江蘇盱眙東陽漢墓』、『考古』第五期

南陽市文物考古研究所 二〇〇五『河南南陽牛王廟村一號漢墓』

『文物』第二期

西田守夫 一九六四 a『漢鏡銘補釋——姚皎光鏡の初句について』

『MUSEUM』一五八

西田守夫 一九六四 b『漢鏡銘拾遺——連弧文清白鏡の陳列に當つ

て』、『MUSEUM』一六三

西田守夫 一九八六『方格規矩四神鏡』の圖紋の系譜——刻婁博

局去不羊の銘文をもつ鏡について』、『MUSEUM』四二七號

林裕己 二〇〇六『漢鏡銘について（鏡銘分類概論）——樋口分類

補正試論』、『古文化談叢』第五五號

林已奈夫 一九七三『漢鏡の圖柄二、三について』、『東方學報』

京都第四四冊

林已奈夫 一九七八『漢鏡の圖柄二、三について（續）』、『東方學

報』京都第五〇冊

樋口隆康 一九五三『中國古鏡銘文の類別研究』、『東方學』第七

號(『展望アジアの考古學 樋口隆康教授退官記念論集』、新潮社、一九八三年に再録)

傅嘉儀 一九七九「西安市文管處藏兩面漢代銅鏡」『文物』第二期

寶鷄市博物館・千陽縣文化館・中國科學院自然科學史研究所 一九七六「千陽縣西漢墓中出土算籌」『考古』第二期

包明軍・王偉 一九九七「南陽市漢墓出土銅鏡簡介」『江漢考古』第一期

星川清孝 一九七〇『新釋漢文大系 楚辭』、明治書院

三澤玲爾 一九九四「楚辭と漢鏡銘」『神戸國際大學紀要』四六

孟強 二〇〇三「徐州東洞山三號漢墓的發掘及對東洞山漢墓的再認識」『東南文化』第七期

山田勝芳 一九八八「中國古代の商と賈―その意味と思想的背景」『東洋史研究』第四七卷第一號

姚軍英 一九九二「河南襄城縣出土西漢晚期四神規矩鏡」『文物』第一期

楊君・王曉玲 二〇〇〇「包頭地區館藏銅鏡介紹」『內蒙古文物考古』第一期

楊桂榮 一九九二「館藏銅鏡選輯(二)」『中國歷史博物館館刊』第一八・一九期

揚州博物館・邗江縣圖書館 一九八一「江蘇邗江胡場五號漢墓」『文物』第二期

揚州博物館 二〇〇〇「江蘇邗江縣姚莊一〇二號漢墓」『考古』第四期

羅振玉 一九二九「漢兩京以來鏡銘集錄」『遼居雜著』

李學勤 一九九七「《博局占》與規矩紋」『文物』第一期

劉玉新 一九九九「山東省東阿縣曹植墓的發掘」『華夏考古』第一期

連雲港市博物館・東海縣博物館・中國社會科學院簡帛研究中心・中國文物研究所 一九九七「尹灣漢墓簡牘」、中華書局

龐文龍 一九九二「岐山縣帖家河村出土的漢代銅器」『考古與文物』第四期

Yets, W. Perceval 1939 *The Cull Chinese Bronzes*, London

Karlgren, Bernhard 1934 *Early Chinese Mirror Inscriptions*, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6

Karlgren, Bernhard 1941 Huai and Han, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 13